

—— 千葉県市原市 ——

いま どみ だい どう
今 富 大 道 遺 跡

1 9 8 8

市 原 市 土 木 部 道 路 建 設 課
財団法人 市原市文化財センター

序 文

市原市は、市の南部域は起伏に富んだ丘陵地帯を形成し、北部域は海岸平野の拡がりを見るなど変化に富んだ自然環境に恵まれた所であります。古く縄文時代にあつては、豊かな海産物を日々の生活の糧として暮らしていた痕跡として、西広・祇園原・能満分区・山倉天王などに大型の環状・馬蹄形貝塚が見られ、弥生時代には養老川・村田川流域の平野部を生活基盤の背景とした遺跡が随所に散在し、また、古墳時代では出現期古墳として話題を集めた神門古墳群や、一遺跡で200基に及ぶ古墳が調査された諏訪台古墳群をはじめとする多くの古墳群が、更に、奈良・平安時代にいたって国分二寺が建立され、往時における房総の経済・文化の中心地として栄えた所であります。

このように古代遺跡の豊富な市原市は、首都東京の近郊に位置しているため、宅地造成やゴルフ場の建設による開発行為が頻繁に行われ、市内における道路網の整備も着々と進められている現状にあります。が、こういった市民のより良い生活環境を提供する開発行為は、私たちの祖先が残した貴重な文化遺産である遺跡(埋蔵文化財)と重複することが多く、工事に先立つ事前調査も増加の一途をたどってまいりました。

今回、ここに報告する今富大道遺跡も、市原市が進めております道路網整備工事に伴う埋蔵文化財調査として発掘調査を施行したものであります。当センターでは、過去5年間に道路工事関連事業だけでも、草刈貝塚(草刈・西広線)、上大堀遺跡・山田橋遺跡(君塚・小田部線)、御座目古墳(五井駅東口線)、烏掘込貝塚・東四辻遺跡(市道166号線)、中林遺跡(市道111号線)、下中貝遺跡・能満番面台遺跡(市道114号線)などの調査を行ってまいりましたが、こういった文化財を後世に継承して行くことは、我々市民に課せられた一つの責務であると思われまます。調査により得られた成果を学術資料として、あるいは郷土市原の歴史解明の一助として広く市民の方々にも活用され、埋蔵文化財保護思想の涵養のため役立つことを切望するところであります。

最後に、調査にあたり御指導・御協力を賜りました千葉県教育庁文化課、市原市土木部道路建設課、市原市教育委員会文化課をはじめとする諸機関、諸氏に対し厚くお礼申し上げます。

昭和63年3月25日

財団法人市原市文化財センター
理事長 星 野 一 郎

例 言

1. 本書は、千葉縣市原市今富大道1055－1番地他に所在する今富大道遺跡の調査報告書である。
2. 調査は、市原市(道路建設課)による市道2135号線改良に伴う埋蔵文化財調査として実施したものである。
3. 発掘調査及び整理作業等は、以下のとおり行った。
発掘（確認調査） 昭和61年5月1日～昭和61年5月31日
担当 石田広美・米田耕之助
（本調査） 昭和61年6月2日～昭和61年9月30日
担当 米田耕之助・田中清美
整理作業 昭和62年4月1日～昭和62年9月30日
担当 米田耕之助
4. 本書の原稿執筆は、今富大道遺跡出土の石器を近藤敏が、それ以外については米田耕之助が行った。
5. 発掘調査から整理作業の過程で、以下の諸機関から御指導・御協力を賜った。
千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会教育指導部文化課、
市原市土木部道路建設課
6. 本調査における調査範囲は、県文化課の決定・指示による。

(財)市原市文化財センター組織表

昭和61年度(発掘調査)

役 員

理 事 長 星 野 一 郎 (教育委員会教育長)
副理事長 横 濱 辰 夫 (教育委員会教育指導部長)
常務理事 岩 見 一 民 (専任)
理 事 滝 口 宏 (早稲田大学名誉教授)
理 事 寺 村 光 晴 (和洋女子大学教授)
理 事 海 上 信 久 (姉崎神社宮司)
理 事 松 崎 良 一 (市企画部長)
理 事 斎 藤 栄 亮 (市総務部長)
理 事 地 引 希 壹 (市都市部長)
理 事 松 下 隆 (市総務部財政課長)
監 事 斎 藤 崇 雄 (教育委員会総務課長)
監 事 白 鳥 一 夫 (市会計課長)

職 員

庶務課 課 長 田 丸 萬 富
主 事 補 大 鐘 光 江
事 務 員(嘱託) 秋 田 晴 美
事 務 員(嘱託) 藤 澤 ひ と み
事 務 員(嘱託) 石 渡 あ ゆ み
調査課 課 長 清 藤 一 順
主 幹 石 田 広 美
主 幹 山 口 直 樹
主任調査研究員 宮 本 敬 一
主任調査研究員 米 田 耕 之 助
調 査 研 究 員 田 中 清 美
調 査 研 究 員 浅 利 幸 一
調 査 研 究 員 大 村 直
調 査 研 究 員 近 藤 敏
調 査 研 究 員 高 橋 康 男
調 査 研 究 員 田 所 真
調 査 研 究 員 木 對 和 紀
調査研究員(嘱託) 田 中 新 史
調査研究員(嘱託) 半 田 堅 三
調査研究員(嘱託) 鈴 木 英 啓
事 務 員(嘱託) 高 浦 貞 子
事 務 員(嘱託) 長谷川いづみ

(4 月 1 日現在)

昭和62年度(整理事業)

役 員

理 事 長 星 野 一 郎 (教育委員会教育長)
副理事長 大 野 皎 (教育委員会教育指導部長)
常務理事 岩 見 一 民 (専任)
理 事 滝 口 宏 (早稲田大学名誉教授)
理 事 寺 村 光 晴 (和洋女子大学教授)
理 事 海 上 信 久 (姉崎神社宮司)
理 事 飯 山 英 雄 (市企画部長)
理 事 宮 崎 芳 雄 (市総務部長)
理 事 地 引 希 壹 (市都市部長)
理 事 安 藤 隆 一 (市総務部財政課長)
監 事 斎 藤 崇 雄 (教育委員会総務課長)
監 事 元 吉 末 喜 (市会計課長)

職 員

庶務課 課 長 田 丸 萬 富
主 事 補 大 鐘 光 江
事 務 員(嘱託) 秋 田 晴 美
事 務 員(嘱託) 石 渡 あ ゆ み
調査課 課 長 清 藤 一 順
主 幹 石 田 広 美
主 幹 加 藤 正 信
主任調査研究員 宮 本 敬 一
主任調査研究員 米 田 耕 之 助
調 査 研 究 員 田 中 清 美
調 査 研 究 員 浅 利 幸 一
調 査 研 究 員 大 村 直
調 査 研 究 員 近 藤 敏
調 査 研 究 員 高 橋 康 男
調 査 研 究 員 田 所 真
調 査 研 究 員 木 對 和 紀
調査研究員(嘱託) 田 中 新 史
調査研究員(嘱託) 半 田 堅 三
事 務 員(嘱託) 高 浦 貞 子
事 務 員(嘱託) 田 中 裕 子

(4 月 1 日現在)

本文目次

序 文

理事長 星 野 一 郎

例 言

(財)市原市文化財センター組織表 (昭和61年度調査、昭和62年度整理)

第1章 序 説	1
I. 調査に至る経緯と経過	1
II. 遺跡の立地と環境	1
III. 調査の方法	7
第2章 検出された遺構・遺物	8
I. A地区の遺構・遺物	8
II. B地区(1～3)の遺構・遺物	20
III. C地区の遺構・遺物	24
IV. D地区(1・2)の遺構・遺物	64
V. E地区の遺構・遺物	69
VI. F地区の遺構・遺物	83
VII. 今富大道遺跡出土の石器	93
VIII. 性格不明な大型遺構	98
第3章 ま と め	100
I. 遺構について	100
II. 遺物について	103
III. おわりに	106

挿 図 目 次

第1図	今富大道遺跡の位置と周辺の主な遺跡分布図	第35図	C地区遺構内出土土器拓影図(7)
第2図	確認調査時トレンチ配置図	第36図	C地区遺構内出土土器拓影図(8)
第3図	本調査地域の位置と範囲図	第37図	C地区遺構内出土土器拓影図(9)
第4図	調査区域全体図(A～F地区)	第38図	C地区遺構内出土土器拓影図(10)
第5図	A地区検出遺構分布図	第39図	C地区遺構内出土土器拓影図(11)
第6図	A地区検出遺構実測図(1)	第40図	C地区遺構内出土土器拓影図(12)
第7図	A地区検出遺構実測図(2)	第41図	C地区遺構内出土土器拓影図(13)
第8図	A地区遺構内出土土器拓影図(1)	第42図	C地区遺構内出土土器拓影図(14)
第9図	A地区遺構内出土土器拓影図(2)	第43図	C地区遺構内出土土器拓影図(15)
第10図	A地区遺構・包含層内出土土器拓影図(3)	第44図	C地区遺構内出土土器拓影図(16)
第11図	A地区遺構内出土土器拓影図(4)	第45図	C地区遺構内出土土器拓影図(17)
第12図	A地区遺構内出土土器拓影図(5)	第46図	C地区遺構内出土土器拓影図(18)
第13図	B1・B3地区検出遺構分布図	第47図	C地区遺構内出土土器拓影図(19)
第14図	B3地区検出遺構実測図	第48図	C地区遺構内出土土器拓影図(20)
第15図	B3地区遺構内出土土器拓影図	第49図	C地区遺構内出土土器拓影図(21)
第16図	B2地区検出遺構分布図	第50図	C地区遺構内出土土器拓影図(22)
第17図	C地区検出遺構分布図(1)	第51図	C地区遺構内出土土器拓影図(23)
第18図	C地区検出遺構分布図(2)	第52図	C地区遺構内出土土器拓影図(24)
第19図	C地区検出遺構分布図(3)	第53図	C地区遺構内出土土器拓影図(25)
第20図	C地区検出遺構分布図(4)	第54図	C地区遺構内出土土器拓影図(26)
第21図	C地区検出遺構実測図(1)	第55図	C地区遺構内出土土器拓影図(27)
第22図	C地区検出遺構実測図(2)	第56図	C地区出土土器拓影図(28)
第23図	C地区検出遺構実測図(3)	第57図	D地区検出遺構分布図
第24図	C地区検出遺構実測図(4)	第58図	D2地区検出遺構実測図
第25図	C地区検出遺構実測図(5)	第59図	D2地区遺構内出土土器拓影図(1)
第26図	C地区検出遺構実測図(6)	第60図	D2地区遺構内出土土器拓影図(2)
第27図	C地区検出遺構実測図(7)	第61図	D2地区遺構内出土土器拓影図(3)
第28図	C地区検出遺構実測図(8)	第62図	D2・E地区検出遺構分布図
第29図	C地区遺構内出土土器拓影図(1)	第63図	E地区検出遺構分布図
第30図	C地区遺構内出土土器拓影図(2)	第64図	E地区検出遺構実測図(1)
第31図	C地区遺構内出土土器拓影図(3)	第65図	E地区検出遺構実測図(2)
第32図	C地区遺構内出土土器拓影図(4)	第66図	E地区検出遺構実測図(3)
第33図	C地区遺構内出土土器拓影図(5)	第67図	E地区遺構内出土土器拓影図(1)
第34図	C地区遺構内出土土器拓影図(6)	第68図	E地区遺構内出土土器拓影図(2)
		第69図	E地区遺構内出土土器拓影図(3)

第70図 E地区遺構内出土土器拓影図(4)
第71図 E地区遺構内出土土器拓影図(5)
第72図 E地区遺構内出土土器拓影図(6)
第73図 E地区遺構内出土土器拓影図(7)
第74図 F地区検出遺構分布図
第75図 F地区検出遺構実測図(1)
第76図 F地区検出遺構実測図(2)
第77図 F地区検出遺構実測図(3)
第78図 F地区検出遺構実測図(4)
第79図 F地区遺構内出土土器拓影図(1)

第80図 F地区遺構内出土土器拓影図(2)
第81図 F地区遺構内出土土器拓影図(3)
第82図 F地区検出遺構(溝)実測図
第83図 今富大道遺跡出土土器実測図(1)
第84図 今富大道遺跡出土土器実測図(2)
第85図 今富大道遺跡出土土器実測図(3)
第86図 性格不明大型遺構内土壌堆積状態図
第87図 今富大道遺跡出土土器口縁部径比較図
第88図 今富大道遺跡出土土器底部比較図

図 版 目 次

図版1 今富大道遺跡周辺の航空写真
図版2 調査区最東端区確認調査用トレンチ
今富大道遺跡土層堆積状態
図版3 A地区西部域遺構検出状態
A地区中央部遺構検出状態
図版4 A地区第30号炉穴内遺物出土状態
A地区第30号炉穴検出状態
図版5 A地区第5号・第7号・第8号炉穴検出状態
A地区第7号・第8号・第5号炉穴検出状態
図版6 A地区第38号炉穴内土層堆積状態
A地区第38号炉穴内遺物出土状態
A地区第38号炉穴検出状態
図版7 A地区第37号炉穴検出状態
A地区第43号炉穴検出状態
A地区第26号遺構検出状態
図版8 A地区東部域を東西に走る溝(No.44)内土層
堆積状態
A地区中央部南側より検出された大型遺構
内土層堆積状態
図版9 B3地区東部域遺構検出状態
B3地区東部域遺構検出状態
図版10 B3地区中央部域遺構検出状態
B3地区第59号炉穴検出状態
図版11 B2地区全景
B2地区大型遺構検出状態

図版12 C地区全景
C地区遺構検出状態
図版13 C地区中央部域遺構検出状態
C地区東部域遺構検出状態
図版14 C地区第1号炉穴検出状態
C地区第2号炉穴検出状態
図版15 C地区第3号炉穴及び他遺構検出状態
C地区第4号炉穴検出状態
図版16 C地区第4号・第5号炉穴検出状態
C地区第12号遺構及び第7号炉穴検出状態
図版17 C地区第6号炉穴検出状態
C地区第10号炉穴検出状態
図版18 C地区第36号炉穴検出状態
C地区第20号・第21号・第23号遺構検出状態
図版19 C地区第22号遺構検出状態
C地区第26号遺構検出状態
C地区第9号遺構検出状態
図版20 C地区第11号炉内遺物出土状態及び土層堆
積状態
C地区第26号遺構内土層堆積状態
C地区第6号遺構内遺物出土状態及び土層
堆積状態
図版21 D地区全景
D地区西部域遺構検出状態
図版22 D地区東部域遺構検出状態

D地区第9号・第10号炉穴検出状態
図版23 D地区第1号遺構検出状態
D地区第10号炉穴検出状態
図版24 E地区全景
E地区西部域遺構検出状態・E地区遺構検出状態
図版25 E地区第1号炉穴遺物出土状態
E地区第1号炉穴検出状態
図版26 E地区第8号・第6号遺構及び第5号炉穴検出状態
E地区第16号・第17号炉穴及び第15号遺構検出状態
図版27 E地区第13号炉穴内遺物出土状態
E地区第13号炉穴内土層堆積状態
E地区第19号遺構内遺物出土状態
図版28 E地区第26号炉穴検出状態
E地区第29号炉穴検出状態
図版29 F地区西側部遺構検出状態
F地区東側部遺構検出状態
図版30 F地区西側部遺構検出状態
F地区第10号炉穴検出状態
図版31 F地区第16号炉穴検出状態
F地区第13号炉穴内土層堆積状態
F地区第14号炉穴検出状態
図版32 F地区西側部遺跡検出状態・F地区第11号遺構検出状態
F地区第3号遺構内土層堆積状態
図版33 A地区No.5・8・16・73・43, C地区No.102出土土器
図版34 C地区No.104・105・106a・106c・106e・60出土土器
図版35 C地区No.106c・107・108・109a・109b・110b出土土器
図版36 C地区No.110c・110e・110g・111出土土器
図版37 C地区No.110g・111・114・37・11出土土器
図版38 C地区No.62・201, D地区No.9・10・17, E地区No.1出土土器
図版39 E地区No.1・13・21・28, F地区No.1・9出土土器
図版40 1～14＝口縁部, 15・16＝底部
図版41 17～24＝胴部文様(沈線), 25・26＝胴部文様(条痕)
図版42 27～36＝条痕各種
図版43 37・38＝条痕, 39～45＝内面条痕(45のみ底部), 46～51＝口唇部刻目, 52～55＝補修

孔等穿孔部
図版44 今富大道遺跡出土石器

第1章 序 説

I. 調査に至る経緯と経過

市原市が進めている道路網整備の一環としての市内今富と立野を結ぶ市道2135号線改良工事の着工に先行して、市原市長井原恒治より、事業地域内における埋蔵文化財所在の有無及びその取扱いについての照会が、市原市教育委員会教育指導部文化課に提出された。これを受けて市原市土木部道路建設課、市原市教育委員会教育指導部文化課及び、千葉県教育庁文化課の三者によって協議を重ねた結果、事業地域内における埋蔵文化財については、発掘調査を行ない記録・保存とする方針が決められた。

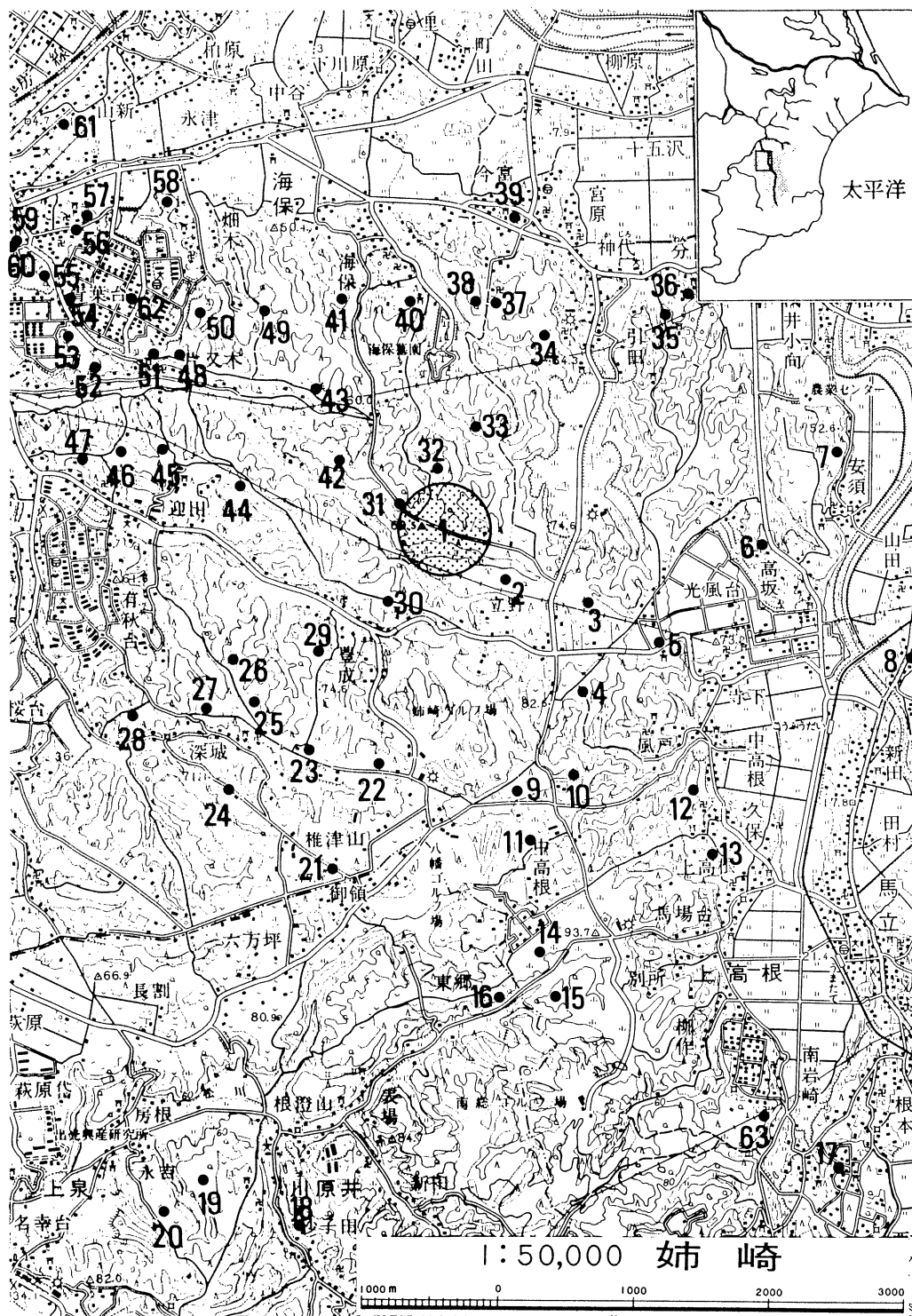
発掘調査は、財団法人市原市文化財センターの委託事業として行なうこととなり、市原市今富大道1055-1番地他の13,500㎡を対象として、内10%について昭和61年5月1日～5月31日の1ヶ月間に亘り確認調査を実施した。その結果、縄文時代早期茅山式期の条痕文土器及び炉穴と思われる落ち込みの密集あるいは、散在する場所のあることが確認され、確認調査の結果を踏まえて、6,100㎡の範囲について本調査の対象区域とするよう、千葉県教育庁文化課の指導を受けた(第3図)。

本調査は、東西に細長く延びる区域を、東側からA～F地区に分け、昭和61年6月1日から同年9月30日の4ヶ月間に亘り実施し、早期茅山式期を主体とする土器群及び、51ヶ所115基を数える炉穴群その他の遺構・遺物を検出した。

整理作業は、昭和62年4月2日～9月30日の6ヶ月間にわたり実施した。

II. 遺跡の立地と環境

東京湾東岸に注入する養老川は、房総半島の東部太平洋岸、日蓮が幼時修し立教開宗を宣言した寺として知られる清澄寺のある清澄山系に源を発し、房総半島を二分するかのように北流する間、山間部では右へ左へと幾多の蛇行を見せながら深い溪谷を作り、高滝付近から徐々に平坦な地域へと移る。以降、蛇行の幅は大きくなり、時として流路を変え流れ行くため中流域から東京湾に至る河口付近にかけて多くのメアンダー(曲流)を見ることができる。養老川の東、西域にはなだらかな台地の広がりが見られ、樹支状の小支谷が多く入り込み、複雑な地形を形成するが、当地域が首都東京の近郊に位置する所から、宅地造成あるいは、レジャー施設としてのゴルフ場の建設があいつぎ、市原市域内には、県下で最も多くのゴルフ場建設が行なわれている。又、東京湾東岸域は、京葉工業地帯として埋め立てられ多くの工場が立ち並び、一大工業地域を形成している。



第1図 今富大道遺跡の位置と周辺の主な遺跡分布図

遺 跡 名	種 別	文献	遺 跡 名	種 別	文献	遺 跡 名	種 別	文献
1 今富大道	炉穴群		24 松掘込	包蔵地		47 高林	包蔵地	
2 唐沢	包蔵地	1	25 上椎木	包蔵地		48 見立林	包蔵地	12
3 山見塚	貝塚	1	26 下椎木	包蔵地		49 畑木小谷	包蔵地	
4 外迎山	古墳他	1	27 志保知	包蔵地		50 房ノ久保	包蔵地	
5 中高根	古墳群	2	28 ヤジ山	貝塚		51 桜台	包蔵地	
6 高坂瓜ヶ岱	貝塚		29 百目木	包蔵地		52 六孫王原	前方後方墳	13
7 安須	古墳群		30 中伊沢	包蔵地		53 毛尻	集落地	14
8 二日市場	廃寺	3	31 海保野口	塚群		54 原	前方後円墳	15
9 大街道	包蔵地		32 諸久蔵	貝塚		55 鶴窪	前方後円墳	
10 中高根掘込	貝塚		33 大作頭	貝塚		56 鬼子母神	貝塚	16
11 南原	包蔵地	4	34 東野	古墳群		57 天神山	前方後円墳	17
12 上の山	古墳群		35 分目	貝塚		58 要害	包蔵地	
13 上高根	貝塚	5	36 分目	古墳群		59 釈迦山	前方後円墳	
14 萩ノ原北	包蔵地	6	37 今富峯ノ下	貝塚		60 山王山	前方後円墳	18
15 萩ノ原	寺院・集落	7	38 本山	貝塚		61 二子塚	前方後円墳	19
16 川原井	廃寺	8	39 今富塚山	前方後円墳		62 徳部台	古墳・集落	
17 吉野	古墳群		40 八幡台	貝塚		63 報恩寺	古墳群	
18 川原井樋瓜	集落	9	41 海保	古墳群	10			
19 永吉台	集落地		42 尾沢	包蔵地				
20 遠寺原	集落		43 尾沢谷	包蔵地				
21 深城	貝塚		44 片又木	炉穴他	11			
22 豊成沖ノ台	包蔵地		45 カブシ谷	包蔵地				
23 一本松	包蔵地		46 特長台	包蔵地				

文 献

1. 木對和紀・山口直樹「外迎山遺跡」「唐沢遺跡」「山見塚遺跡」『市原市文化財センター年報 昭和60年度』財団法人 市原市文化財センター 昭和61年
2. 田中新史「煙滅しつつある中高根古墳群を悼む」『伊知波良2』伊知波良刊行会 昭和54年
3. 郷掘英司他『市原市二日市場廃寺跡確認調査報告』財団法人 千葉県文化財センター 昭和59年
4. 大塚達朗・小川静夫・田村隆「市原市南原遺跡第1次調査抄報」『伊知波良1』伊知波良刊行会 昭和54年
「市原市南原遺跡第2次調査抄報」『伊知波良4』伊知波良刊行会 昭和55年
5. 武田宗久・金子浩昌「千葉県市原郡上高根貝塚」『日本考古学年報14(昭和36年度)』誠文堂新光社 昭和41年
6. 山口直樹「萩ノ原北遺跡」『市原市文化財センター年報 昭和59年度』財団法人 市原市文化財センター 昭和60年
7. 寺門義範他『千葉県萩ノ原遺跡－房総地方の古代寺院研究－』日本文化財研究所 昭和52年
8. 須田勉「房総の古瓦に関する覚書(2)－川原井廃寺跡」『古代第65号』早稲田大学考古学会 昭和54年
9. 江尻和正他『樋瓜遺跡発掘調査団 昭和54年
10. 中村恵次他「海保古墳群」『南大広遺跡・海保古墳群』市原市教育委員会 昭和43年
11. 寺島博『片又木遺跡』財団法人 市原市文化財センター 昭和59年
12. 田中清美「見立林遺跡」『市原市文化財センター年報 昭和57・58年度』財団法人 市原市文化財センター 昭和60年
13. 中村恵次他「前方後方墳の一考察－千葉県市原市六孫王原古墳の調査日」『古代 第55号』早稲田大学考古学会 昭和48年
中村恵次他『千葉県市原市六孫王原古墳の調査』古墳時代研究会 昭和50年
14. 『毛尻遺跡調査報告書』市原市毛尻遺跡調査会 昭和58年
15. 『原1号墳発掘調査概報』千葉県教員委員会 昭和46年
『原遺跡』原遺跡調査会 昭和59年
16. 『姉ヶ崎台遺跡発掘調査概報』立正大学博物館学講座 昭和45年
17. 「姉崎天神山古墳」『千葉県記念物実態調査報告書』千葉県教育庁文化課 昭和55年
18. 大場磐雄他「市原市姉崎山王山古墳」『千葉県遺跡調査報告書』千葉県教育委員会 昭和38年
大場磐雄他「姉崎山王山古墳」市原市教育委員会 昭和38年
『上総山王山古墳発掘調査報告書』市原市教育委員会 昭和55年
19. 「姉崎町二子塚及大塚古墳」『史蹟名勝天然記念物調査 第六輯』千葉県 昭和4年
大場磐雄他「上総国姉ヶ崎二子塚発掘調査概報」『考古学雑誌 第37巻第3号』日本考古学会 昭和27年
杉山晋作「あらたに発見された姉ヶ崎二子塚の鏡」『史館 第4号』市川ジャーナル社 昭和49年
亀井正道「姉ヶ崎二子塚古墳の銀製耳飾」『千葉県立上総博物館報 第31号』千葉県立上総博物館 昭和53年

養老川の河口東側に広がる台地上には、古く上総国分二寺が建立されたことにより、現在も国分寺台の愛称で親しまれている地域である。この地域に宅地造成が行なわれることとなり、昭和47年以降、上総国分寺台遺跡調査団によって国分僧・尼寺の調査を主体として発掘が進められ、造成地域内における他の遺跡についても調査が施されている。縄文時代では、西広貝塚、祇園原貝塚の大型馬蹄形貝塚をはじめとする遺跡群、弥生時代では、諏訪台、台、御林跡、蛇谷、国分尼寺下層等々に集落あるいは方形周溝墓などを検出している。又、古墳時代では、神門古墳群のような出現期古墳をはじめ、形象埴輪列のある山倉古墳、一遺跡で200基にもおよぶ古墳が調査された諏訪台古墳群などを見るなど、国分寺台には大遺跡が集中して存在するため、遺跡調査団が解散した後も、(財)市原市文化財センターによって国分寺台遺跡の調査が引き続き行なわれている。

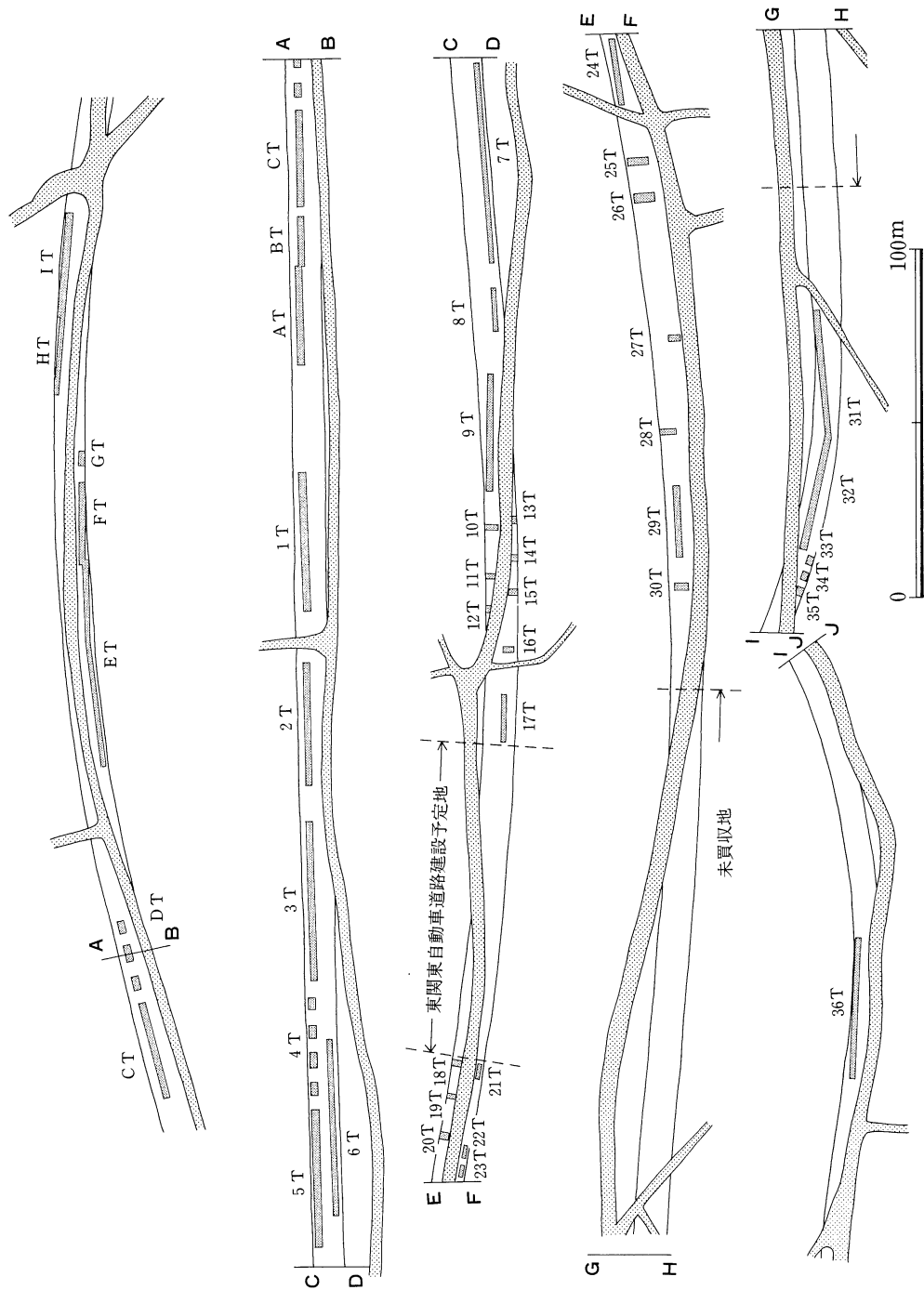
養老川河口の西側に広がる台地上にも多くの遺跡が散在するところであり、今回報告する今富大道遺跡は、第1図に示すように樹支状に入り込む小枝谷に挟まれたわずかな平坦地に位置している。当跡の付近には、縄文晩期末葉の土器を出土した唐沢遺跡(2)、後期の貝塚を含む山見塚遺跡(3)、方形周溝状遺構を検出した外迎山遺跡(4)、宅地造成によって壊滅してしまった中高根古墳群(5)、今富大道遺跡と同様に早期後半の土器、炉穴の検出された片又木遺跡(44)、後期を主体とする貝塚を含む諸久蔵貝塚(32)などをはじめ、図及び表示した遺跡を主な遺跡として挙げることができる。

縄文時代の遺跡は、当地域の台地上平坦部に多く見られ、貝塚を伴うものと伴わない遺跡との別があるが、貝塚例は少なく、東京湾を望む台地縁辺部近くに位置する鬼子母神貝塚(姉崎台貝塚)、養老川を望む沿岸台地上縁辺部に位置する上高根貝塚、及び、台地内奥部に位置する諸久蔵貝塚、深城貝塚など、その占地する地点に異なった様相を見せる例がある。貝塚を伴わない所謂散布地は多く、いたる所で縄文土器が採集されているが、特に南原遺跡では、市原市で最古の土器群が出土している。

弥生時代の遺跡は非常に少なく姉ヶ崎地区で僅かに発見されているにすぎない(毛尻遺跡、徳部台古墳墳丘下遺跡など)。

古墳地代には、台地縁辺部を主として古墳群が集中的に見られ、特に姉崎神社の在る台地上には、山王山、釈迦山、鶴窪、原1・2号、六孫王原、堰頭、天神山などの前方後円墳・前方後方墳などが集中する姉ヶ崎古墳群が著名な古墳群として挙げられるが、他にも海保古墳群、東野古墳群、分目古墳群、安須古墳群、中高根古墳群などが、今富大道遺跡周辺古墳群として挙げられる。一方、集落跡にあつては、当地域における発掘調査例が稀有であるため、僅かに姉崎地区で2・3の遺跡が調査されたにすぎない状況である。

歴史地代に至ると、養老川流域では、当然上総国分僧・尼寺の建立された国分寺台の地が最



第2図 確認調査時トレンチ配置図



第3図 本調査地域の位置と範囲図

も栄えた所である。

養老川を挟んで国分寺台と対峙する当域では、奈良・平安時代以降に比定される遺跡は少ないが、今富大道遺跡の西方に位置する片又木遺跡では、7 軒の住居跡と方形周溝状遺構 5 基などが検出され、同じく南方の外迎山遺跡で方形周溝状遺構 28 基、火葬墓 6 基が検出されている。

又、更に南方には川原井廃寺、東方養老川を挟んで二日市場廃寺なども見ることができ、今後、当地域の発展に伴ない多くの遺跡が調査され資料も増加するものと思われる。

Ⅲ. 調査の方法

当遺跡の調査は、道路改築に伴うものであることから、当然調査対象区域が細長く、確認調査の対象地 13,500㎡は、東西 1.8km もの長さ亘ったものである。故に、確認調査にあたっては、第 2 図に示すように、トレンチを基本として先づ遺構・遺物の検出確認を行った。

その結果、調査対象区の西側部分においては遺構を確認せず、主に東側の部分において、縄文時代早期の条痕文系土器群と炉穴の存在を確認することができたため、炉穴等の遺構集中地域が本調査の対象区域とされた(第 3 図)。

本調査対象区域は、東西 520m の長さに渡っているため、これを便宜的に東側から A 地区、B 地区、C 地区、D 地区、E 地区、F 地区と 6 地区に分け、A 地区から発掘調査を開始した。

調査は、確認調査時に遺構検出面及び、遺物包含状況等についての把握がなされているので、重機により表土、耕作等による攪乱層の除去を行なったが、除去については、遺物包含層上面までを原則とし、攪乱が深く遺物包含層を認め得なかった地域においては、遺構検出面あるいは、ソフトローム上面に至るまで除去した。

それぞれの遺構掘り下げにあたって、先づ検出順に遺構番号を付し、遺構内を充填する土壌の堆積状態観察の目的に供するためにセクションベルトを一本乃至十字、キ字形等に設定し、掘り下げを行なった。後、遺物出土状態あるいは遺構平面形、遺構内充填土壌堆積状態等の図作製を原則縮尺 1/20で行ったが、遺物出土状態等に複雑な状況を呈している個所の図作製には、縮尺 1/10を以て行なった場合もある。

遺構完掘後は、遺構平面図中に出来るだけ細かな地点のレベル読みを行なった。又、写真撮影は、遺構内充填土壌堆積状態、遺物出土状態、遺構完掘後の状態等について原則として撮影し、その他必要に応じ行った。

出土遺物は、遺構内出土については、それぞれの遺構ごとに遺物番号を付し取り上げ、遺構外出土遺物については、出土範囲の確定出来るものは範囲を図化し取り上げ、その他については各区ごとに一括して取り上げている。又、発掘調査区域内に数ヶ所、先土器時代遺構・遺物の存否確認のため小グリッド(4×2m)を設定し掘り下げたが、遺物等は確認出来なかった。

第2章 検出された遺構・遺物

今回の今富大道遺跡における発掘調査は、第1章でも述べたように、道路改築工事に先行する調査のため、調査対象区域が非常に細長く、故に調査区域を東側からA～F地区の6地区に便宜上分割し調査を実施した。そのため、本報告にあたっては、それぞれの地区ごとに検出された遺構・遺物について説明することにした。

I. A地区の遺構・遺物

A地区としたのは、第4図に示したように本調査区域の最東端の10m×72mの範囲である。

その西側部においてB3地区と接しており、南側部分には現在使用している道路が走り、北側部分は畑地となっている。

当地区には、第5図、図版3に見るように遺構が検出されているが、これらの検出遺構は、大別4つの種類に分けることができる。

i：本遺跡の全域に亘って検出されている炉穴。

ii：いわゆるピットと称する類で、炉穴のように焼土を伴うものではなく、形態的にも炉穴が楕円形が多いのに比べ、円形あるいは不整形を呈し、炉穴より一回り小さい規模を有するものが多くある。

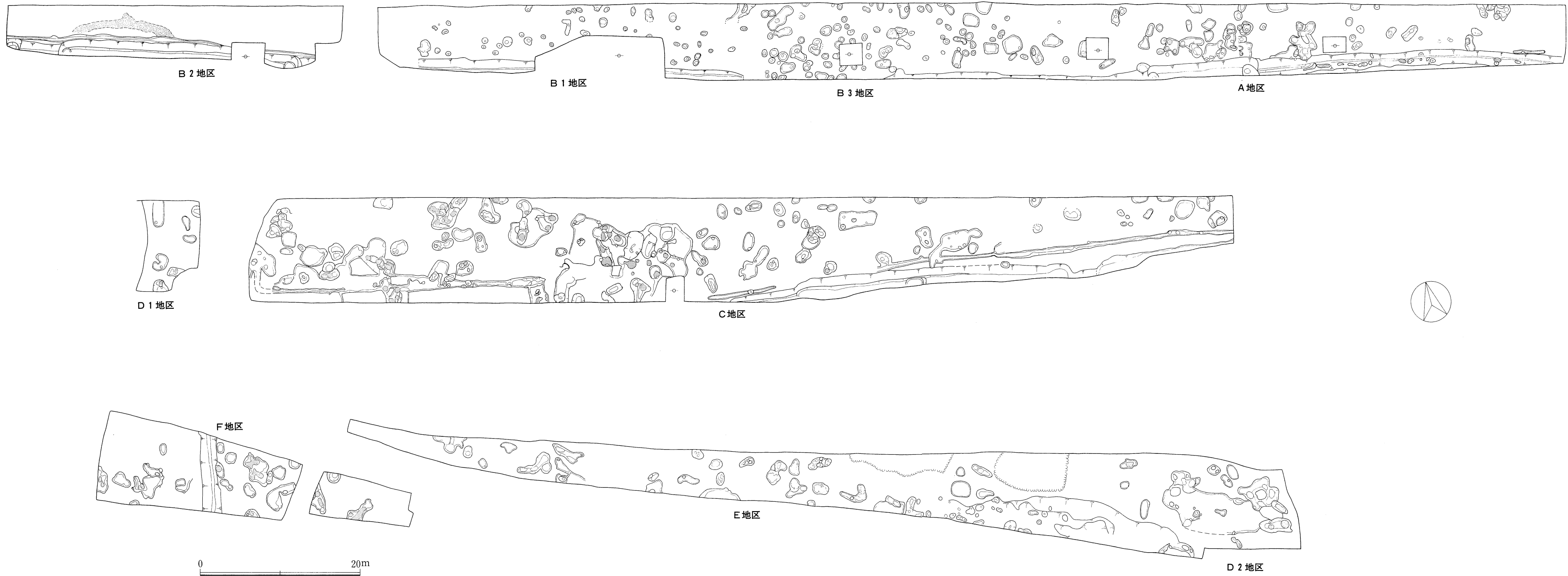
iii：調査区域内の南側部分に東西に延びるように見られる溝跡。

iv：溝跡と同様に調査区内南側部分から検出された極めて大型の遺構で、第5図を見ても明らかなように遺構南側部分が、現道路下に跨っているため当遺構の規模・形状等、全形は把握されていない。

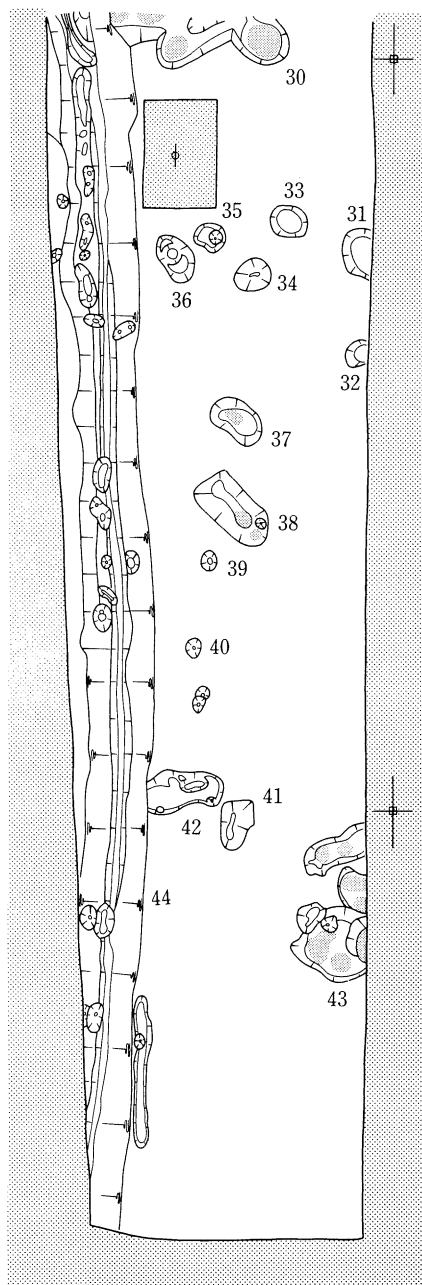
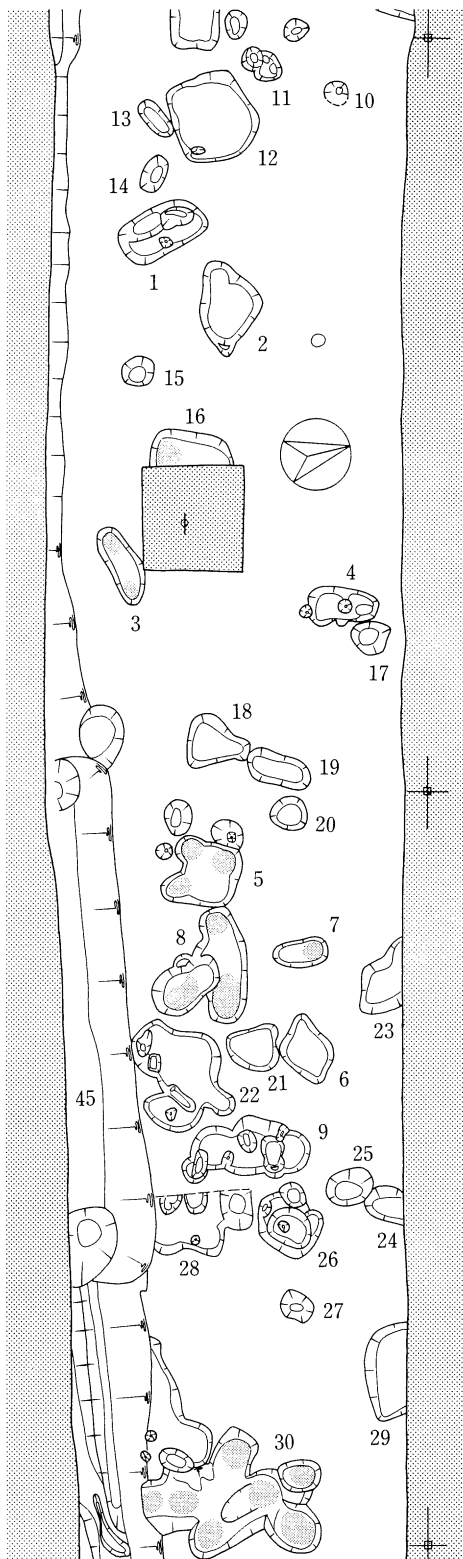
以下、A地区より検出された遺構・遺物について説明を加えるが、4番目に掲げた大型の遺構については、時期的に多遺構と区別されることと、他地区においても同種の遺構が検出されているため、別に項目を設け説明することにした。また、石器類についても出土点数の少ないことからまとめて別項目とした。

i：炉穴

炉穴は、その形態及び焼土の位置・数により様々な状況を呈し、重複する例も多いことから、複雑な様相を見せている。



第4図 調査区域全体図（A～F地区）



第 5 图 A 地区検出遺構分布図 1/200

焼土の数は、第5図に見るように27個所で確認されているが、一つの遺構で複数の焼土を有する例も多い。例えば、No.5・8・30・43などが挙げられるが、これらの中では、第7図に示したNo.30が特に多くの焼土が見られるもので、少なくとも5基以上の重複によるものと考えられる。また、これらの重複関係を有する炉穴とは別に、第6図に掲げた、No.38・3・37・7・16などの炉穴は、単独の炉穴として捉えられる例であるが、No.38・3のように2ヶ所に焼土を持つ例も見られる。

いづれにしても、長軸2～3mほどの細長な楕円形を呈する平面形態を持つ炉穴が、単独あるいは集合して見られるものである(No.43は、第6図に見るように耕作に伴うトレンチヤーによる攪乱が激しく、不明瞭であるが、4基分の炉穴として捉えることができる)。

これらの炉穴は、図に見るように現存部で20～30cmほどの深さを有する例が多いが、かつてはより高い壁面を有していたものと思われる。

炉穴内を充満する土壌には、黒褐色土、暗褐色土、褐色土、黄褐色土、明褐色土などの土層を基調とし、これらにローム粒子あるいは焼土粒子などを混入する土層があり、ほとんどがローム粒子を混入することを特徴としている。

これら炉穴から出土した遺物は、土器が主体を占めているが、それらの内、主なものを第8～12図としてまとめて掲載した。掲載した土器は、No.5・8・16・7・3・34・30・43炉穴から検出されたもの及び、時期の異なる例として包含層から出土した例(第10図31～35)を少量ではあるが、加えてある。

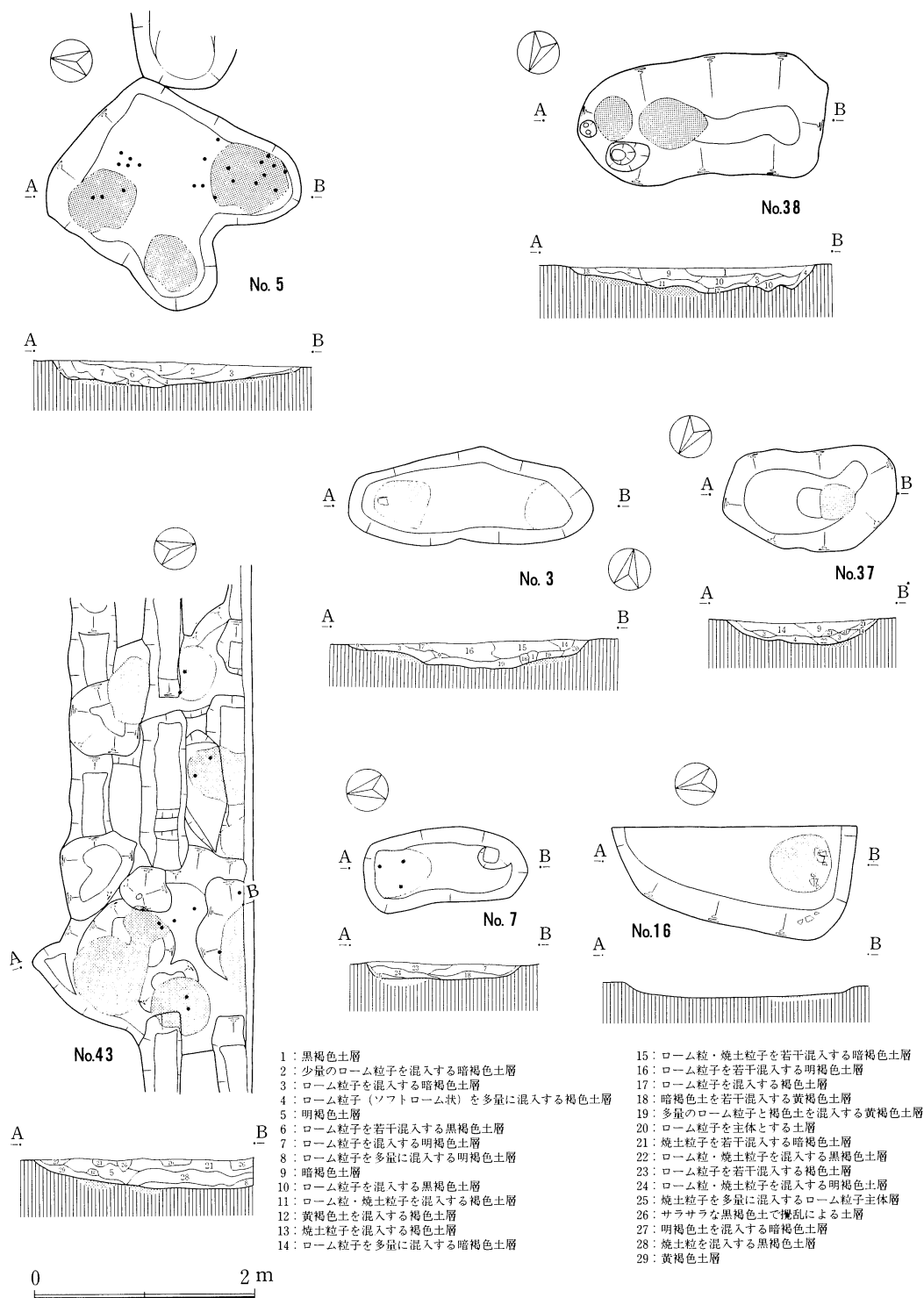
炉穴出土土器は、条痕文を表・裏面に施文することを特色とする広義の茅山式期に属するものである。土器は、完形品として捉えられる例は検出されていないが、口縁部、胴部、底部などの部位別の破片が出土しており、土器全体の形状を大凡把握することができる。

器面を充填する文様は、条痕を主体とするが、条痕文には大別2種を見ることができる。

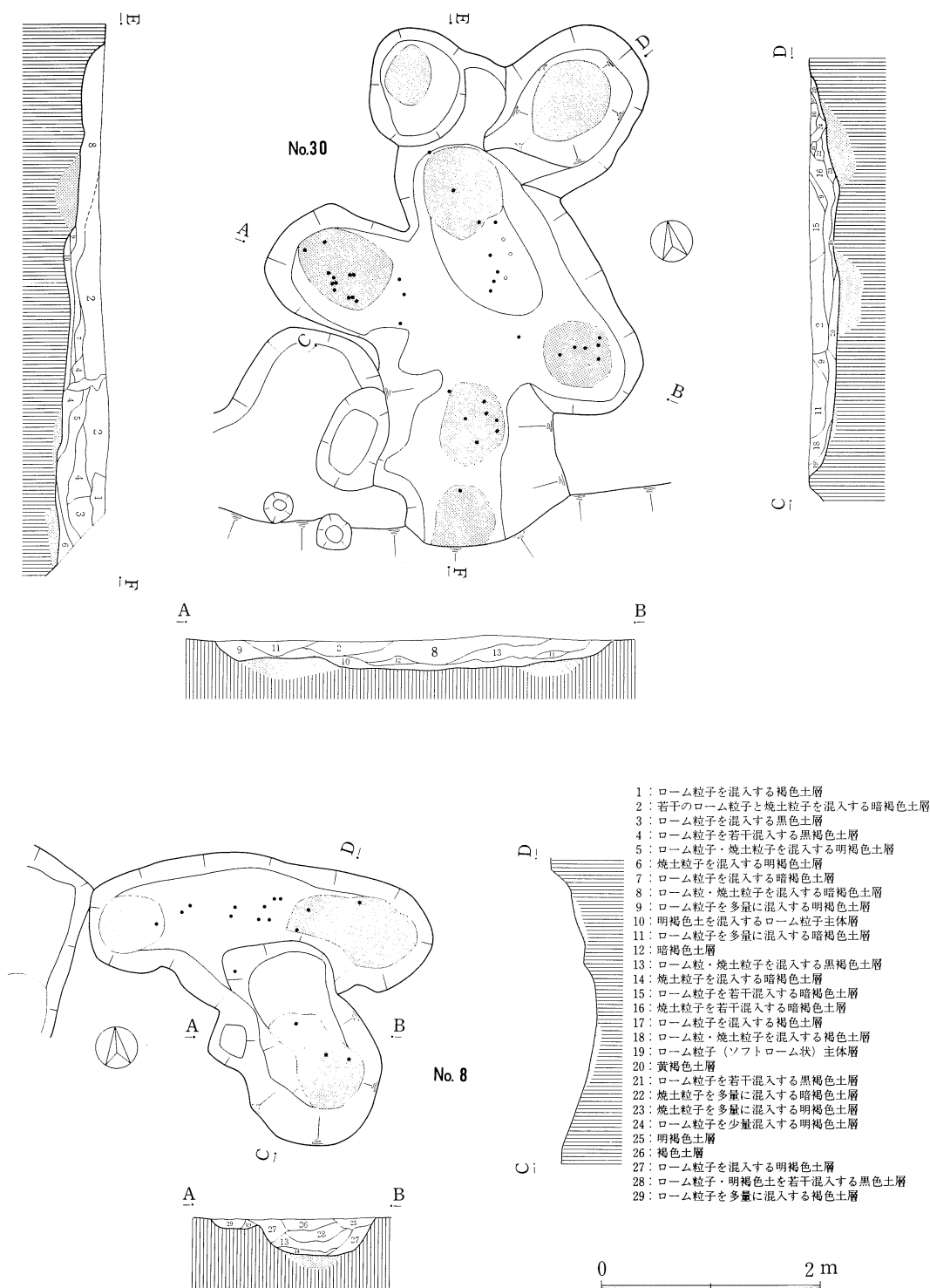
一つは、条痕の幅が2mmほどを有する例であり、いま一つは第8図12に代表される幅1mmに満たない条痕文である。割合的には、2mmほどの幅を持つ条痕が圧倒的多数を占め、極細の幅による条痕文を有する条痕文土器が少量含まれている。また、これら条痕文のみを器面全体に施す例と、条痕文に重ねて沈線等により文様を加える例とがある。

文様は、口縁部にのみ施文され胴部～底部にかけて文様を持つ例はない。口縁部に文様を有する例として15・22・23・44・47・48などが挙げられる。これらには、沈線を直線的に用いるものと、微隆起線文状の文様を用いるもの等がある。いづれも曲線的な文様構成をもつものではなく、直線により三角形を主とする文様構成を見せるものである。また、口唇部に刻目状の沈線を施こした例が幾つか見られる(15・47)。

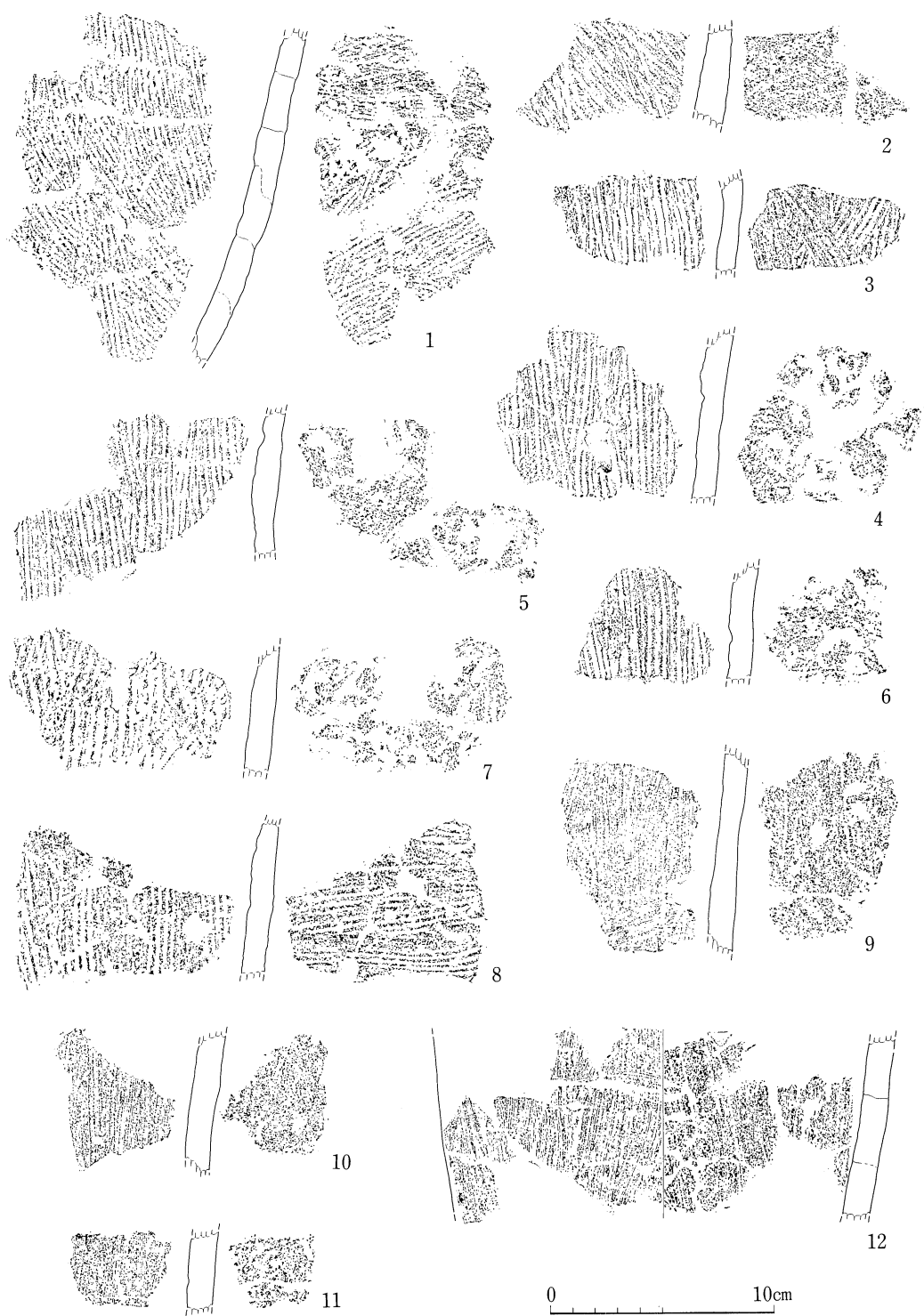
これらの炉穴内出土土器の出土状態は、炉穴底面に密着して出土した例はほとんどなく、い



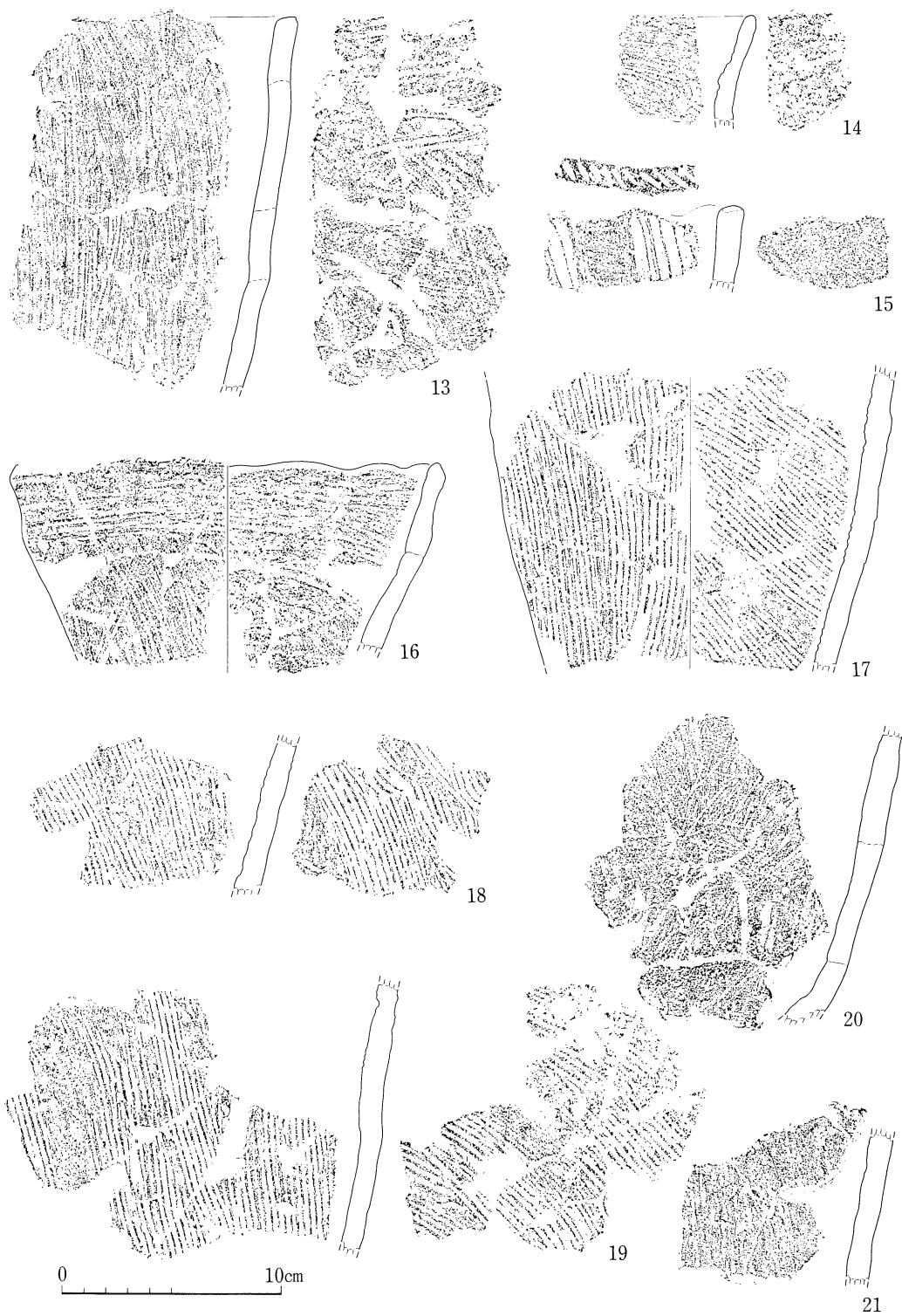
第 6 図 A 地区検出遺構実測図（1）



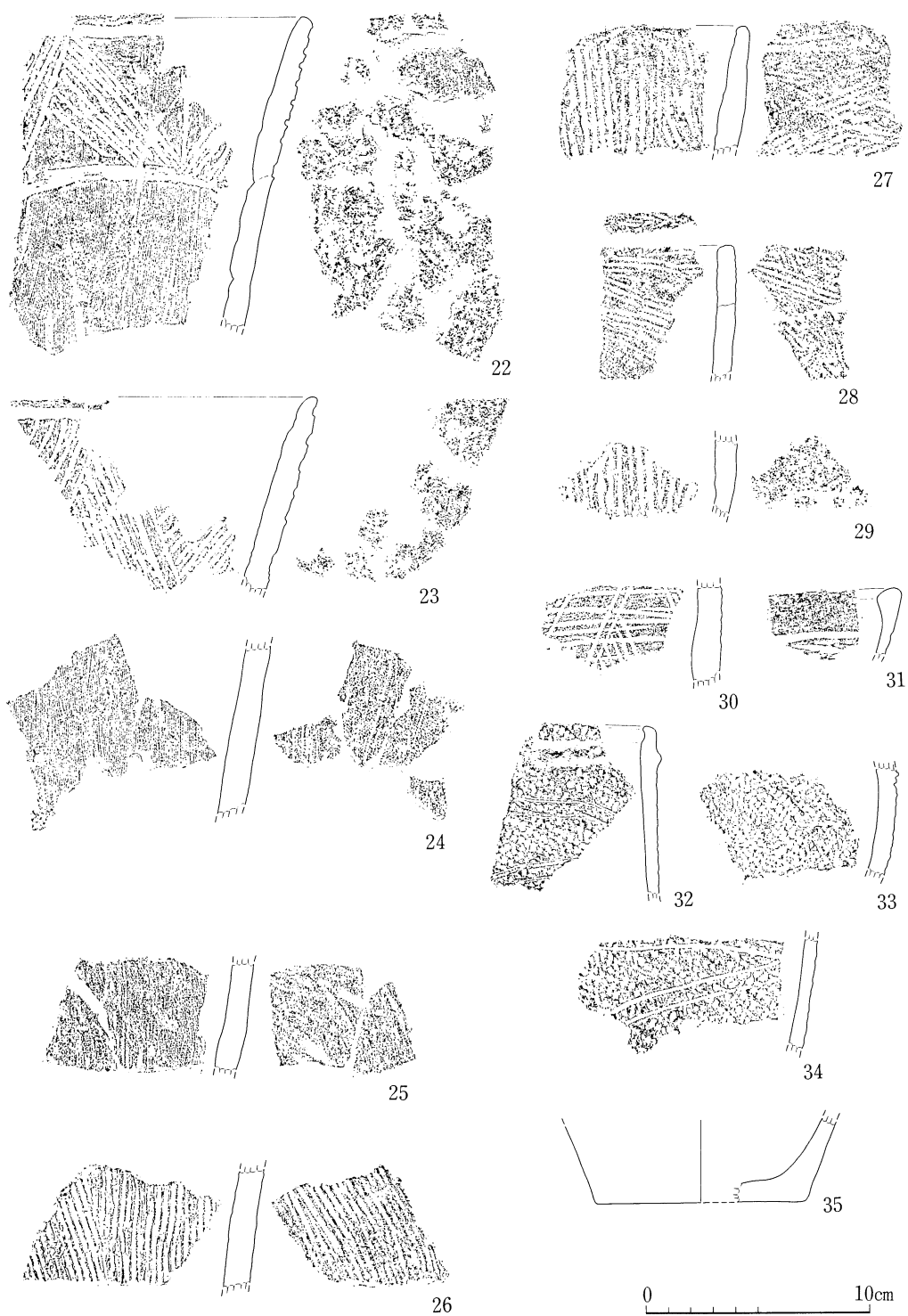
第7図 A地区検出遺構実測図（2）



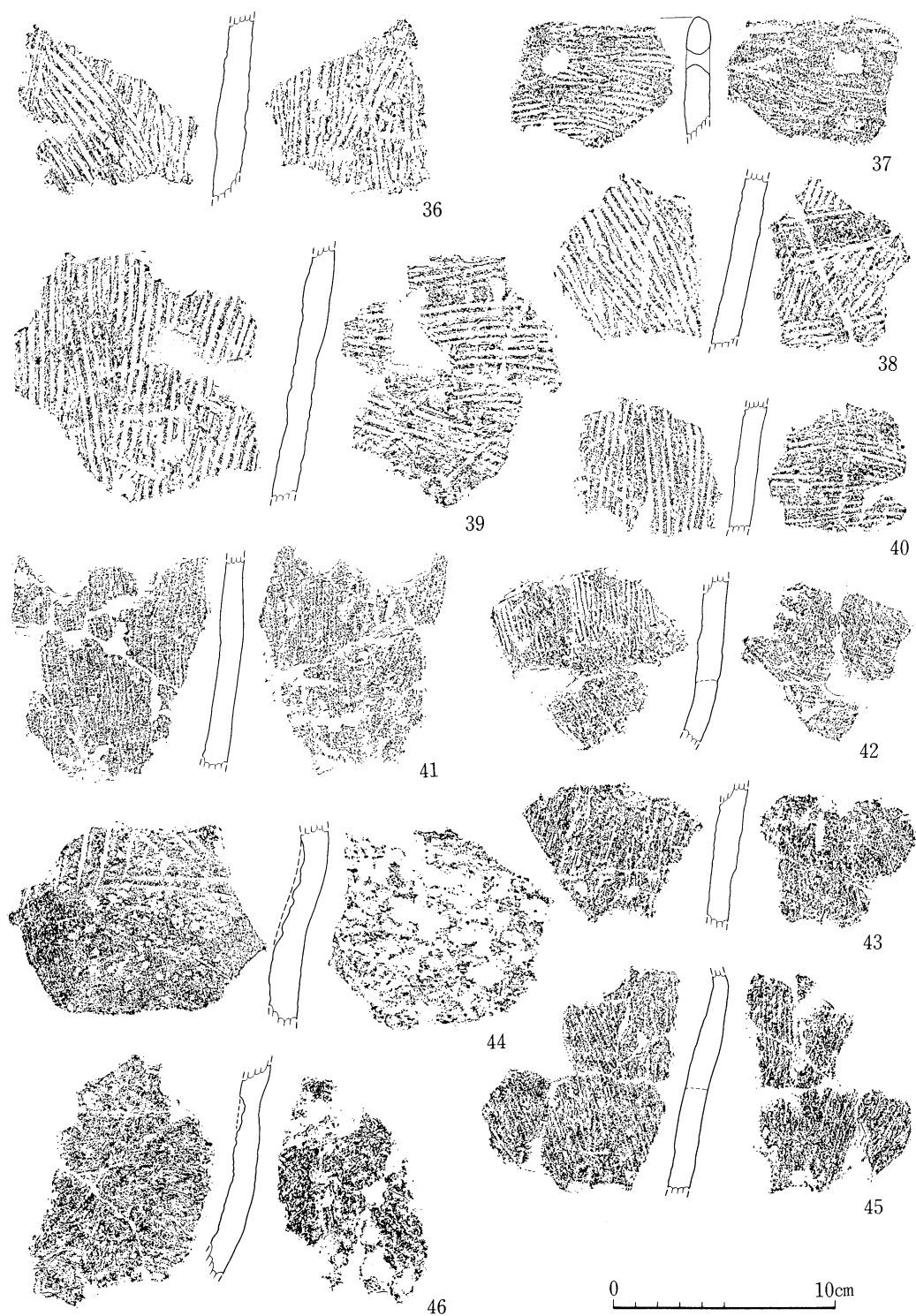
第 8 图 A 地区遺構内 (No. 5) 出土土器拓影图 (1)



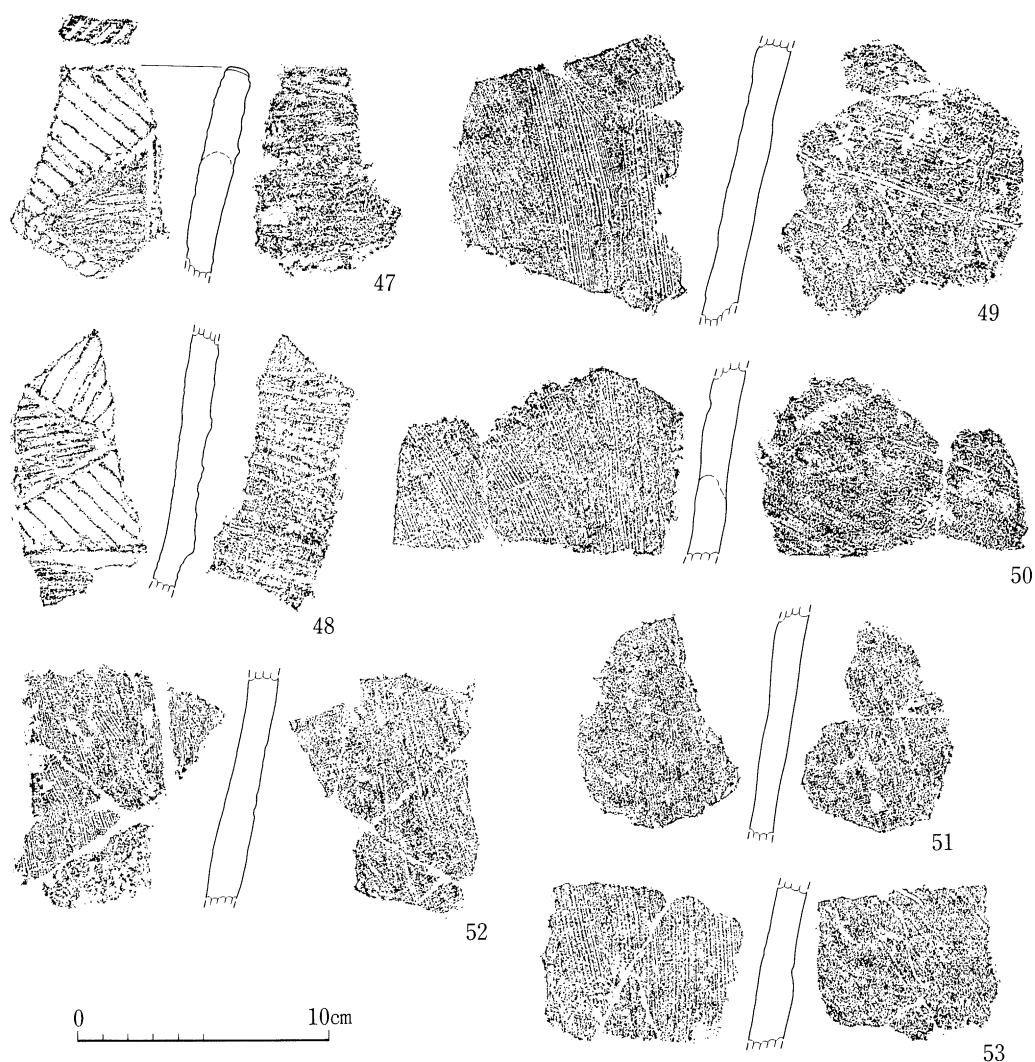
第9図 A地区遺構内 (No. 8・16) 出土土器拓影図 (2)



第10图 A地区遺構内 (No. 7・3・34)，包含層内出土土器拓影图 (3)



第11图 A地区遺構内(No.30)出土土器拓影図(4)



第12図 A地区遺構内（No.43）出土土器拓影図（5）

づれも底面から若干浮いた状態で検出されているが、出土地点の傾向としては、No.5・7・30 炉穴に見るように、焼土の上面から土器片がまとまって出土する傾向が見られる。

炉穴以外の遺構には、前記したようにピット類、溝類、大型遺構などが挙げられるが、これらの遺構は、炉穴と時期を同一にする例は少なく、炉穴に後出するものが多くを占めている。

特に溝及び大型遺構は、宝永の火山灰が遺構内充満土壌中に堆積しており、近世以降の所産と見做されるものである。

ピットの類には、極めて小型の例、あるいは不整形を呈するものなどが多く、木の根等による攪乱の結果生じた例も多いものと思われる。

Ⅱ. B 1 ～B 3 地区の遺構・遺物

B 地区としたのは、第 4 図に示したように、A 地区の西側に連なる範囲であり、調査の進行状態の都合によって、B 地区を更に細分し、B 1・B 2・B 3 地区としている。

B 1 地区と B 3 地区とは連続する調査区域内を発掘の際に生じた土置き場の関係から、便宜的に区分したもので、本来の遺跡の性質・範囲とは、まったく無関係のものである。

当地区には、第13図及び第16図、図版 9～11に見るように、遺構が検出されているが、それらの遺構を見ると、A 地区と同様に、i：炉穴、ii：円形あるいは楕円形・不整形の平面形態を呈するピット類、iii：溝跡、iv：A 地区で大型遺構とし扱ったものと同様な大型遺構、v：道路状遺構などに分けられる。

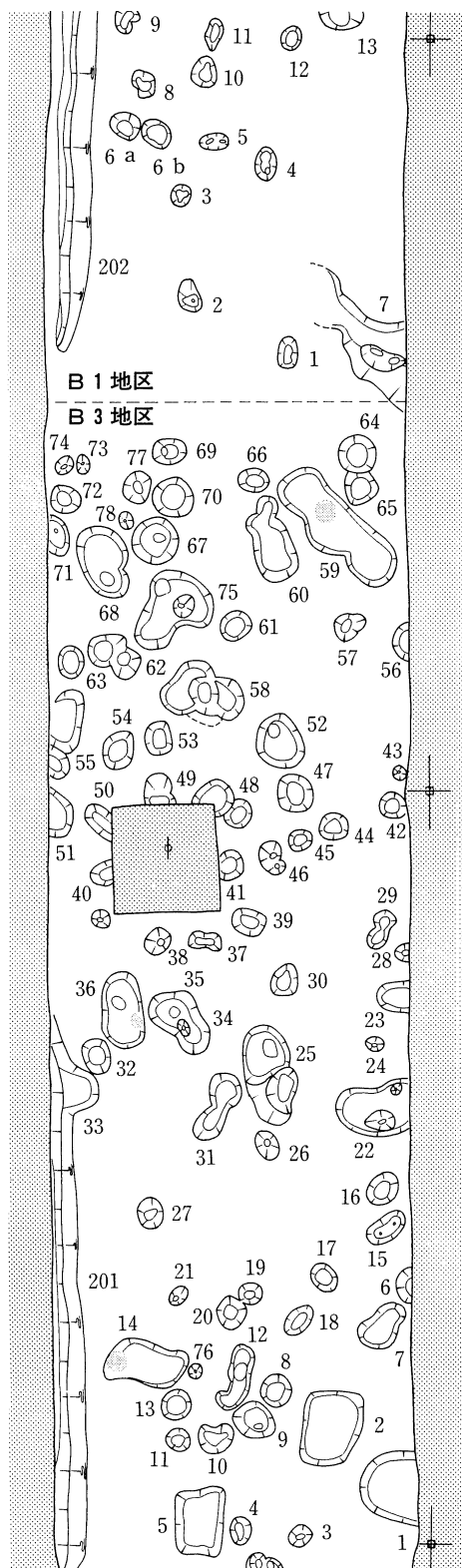
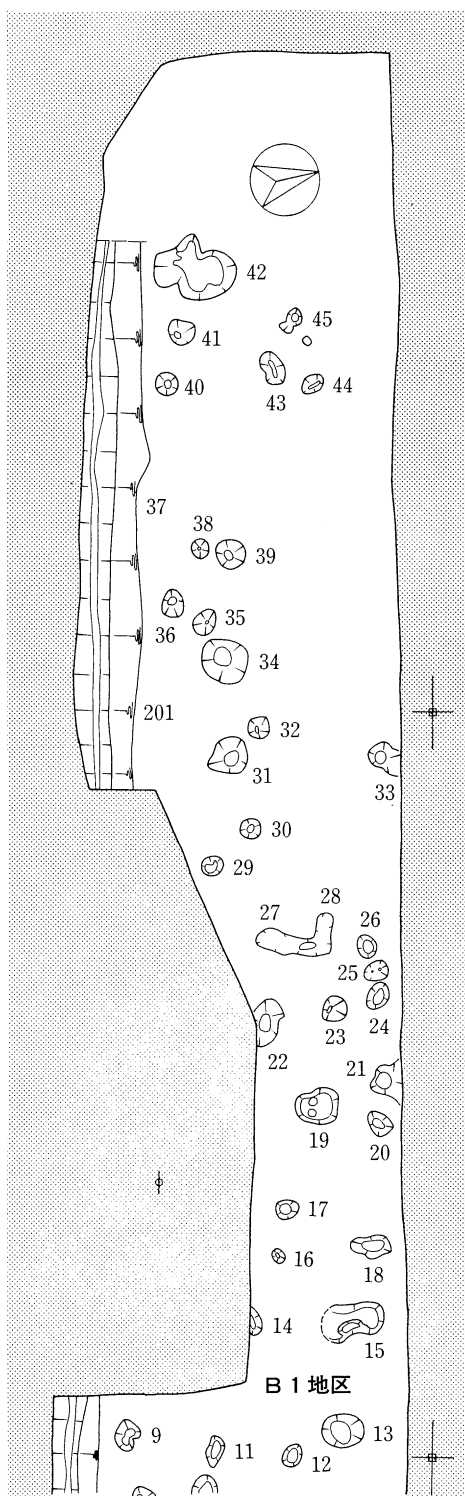
B 1 地区は、第13図に示したように、B 3 地区に連続する西側の部分であるが、当地区では炉穴は検出されていない。当地区においては、遺構分布図を一見しても明らかなように小ピットの類が散在的に検出されている他は、調査区域の南側部分から東西に延びる溝跡が顕著な遺構検出例として挙げられる程度である。小ピットは、径30cm～2 mほどの大きさを有するが、主体的なのは径50cm前後の大きさで、深さ20cm前後の例が多いようである。これらの小ピットは、遺構分布図を見ても明らかなように、斉一性は認められず、ピットの形状面でも様々な様相を見せている。また、これら小ピットに伴出する遺物はほとんどなくピット内充滿土壌にも、軟弱な例もあるところから、人為的に掘り込まれた可能性が低く、木の根等によるピットが多くあるものと考えられる。

B 1 地区の南側に東西に走る溝が 1 条検出されている。確認面での上部幅1.5mほどを有し、底面部で幅0.2～0.3mほど、深さ0.4～0.7mほどの横断面V字形を呈する溝である。溝内を充滿する土壌は、A 地区No.44とした溝跡に近似した状況を見せ、方向的にも同一であるところから、A 地区の溝跡と同一の性格、目的をもって掘り込まれたものと解釈することができる。

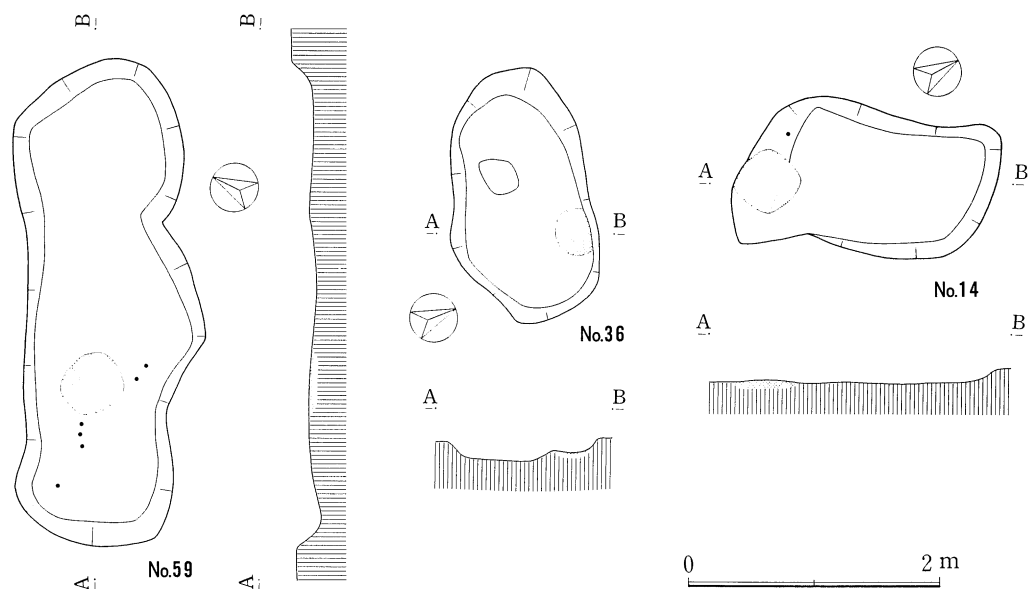
B 3 地区は、西側の B 1 地区と東側の A 地区との間に在る東西30mほどの範囲である。第13図の遺構分布図に見るように、本地区では多数の小ピットが検出されている。

80例ほど検出された小ピットには、径0.2mほどのごく小さなものから、径 2 mほどの大形のピットを見ることができるが、全体的に小ピットの類が大多数を占めている。また、これら小ピット群内に第14図に示したNo.14・36・59とした 3 例の炉穴が検出されている。

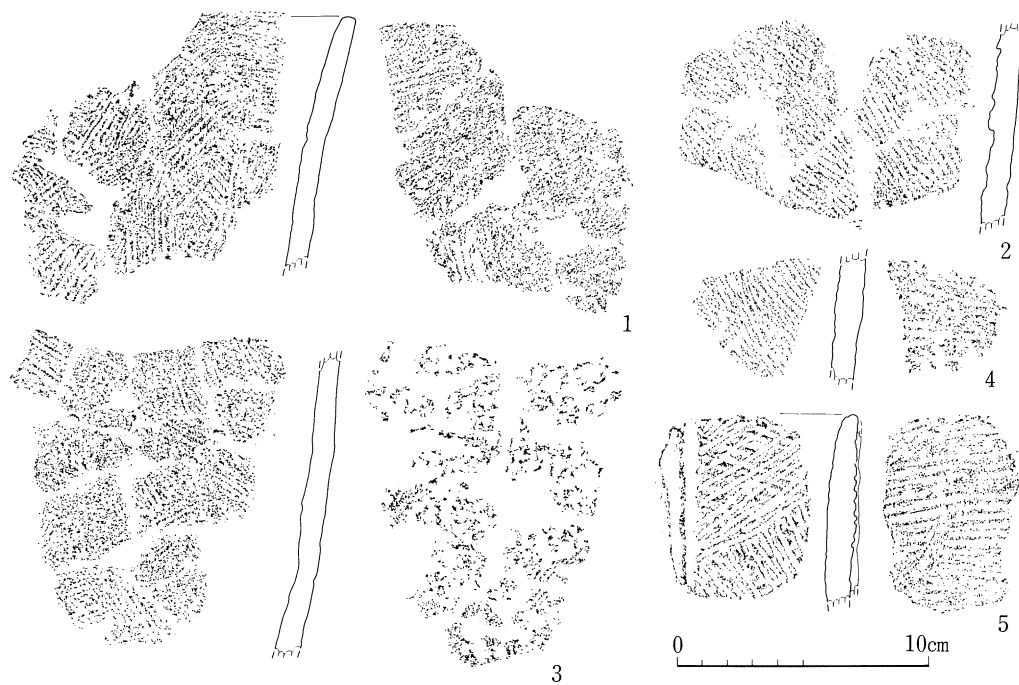
これら 3 例の炉穴は、いずれも単独で検出されたもので、規模に大小の相違はあるものの長楕円形状の平面形を呈し、底面までの深さも現在部で10～20cmほどを有する(もちろん当時の掘り込み面が現存していないため、往時はより深く掘り込まれていたものであろうが)。



第13図 B 1・B 3 地区検出遺構分布図 1/200



第14図 B 3 地区検出遺構実測図



第15図 B 3 地区遺構内 (No.14・59・60) 出土土器拓影図

また、焼土は、いずれも1ヶ所のみ確認されている。

これら、炉穴に伴出した遺物の中から、図化可能な例を第15図として掲げた。

第15図1は、No.14とした炉穴から出土したもので現存部で10cmほどの大きさを有する口縁部破片である。表裏面共に貝殻条痕文を施文することを最大の特徴としたものである。同2・3は、No.59炉穴に伴出した土器片で、いずれも胴部の破片であるが、1同様に条痕文を施文する。

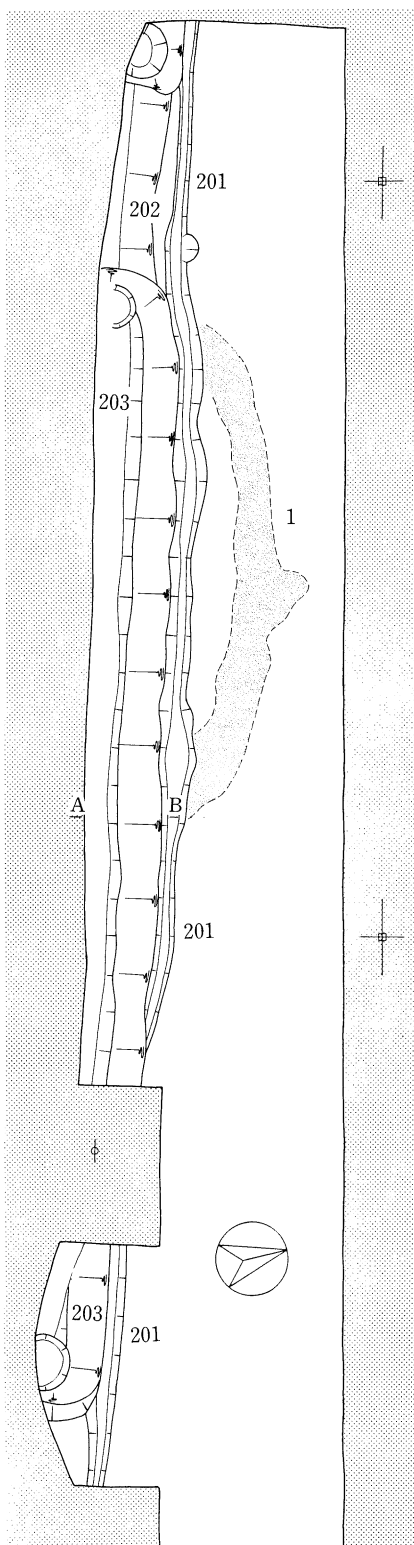
第15図4は、No.60としたピット内から出土した胴部破片である。B3区からは、前述したように多数のピットが検出されているが、伴出遺物は、皆無といった状況であった。その中で、4とした土器片は稀な伴出遺物である。また、第15図5は、表面採集により得られた資料であるが、口縁部破片であり、表面に垂下する隆起線文を貼付する特徴を有するため参考資料として掲載しておいた。

B2地区は、B1地区の西側に設定した区域で、東西40mほどの範囲である。(第16図)

当地区からは、炉穴あるいは、A・B地区に多く見られた小ピットの類は、検出されていない。しかし、他地区では検出されていない道路状遺構が1条検出されている。

道路状遺構は、第16図中に1として示したもので、東西14mほどの範囲に、幅1～1.5mほどの範囲が硬く締まった面として検出されている。当遺構の時期については、伴出遺物、他遺構との関連から近世以降に求められる。

道路状遺構の南側部には、A地区で検出されたのと同様の大型遺構が、B2地区のほぼ全域に渡るように検出されている。



第16図 B2地区検出遺構分布図 1/200

Ⅲ. C地区の遺構・遺物

C地区としたのは、第4図に示したように、B2地区の西側の東西に3m、幅13mほどの範囲である。当地区には、第17～20図に示した如く、炉穴をはじめとする遺構が多く検出されているが、これらの検出遺構は、i：炉穴、ii：炉穴とは異なるピット類で、焼土を伴わないもの、径20cmほどのものから、数mの大きさを有するものまでである。iii：溝状遺構、iv：A・B地区でも検出されている大型遺構の4種に大別される。

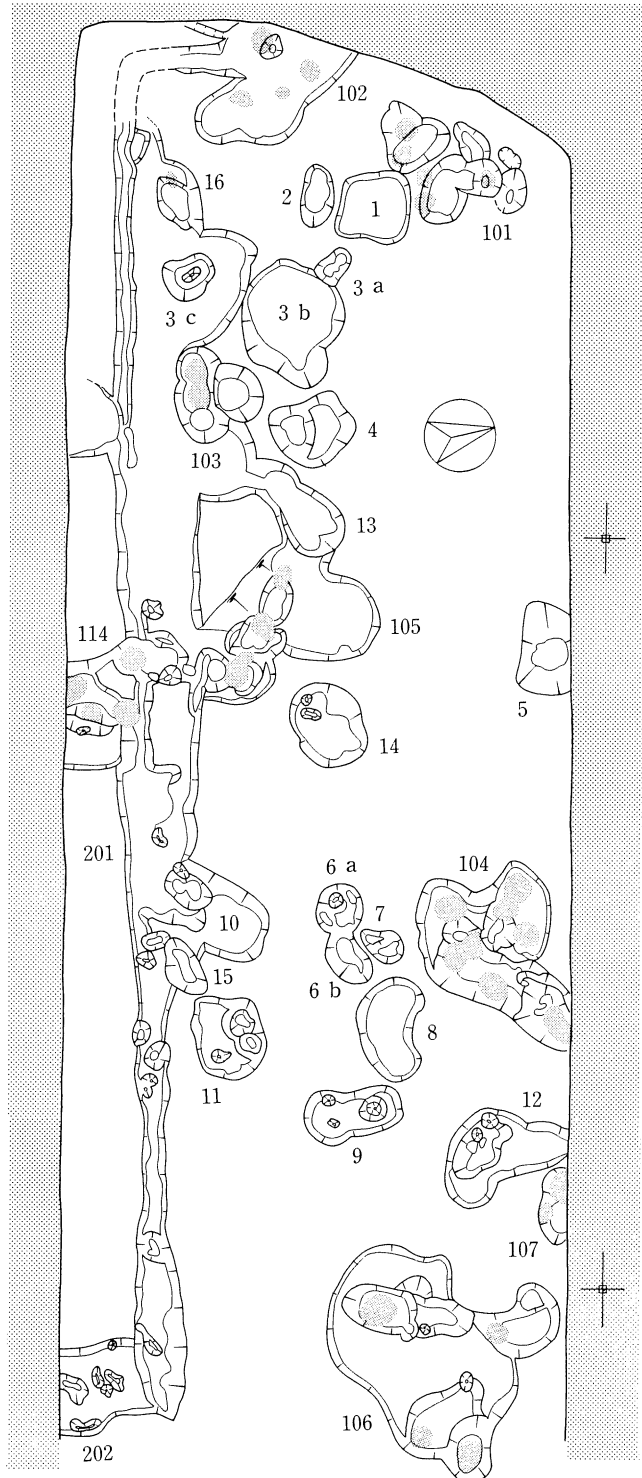
C地区は、今回の調査範囲の中でも中央部に位置する地区であり、炉穴の検出例も他地区に比較して多く、当遺跡の中心部的性格を有する地区といえる。

これら炉穴には、他地区検出の炉穴に比べ第21～24・26～28図に掲げた如く複数の炉穴が重複した例が幾つか見られる。

第21図としたNo.101・102はC地区の西端部から検出された炉穴で、No.101は、焼土を3ヶ所に持つ東側部と、焼土を2ヶ所に残す西側部との遺構である。

No.101炉穴からは、第29図1～5の土器片などが出土している。

いづれも貝殻条痕文のみを施文



第17図 C地区検出遺構分布図(1) 1/200

する土器群である。

No.102(第21図下)は、その西側部が未調査区に跨がるため、全体的な規模は把握されないが、東西3mほどの大きさを有するものであろう。当遺構は、一部南部において南側へ延びる溝跡と重複している。No.102で特徴的なのは炉穴底面部が平坦的であり、焼土面が現検出面で6ヶ所と多く見られることである。

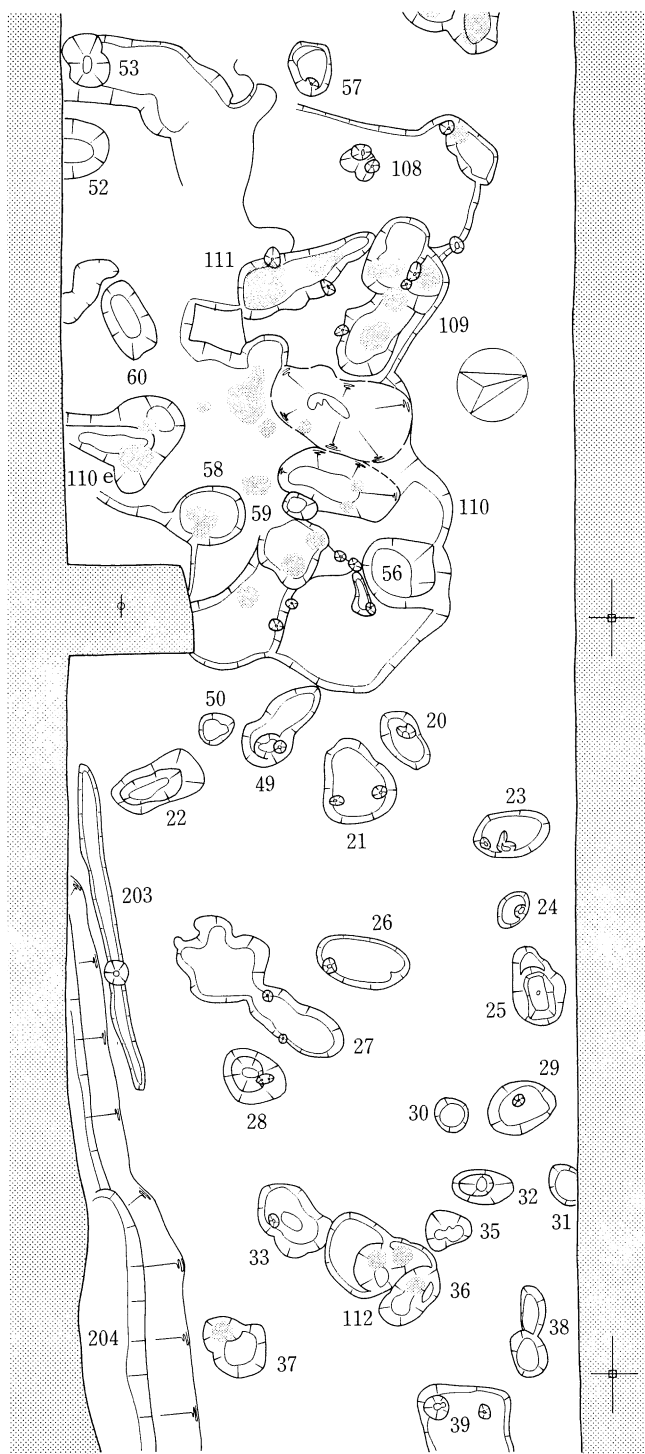
当跡からの出土遺物は多くはないが、第29図6～9に掲げたように荒い条痕、細い条痕を施すもの、あるいは無文状のものなどの土器片が見られた。

No.103(第22図上) 東西2.6m、南北1.2mほどの楕円形を呈する炉穴で、底面に東西に2ヶ所の一部重複する焼土面を有している。

2ヶ所に見られる焼土面は、図中A～Bとした東西方向の断面図中の1～23とした土層が、東側の5～7の土層を切る形で堆積していることから見ても、2つの炉穴の重複であることがわかる。

当跡には、伴出遺物がほとんど見られなかったが、僅かに第29図10の土器片が伴出している。

No.104(第22図下) 7ヶ所に



第18図 C地区検出遺構分布図(2) 1/200

焼土面が確認されている炉穴で、少なくとも4基以上の重複と思われる。

全体の大きさは、南北3m、東西4m強程の規模を持つが、北東部分が未発掘地に延びているため実際の規模はより大きくなるものである。また、形状的には、数基の重複による炉穴であるため、不整形を呈するが、東側部分は細長い楕円形による炉穴、西側部分は円形に近い形状を示す炉穴と考えられる。

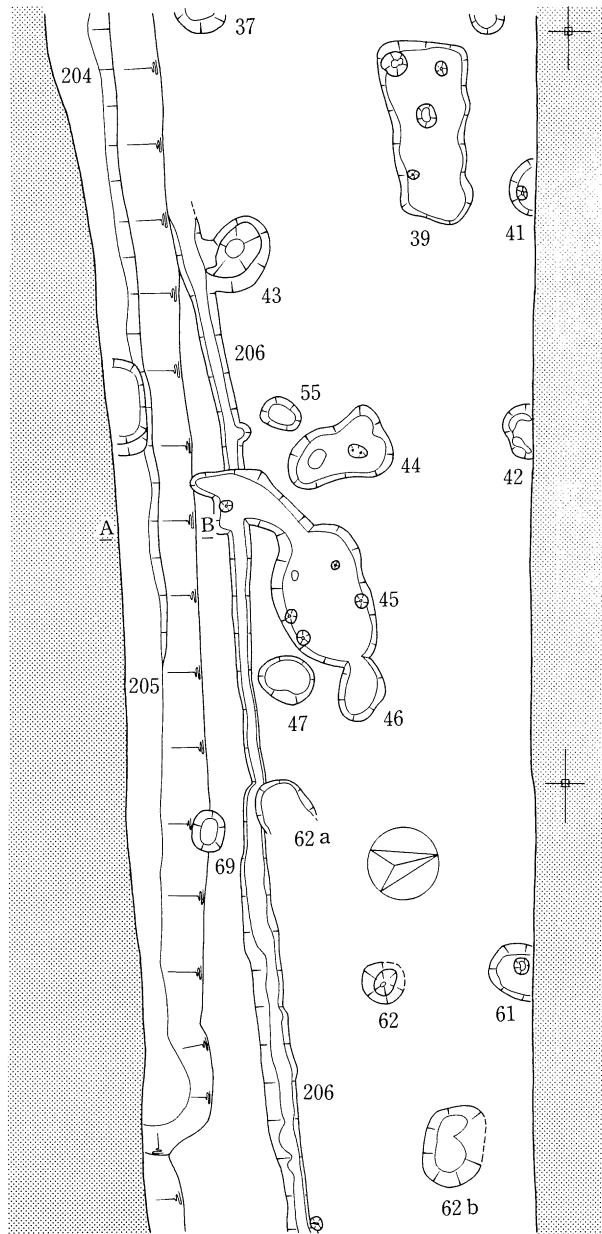
当跡より出土した土器の内、主なものを第30図11～第31図21として掲載した。

これらの土器の中では、11・12が口縁部の形状を捉えることのできる例であり、11は波状に、12は平縁の形状を見せている。また、11は、口縁部と胴部との間に括れをもち、12は、口縁部から底部に至るまで直線的に外返する形態を示している。

文様面では、ミミズ腫れ状の微隆起線文と、斜走する直線的な集合沈線、太目な篋状工見による沈線などにより、口縁部表面に文様

を施こしている例が多いが、口縁部に文様を持つものも、胴部以下及び内面部分は、縦、横、斜方向に貝殻条痕文によって充填されている。

また、12・13のように平行する微隆起線文の間を磨り消し、無文帯をつくる例も見られ、11～13には、口唇部に平行する刻目が施文されている。



第19図 C地区検出遺構分布図(3) 1/200

No.105(第23図上) 3ヶ所に焼土面を有するもので、やはり数基の炉穴により重複した状況を見せている。

3ヶ所にある焼土面は、ピット内の位置などから見て、時間の経過と共に、東西方向に移動していった状況を見せたものである。

また、炉穴の北側に在る円形状のピットと炉穴との関係は、断面図C～Dの9層(ローム粒・焼土粒子を含む暗褐色土層)の堆積状態から時間的に大差なく、炉穴に付設したテラス的性格を有するピットとして捉えることが可能な状況を呈している。

当跡から出土した土器の内、主なものを第31図22～第34図54として掲載した。

これらの土器の中では、22・40・41などが口縁部～胴部の形状を捉えることのできる例であるが、他は、いづれも小破片の状態であるため土器全体の形状を見ることができない。

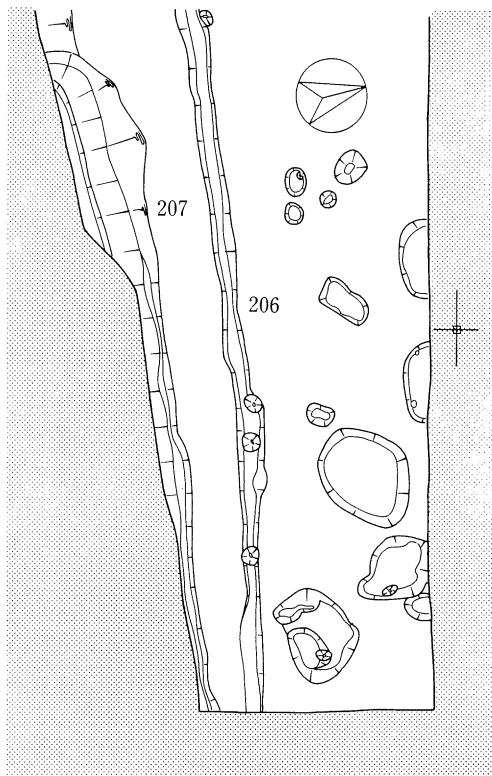
これら破片類は、ほとんどが口縁あるいは胴部の破片であり、僅かに第33図48・49とした2点が底部の状態を捉えることのできる例である。

形状的には、いづれも深鉢形の形状を見せているが、口縁部の形態に若干の差異を見ることが出来る。22は、わずかに外傾するが、直線的な形態を呈し、40は内湾し、41は若干外反しているが、口縁部～胴部にかけて脹らみを持っている。

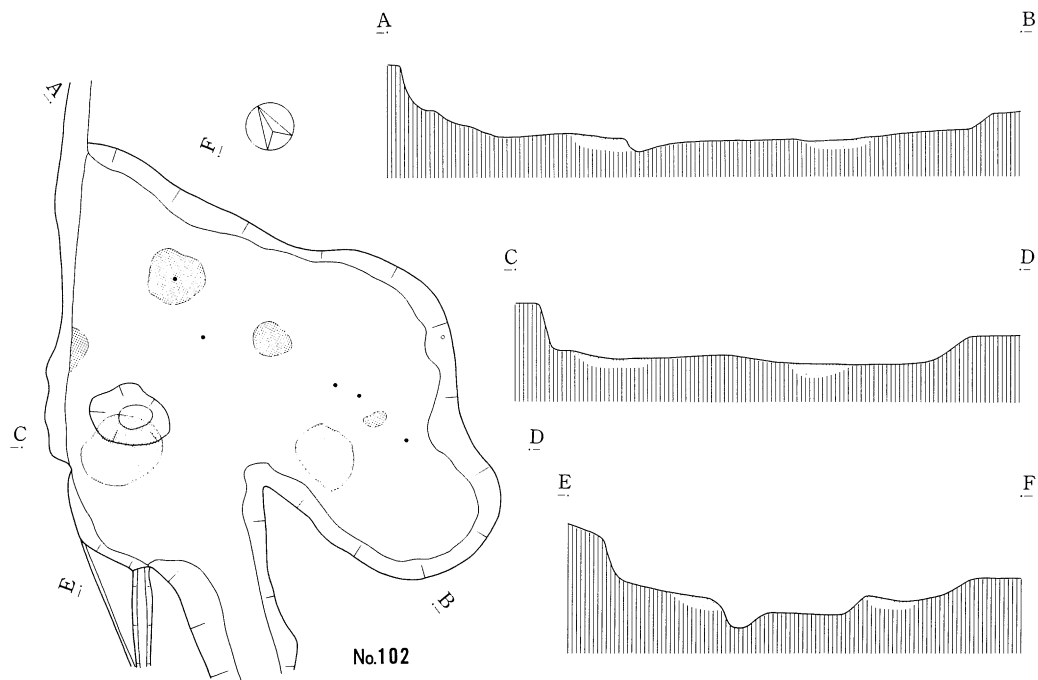
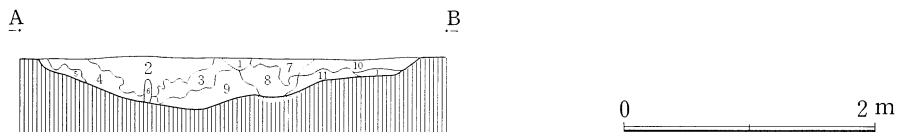
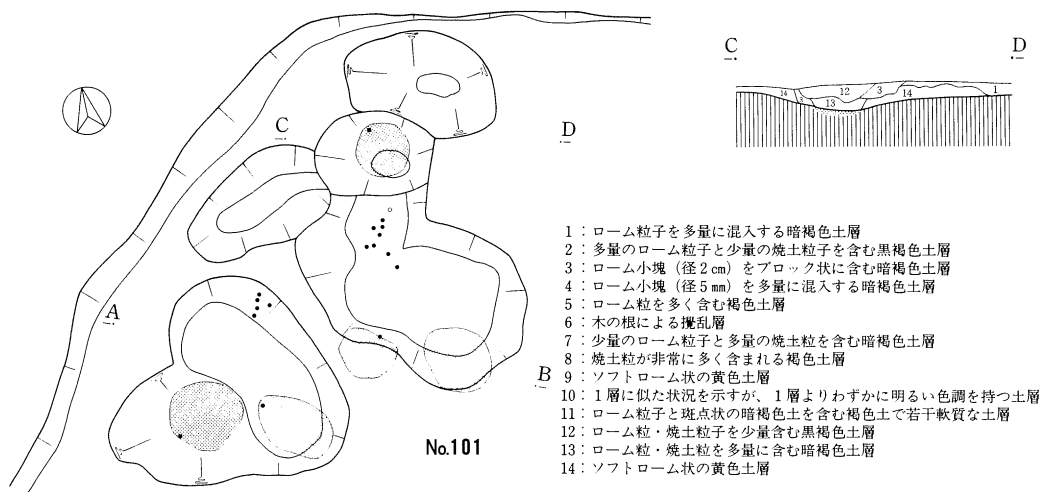
底部は、出土量が少なく僅かに、48・49で底部の形態を知るにすぎないが、いづれも尖底の形態を見せるものの先端から胴部に向かう立ち上がり角度に若干の差が見られる程度である。

文様の面では、図示した土器は条痕文のみによって器面を埋めたもののみであるが、口唇部に刻目を有する例として、23を1点挙げる事が出来る。

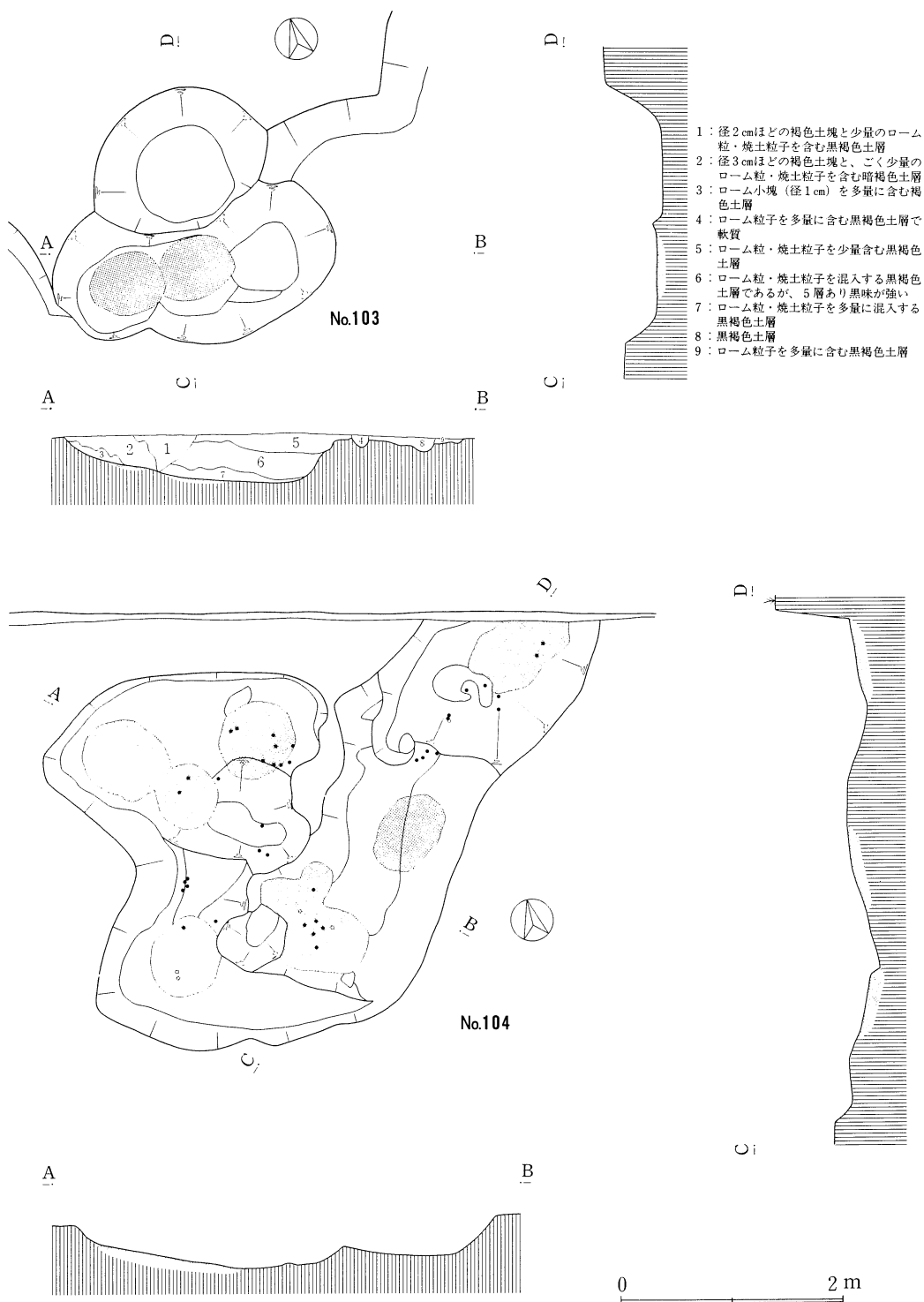
条痕文は、貝殻条痕文であるが、方向、条痕文の幅に相違が見られる。条痕文の方向では、口縁部分のみについて見ても、横走するもの(22・25)、斜走するもの(23)、縦走するもの(24・27)と3種があり、条痕の幅では、29に代表される2mmほどの幅広の例から40以降の土器に見るように、ハケ状の極めて細い例と様々である。また、22・25のように口唇部に条痕を施す例も少量ではあるが出土している。



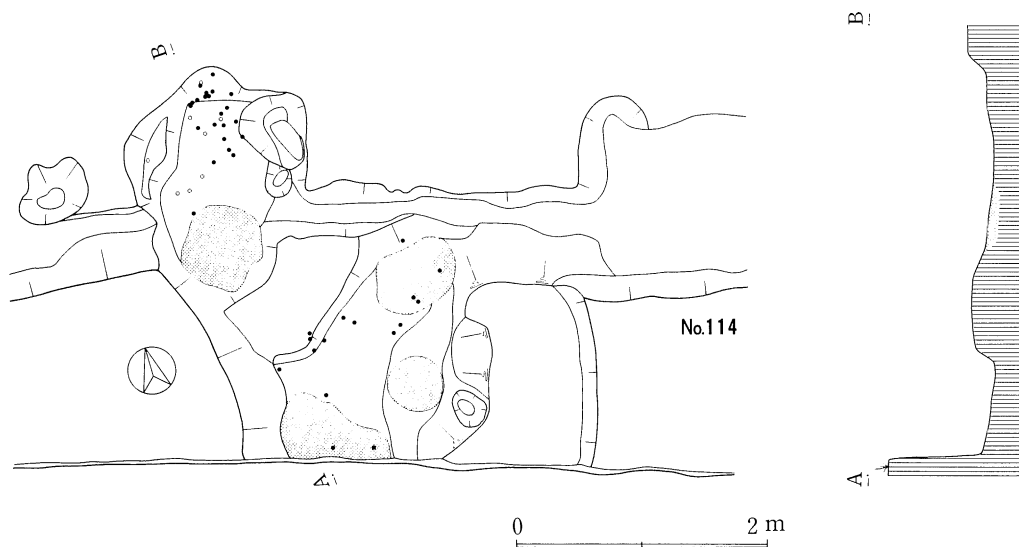
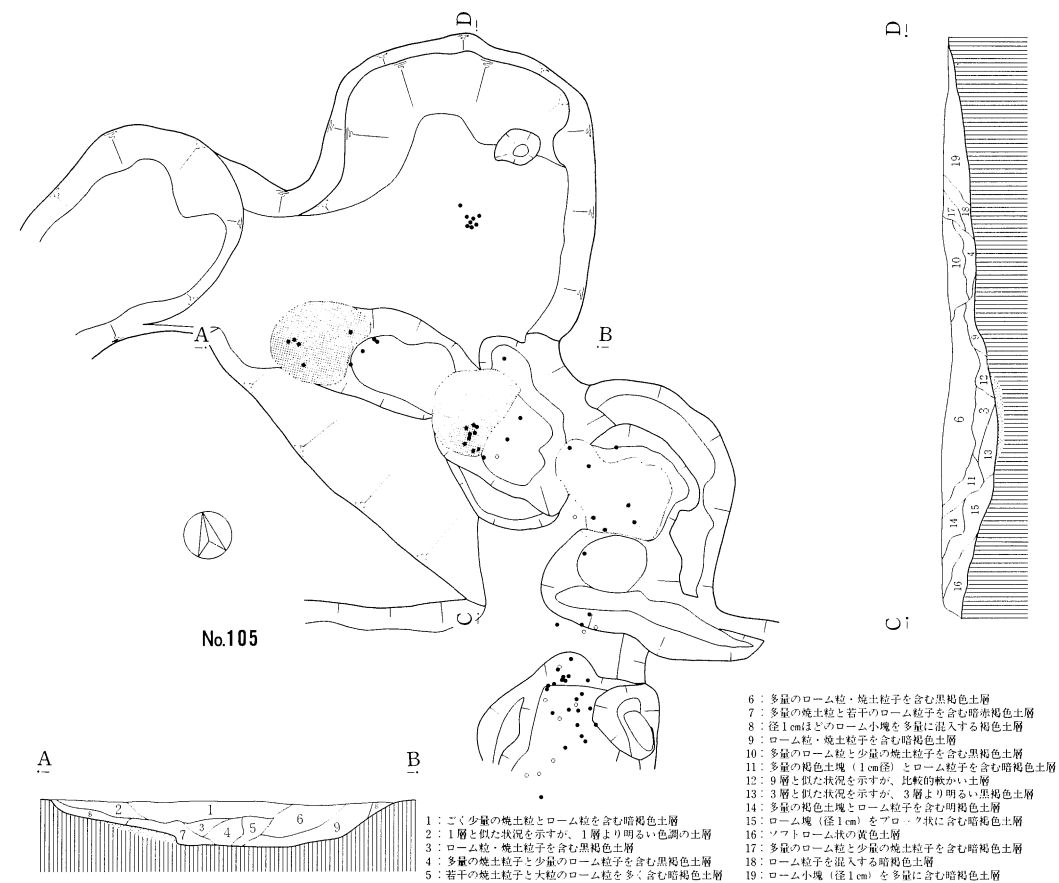
第20図 C地区検出遺構分布図(4) 1/200



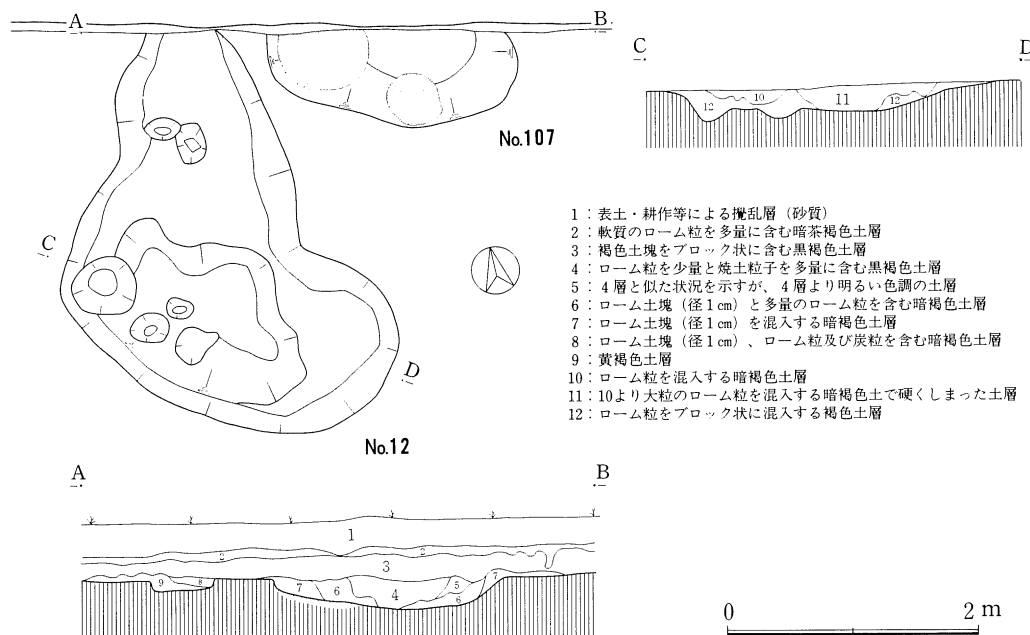
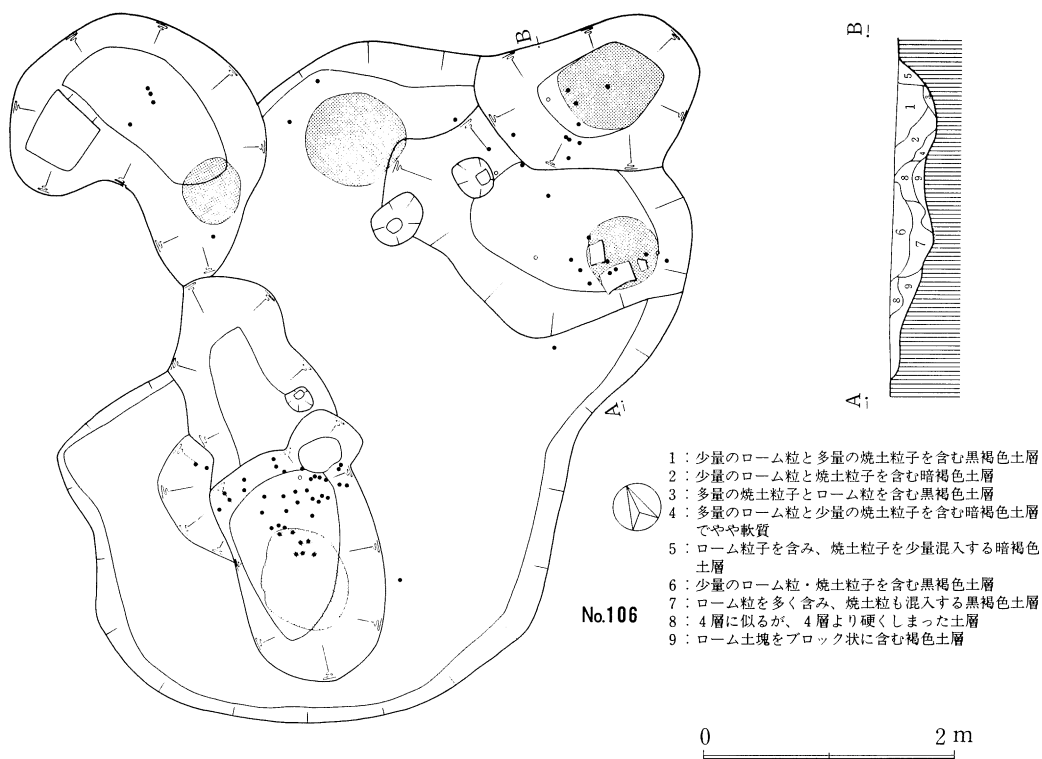
第21図 C地区検出遺構実測図(1)



第22図 C地区検出遺構実測図（2）



第23図 C地区検出遺構実測図（3）



第24図 C地区検出遺構実測図（4）

No.114(第23図下) No.105の南側から検出された遺構で、4ヶ所に焼土面を見ることができる。No.105と同様に数基の炉穴が重複した状況を見せている例であるが、その南側部分が、未調査地域に展開しているため、遺構の全体的な大きさ・形状は把握することができない。

遺物は、北側からの出土が比較的多く見られたが、遺構底面に密着した状態で出土する例はほとんどなく、底面から浮いた状態で発見された例が多い。

No.114から出土した土器には、第51図241～第52図259を挙げることができるが、土器の全体的な形状の捉えられる例は1点もなく、いずれも破片の状態での出土である。

口縁部の形状では、外傾するものがほとんどであるが、口唇部分が若干薄くなる傾向のものがいくつか見られる(243・247)。また、255のように内湾するものもあり、波状口縁となる255・256が含まれている。

255・256は、文様面においても、ミミズ腫れ状の微隆起線文を伴い、他とは異っている。

255・256以外の土器片は全て条痕文のみを表裏面に施したものであるが、先のNo.105から出土した土器に比べ、ハケ状の極めて細い条痕施文例の出土が少ない。

No.106(第24図上) 5ヶ所に焼土面を有する遺構で、少なくとも4基以上の炉穴による重複遺構である。東西6m、南北3.4mの不整楕円形を呈する遺構に重なるように、西側で南北に連なる2基の長楕円の炉穴と、また、東側部で2基の不正円形状の炉穴が検出されている。

それぞれの遺構には、1ヶ所づつ径50～80cmの焼土面を有している。

遺物の出土状態を見ても、それぞれの遺構ごとにまとまりをもって検出されている。No.106から出土した土器には、第34図55～第38図95が掲げられる。これらの中では、55・61・62・77・86とした土器が、ある程度のまとまりをもって出土した土器で、口縁部から胴部の形状を捉えることのできる例である。

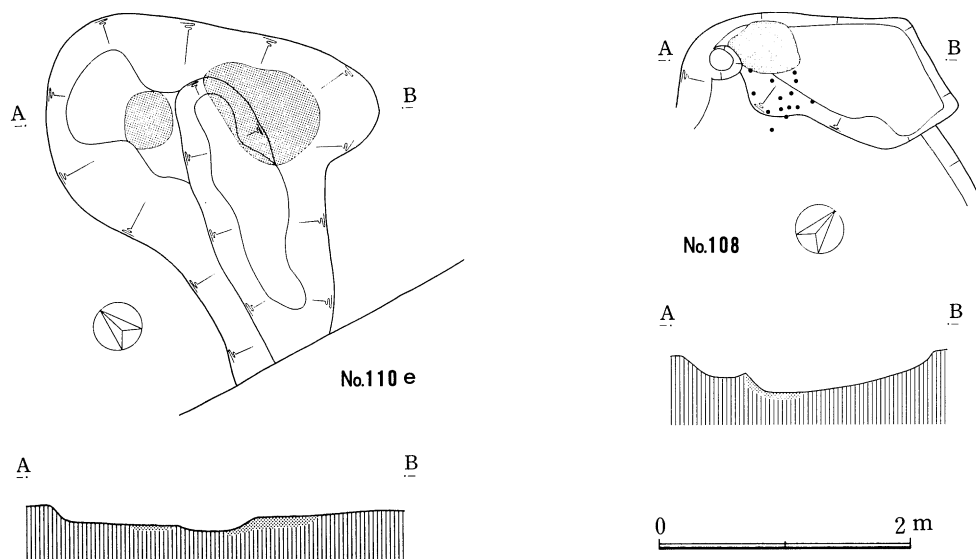
いずれも外傾する口縁部を有する深鉢形土器であるが、口唇部に高さ1cmほどの山形の小突起を波状に付ける55の例と、平縁との別がある。また、口唇部に刻目を施す例(55)と条痕文を施す例(77)および無文とする例(61・62・86)の別が見られる。

器面の文様では、条痕文のみを施文する土器群の出土である。

No.107(第24図下)、No.104とNo.106との間に位置する炉穴であるが、北側部分が未調査地区に跨っているため、遺構全体の形状・規模は把握されない。

検出部分では、2ヶ所に焼土の広がりを見ることができるが、西側部は、遺構底面が焼けた状態を見せるのに比べ、南側の焼土は遺構底面から若干浮いた状態を示している。

当跡から出土した土器は、第38図96～第39図108とした土器群であるが、これらは、107・108の2点を除けば、ハケ状の極めて細い条痕文を施文する一群の土器がまとまって出土した例である。



第25図 C地区検出遺構実測図（5）

口縁部の形状を良く見せている例としては、96～100が挙げられるが、いずれも口唇部に若干の丸味を持ち、僅かに内弯するあるいは直線的に立ち上がる形態を呈している。

また、胴部の形状を把握できる例として、102があるが、これは口縁部・底部を欠損したもので、胴部についても接合破片から図上復元したものである。

No.110 c（第25図左）後述する108・109・110の南部から検出された遺構で、108～110と合わせ一群を成す炉穴群の一部である。

2ヶ所に焼土面が見られる炉穴で、第47図208～第48図213の土器が出土している。

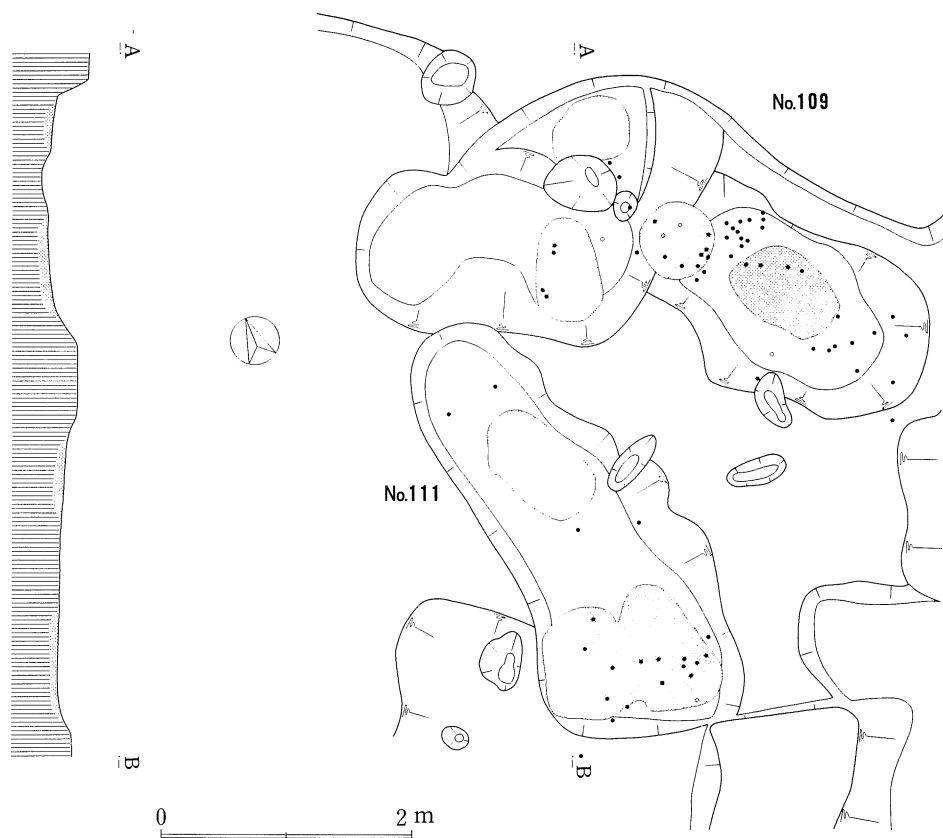
No.108（第25図右）東西2.4m、南北1mほどの大きさを有する炉穴で、西側壁に接し、偏在して径50cmほどの焼土面を有する。遺物の伴出状態は、焼土面の南側にまとまりをもって第39図108～第40図115に掲げた土器が出土している。いずれも条痕文系土器であるが、1点小片ではあるが、底部破片が見られた。

No.109（第26図）No.111の北側にあってNo.108の東側から検出された炉穴である。

少なくとも3基以上の炉穴が重複したものと考えられ、4ヶ所に焼土面を有する。出土遺物には、第40図116～第42図150に掲げた土器類が挙げられるが、121のように口縁部径の大きさが把握できるもの、底部の形状を復元できるもの（150）なども見られる。

No.111（第26図）No.109の南側に南北に長く見られる炉穴で、南北3.5m、東西1.5mの不整長楕円形を呈する。

中央部より若干北側に、南北1m、東西0.5mほどの焼土面を有するが、南端にも焼土面が



第26図 C地区検出遺構実測図（6）

見られる。

南端部の焼土面は、第26図に見るように8字状の形状を呈したもので2つの焼土面が連なったものと思われる。

遺物は、南端部焼土面上から集中的に検出されている（第49図218～第51図236）。

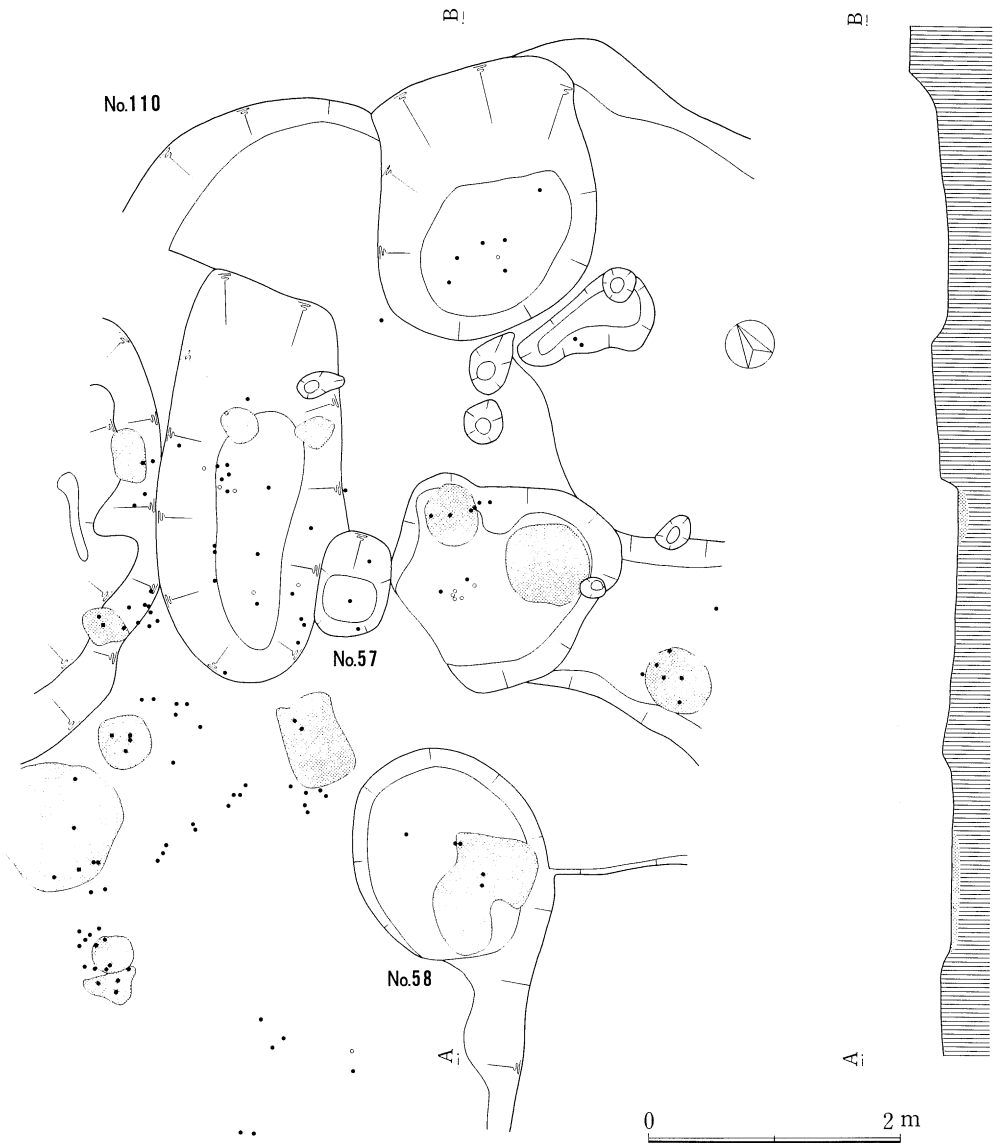
No.110（第27図）No.109・111の東側の5m四方ほどの範囲から検出された焼土群をまとめて、No.110遺構とした。

径50cm以下の焼土面が多く散在し、炉穴とは若干趣を異にした感じを与えている。

焼土面は、13ヶ所に見られ、1mほどの径を有するものもある。中には、No.58の番号を与えた円形状の遺構もある。

遺物は、非常に多く第42図151～第47図207、第48図214～第49図217などが出土し、214・215のように口縁部から胴部にかけての土器形状を把握できる大形の破片も出土している。

条痕文のみを施した例がほとんどであるが、177～182とした微隆起線文を付した一群の土器

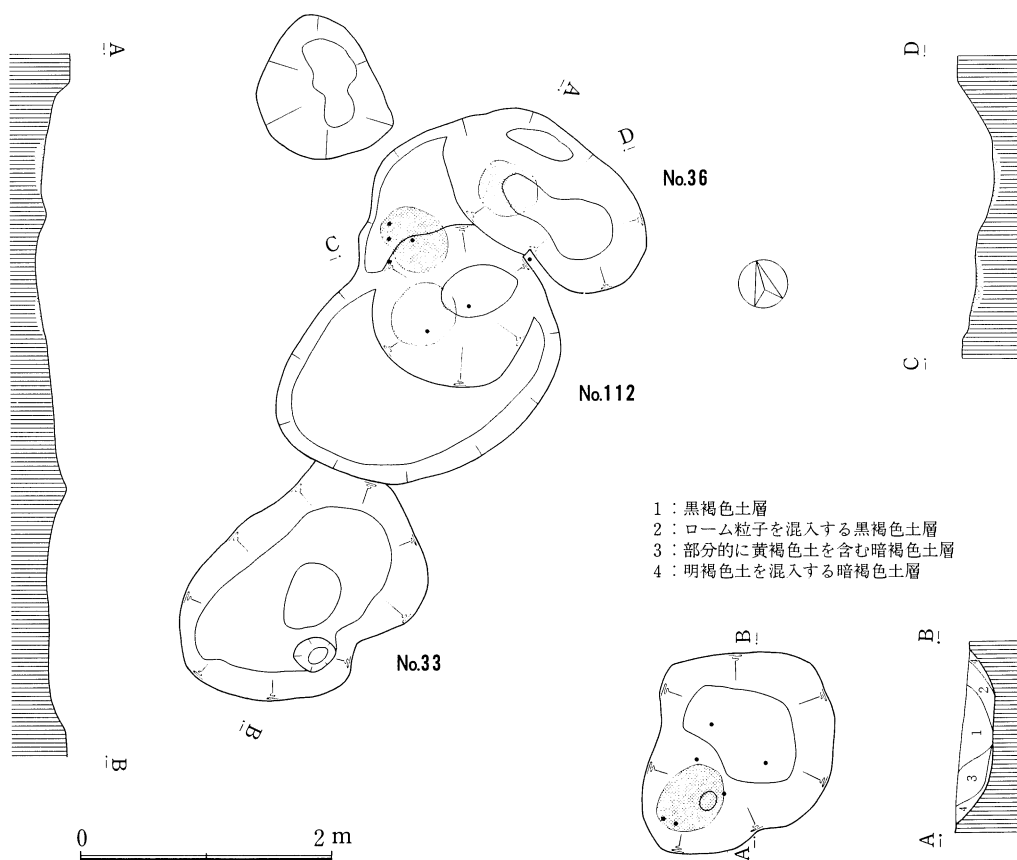


第27図 C地区検出遺構実測図（7）

が少量ではあるが伴出している。いずれも口縁部ないしは口縁部に近い部分の破片であるが、177のように三角状に突出する口縁を持つものと、179に見るように平縁となるものがあるようである。

No.112・36・37(第28図) C区では西側部分を主として炉穴群が検出されているが、C区炉穴群の東端に位置する炉穴が、No.112・36・37とした炉穴である。

西側部分が検出されている炉穴群は、重複した例が多く、一つ一つの炉穴について形状等の把握に困難な例が多いのに比べ、No.112・36・37で一群を成す炉穴は形状的には、捉えやすい状



第28図 C地区検出遺構実測図（8）

態を呈している。

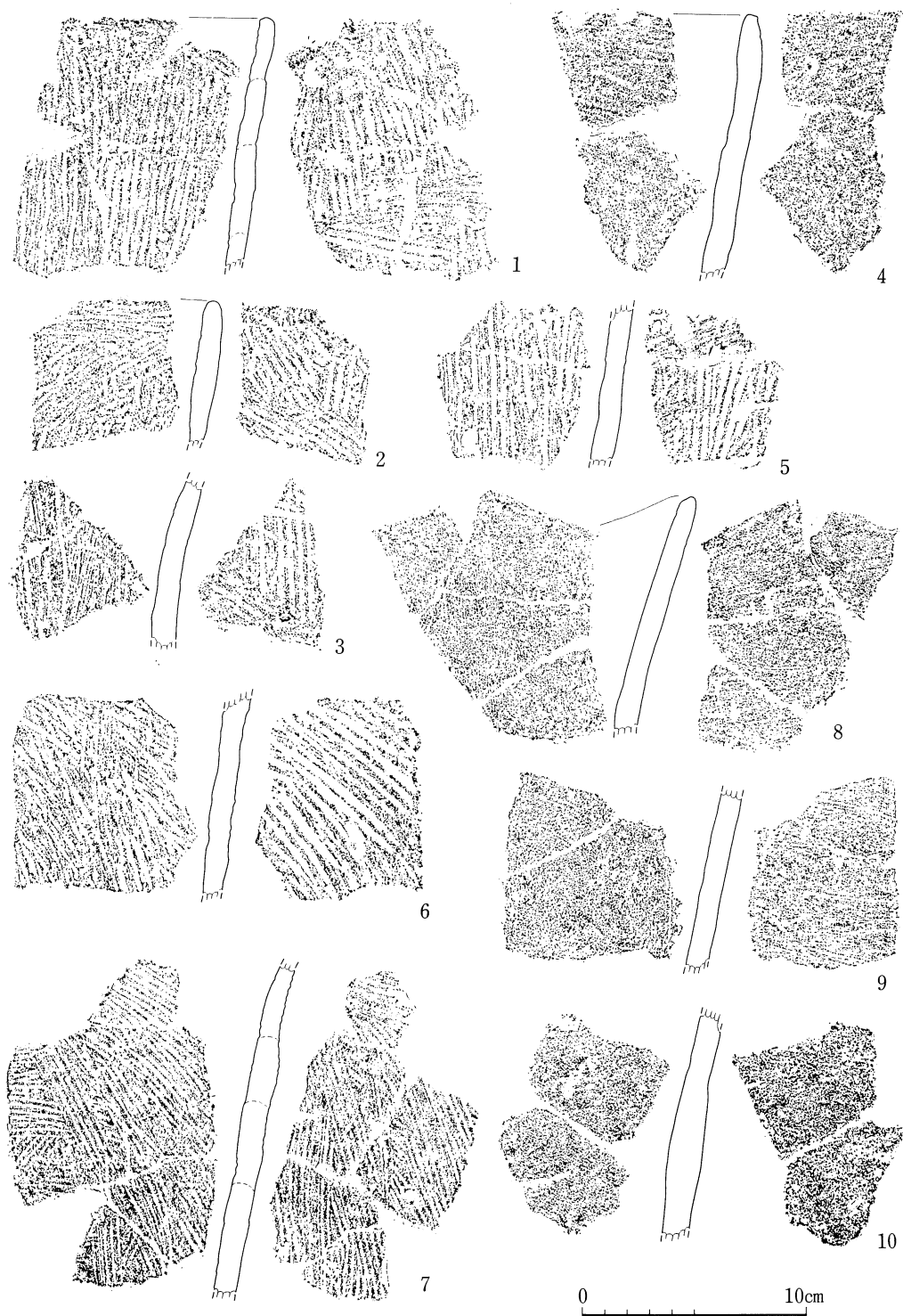
No.112・36は重複し、3ヶ所に焼土面を有している。No.36は、2 m×1 mほどの楕円形を呈した炉穴で北側に径50cmほどの焼土面を持つ炉穴として一般的な形状を見せている。

No.112は、長軸2.5m規模の遺構で、北側に径1.4mの円形なピットを持ち南側部分にテラス状の平坦面が見られる。出土遺物は、No.36には見られず、No.112からは、第51図237～240に掲げた土器片が出土している。いずれも貝殻条痕文を施文しない一群の土器である。

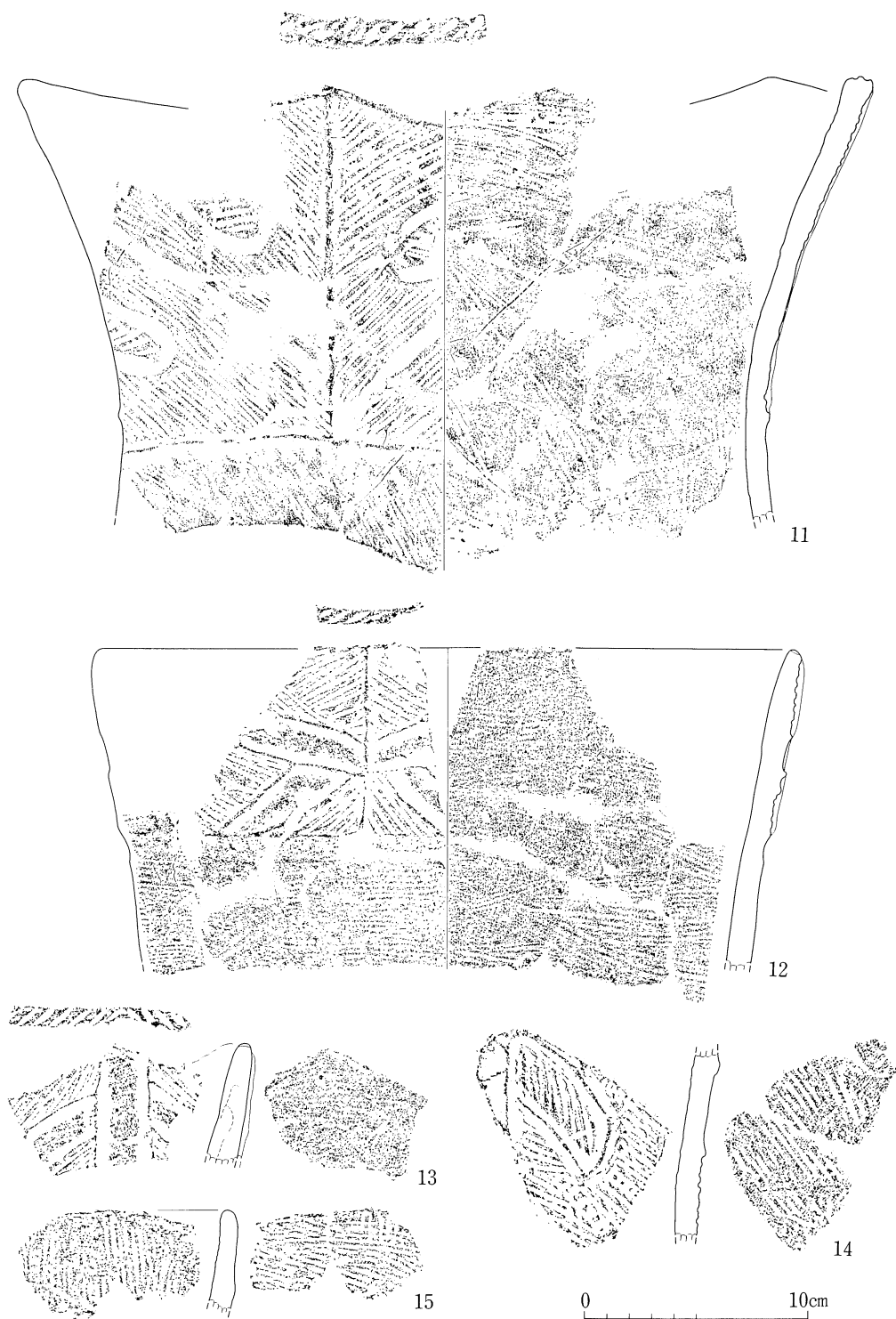
No.37もNo.112と似た状態の炉穴で、径1.5mほどの円形なピットの南側に1 m弱のピットを付設している。この南側の一段深いピット底面に焼土面を有している。

伴出土器には、第53図264～266などがあるが、266は残存部で高さ20cmほどの底部片であり、底部の形状を良く把握できる良い資料である。

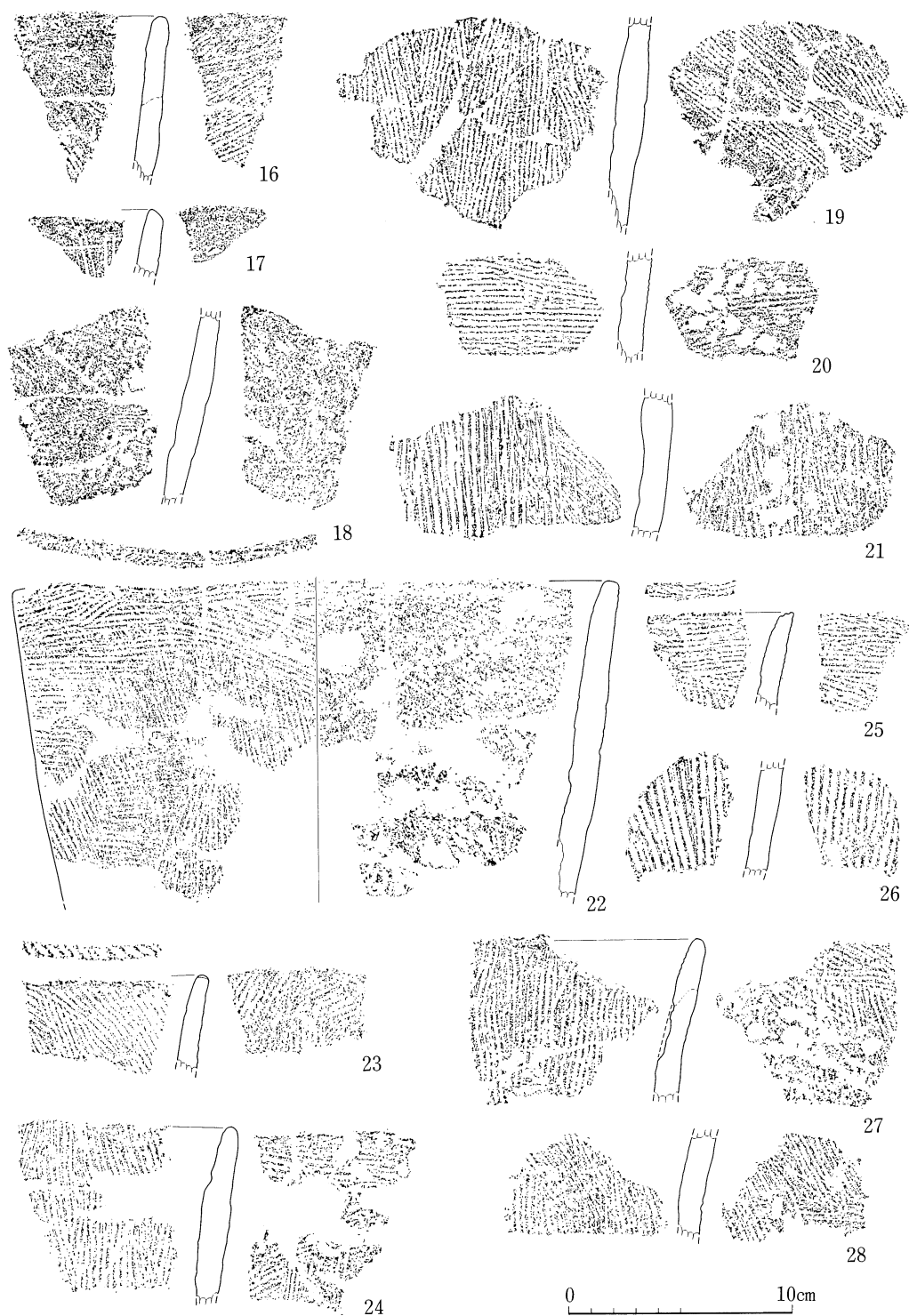
また、No.112に接して南側に、No.33とした遺構があるが、本遺構からは、焼土面あるいは土器などの伴出遺物は見られなかった。



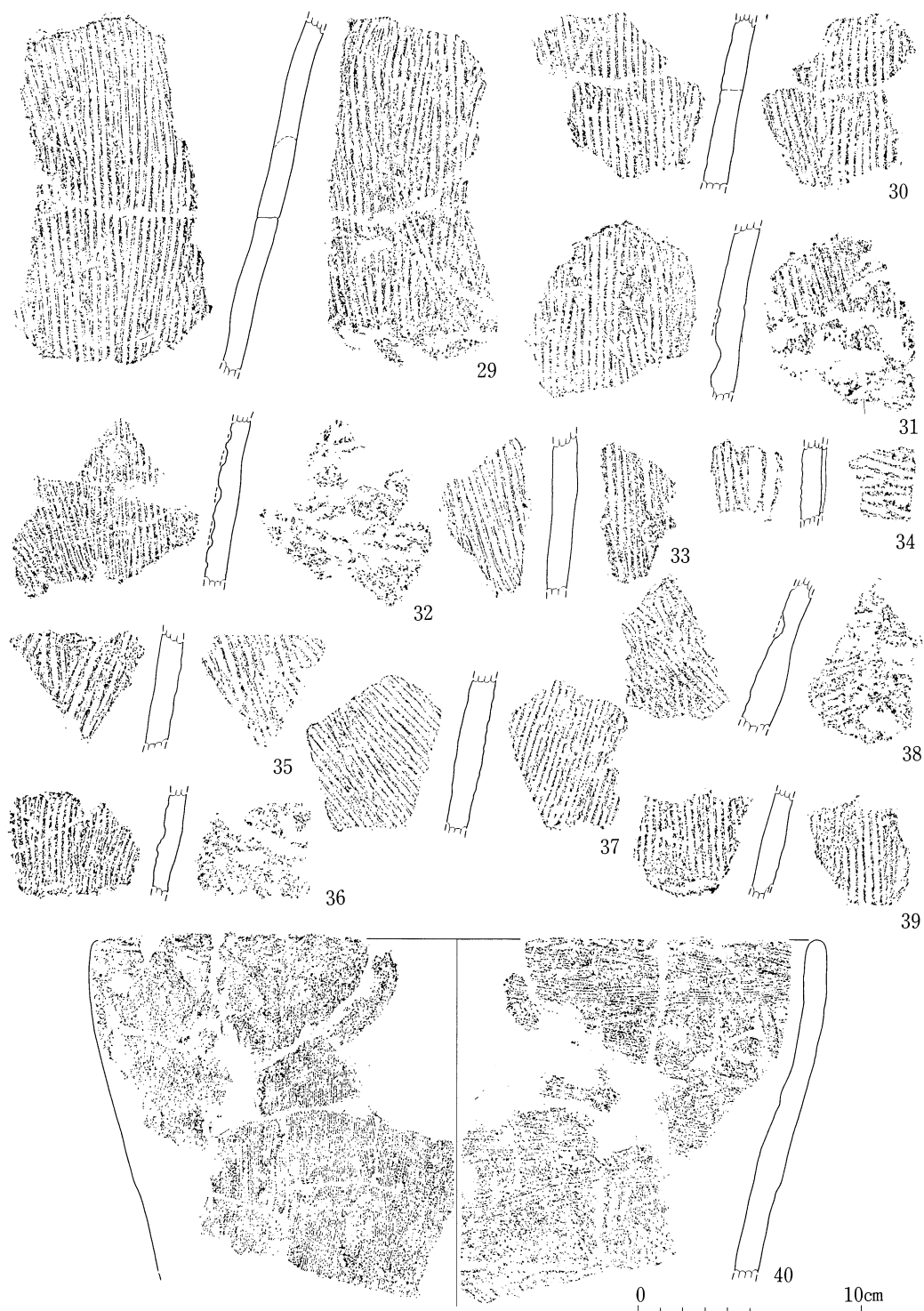
第29图 C地区遺構内 (No.101・102・103) 出土土器拓影図 (1)



第30图 C地区遺構内 (No.104) 出土土器拓影图 (2)



第31图 C地区遺構内 (No.104・105) 出土土器拓影图 (3)



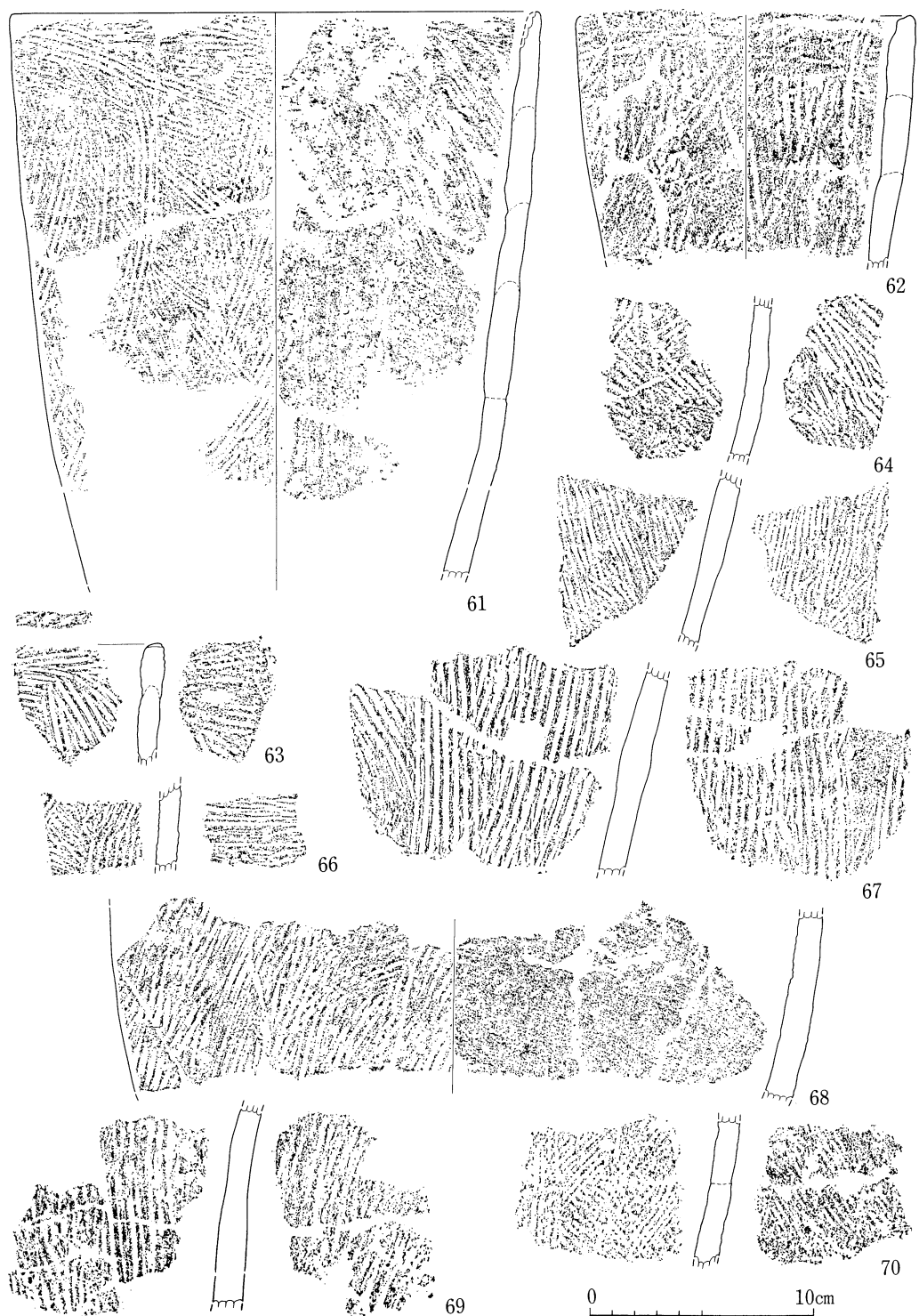
第32图 C地区遺構内 (No.105) 出土土器拓影图 (4)



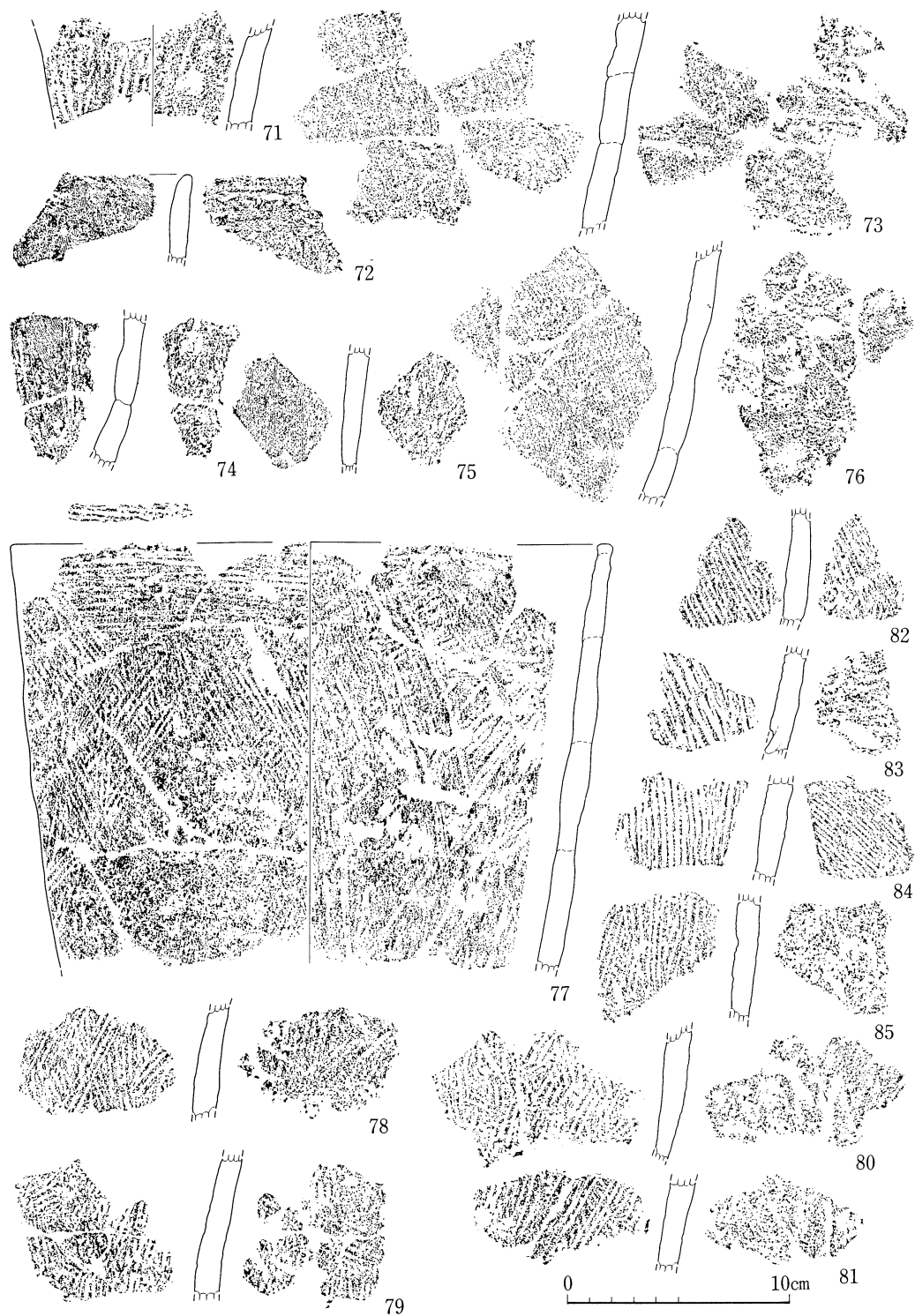
第33图 C地区遺構内 (No.105) 出土土器拓影图 (5)



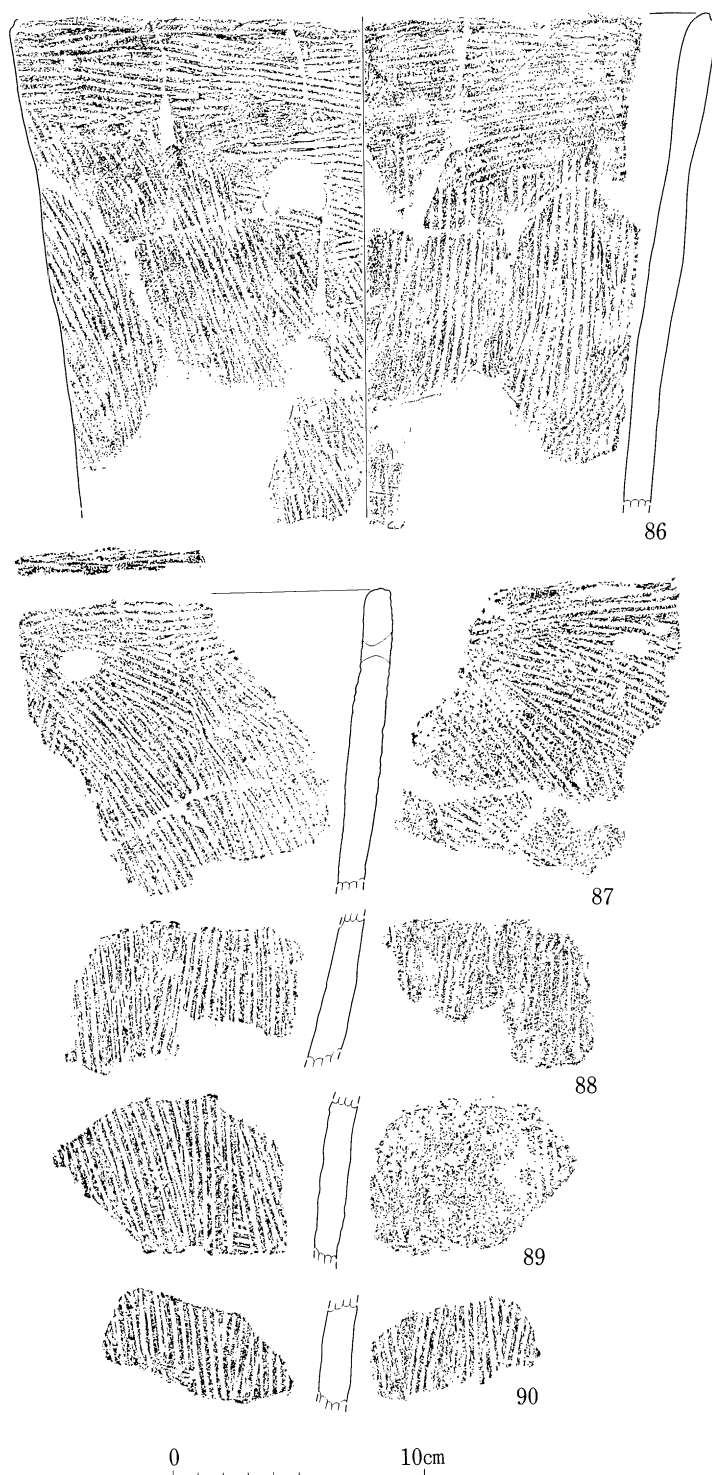
第34图 C地区遺構内 (No.105・106 a) 出土土器拓影図 (6)



第35图 C地区遺構内 (No.106 a) 出土土器拓影図 (7)



第36图 C地区遺構内 (No.106 a・106 b・106 c) 出土土器拓影図 (8)



第37図 C地区遺構内 (No.106c) 出土土器拓影図 (9)

炉穴以外出土土器

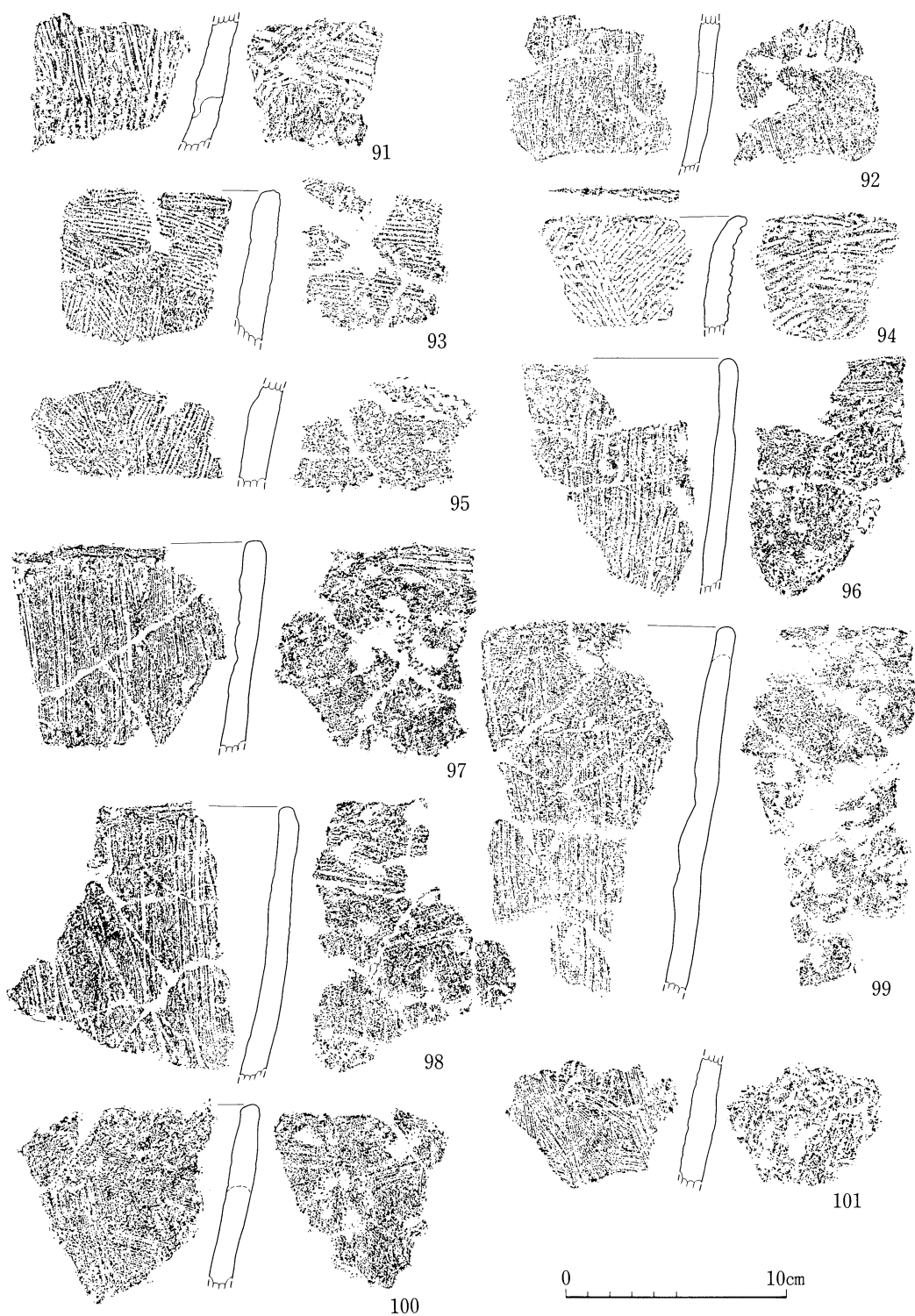
C地区では、出土土器の多くが、炉穴に伴出したものであるが、炉穴以外の遺構等から伴出した土器も少量ではあるが見られるので、それらの一部を紹介する。

本地区では、第17～20図の遺構分布図を見ても明らかなように、炉穴と炉穴以外の焼土を伴わない円形を基本とした遺構及び、本地区の南部に東西に走る溝の3種の遺構が検出されている。

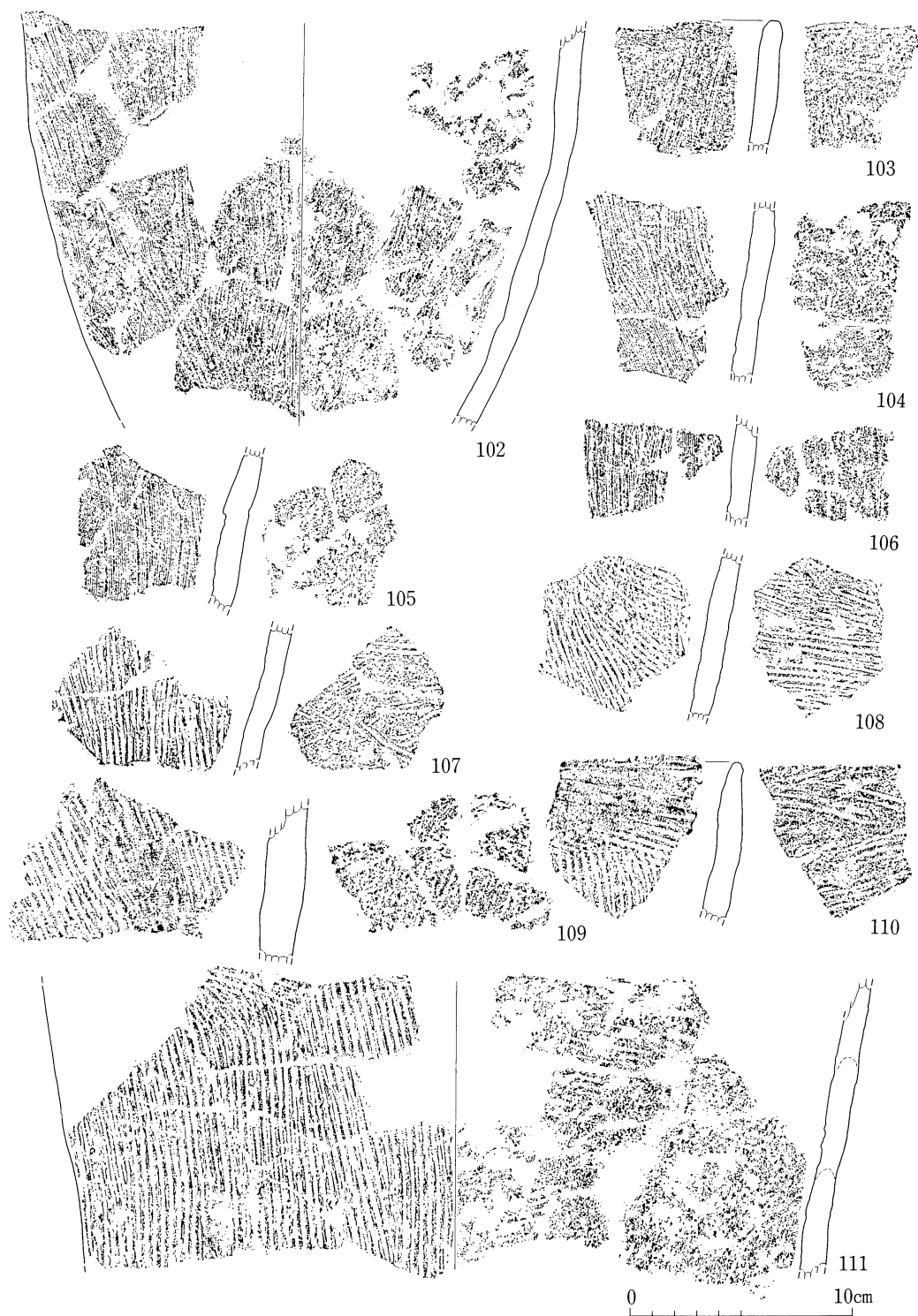
うち、炉穴においてはC地区の西側部分に集中して分布し、東側部分から検出された遺構には焼土面は見られない。

焼土を伴わない遺構では、炉穴のように多くの遺物を遺構内に包含する例は見られなかったが、幾つかの遺構で少量の土器片が出土しており、それらを第53図267～第56図295としてまとめて掲載した。

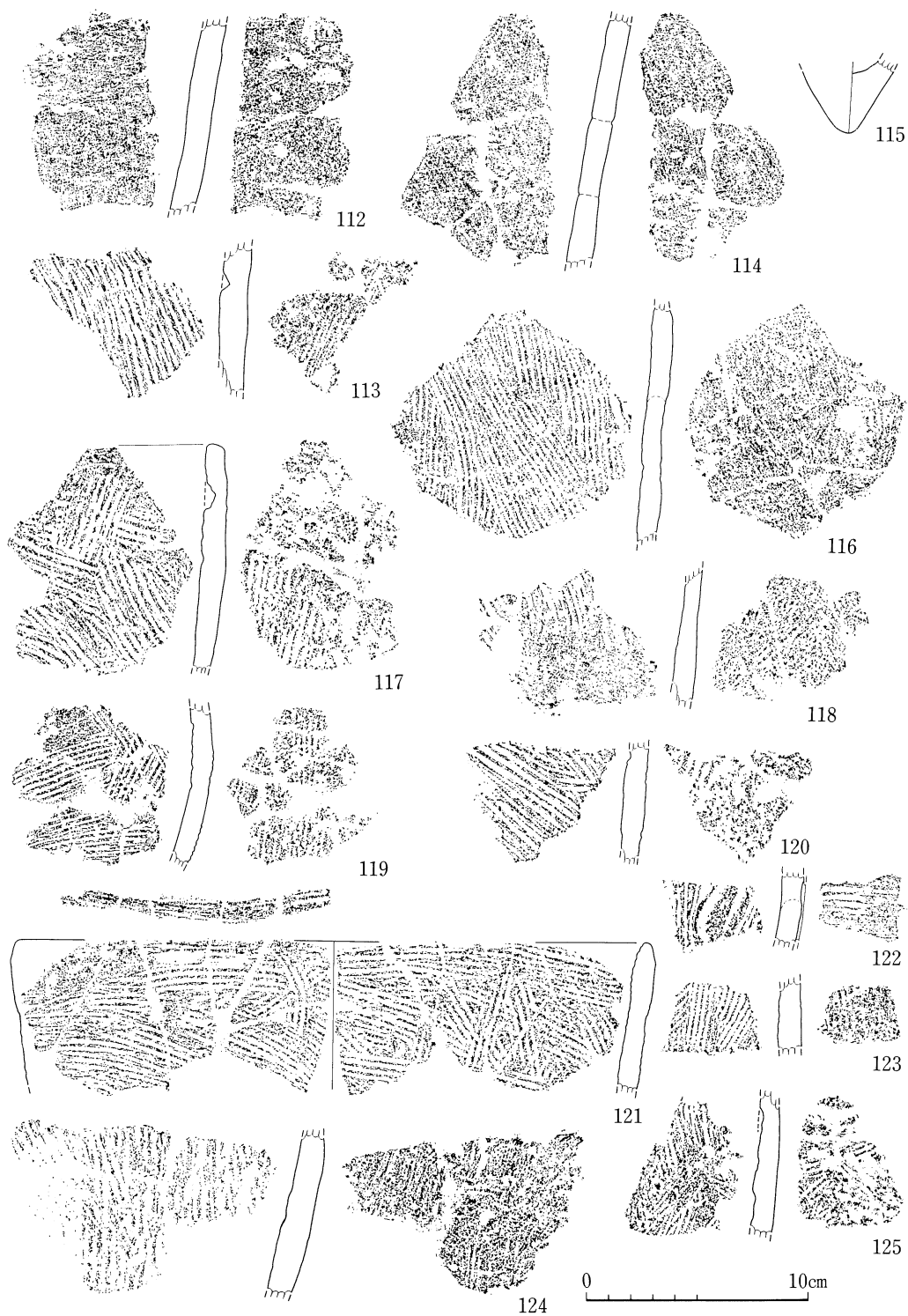
これらの土器片を見ると、ほとんどが炉穴に伴出し



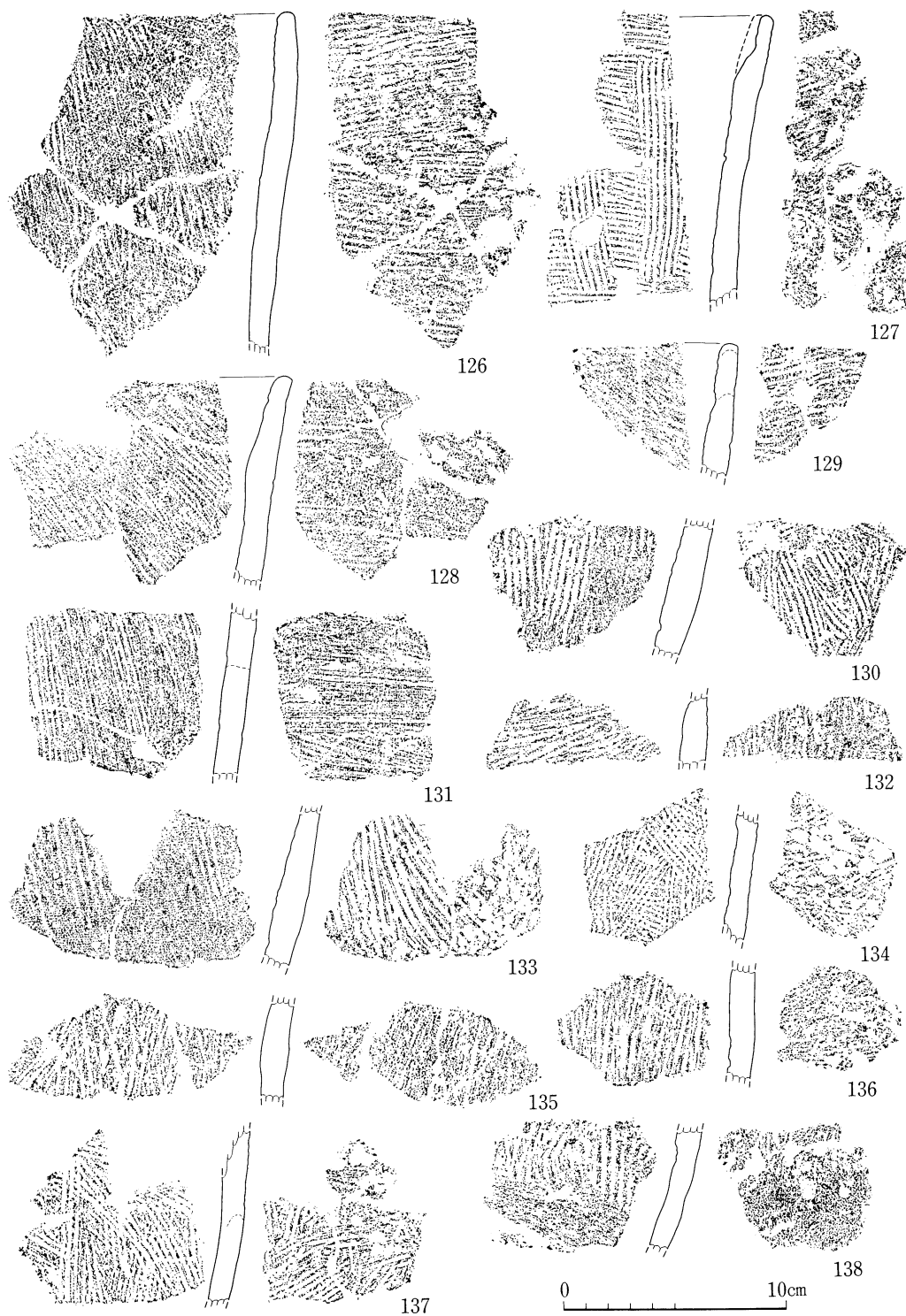
第38图 C地区遺構内 (No.106 c · 106 e · 107) 出土土器拓影図 (10)



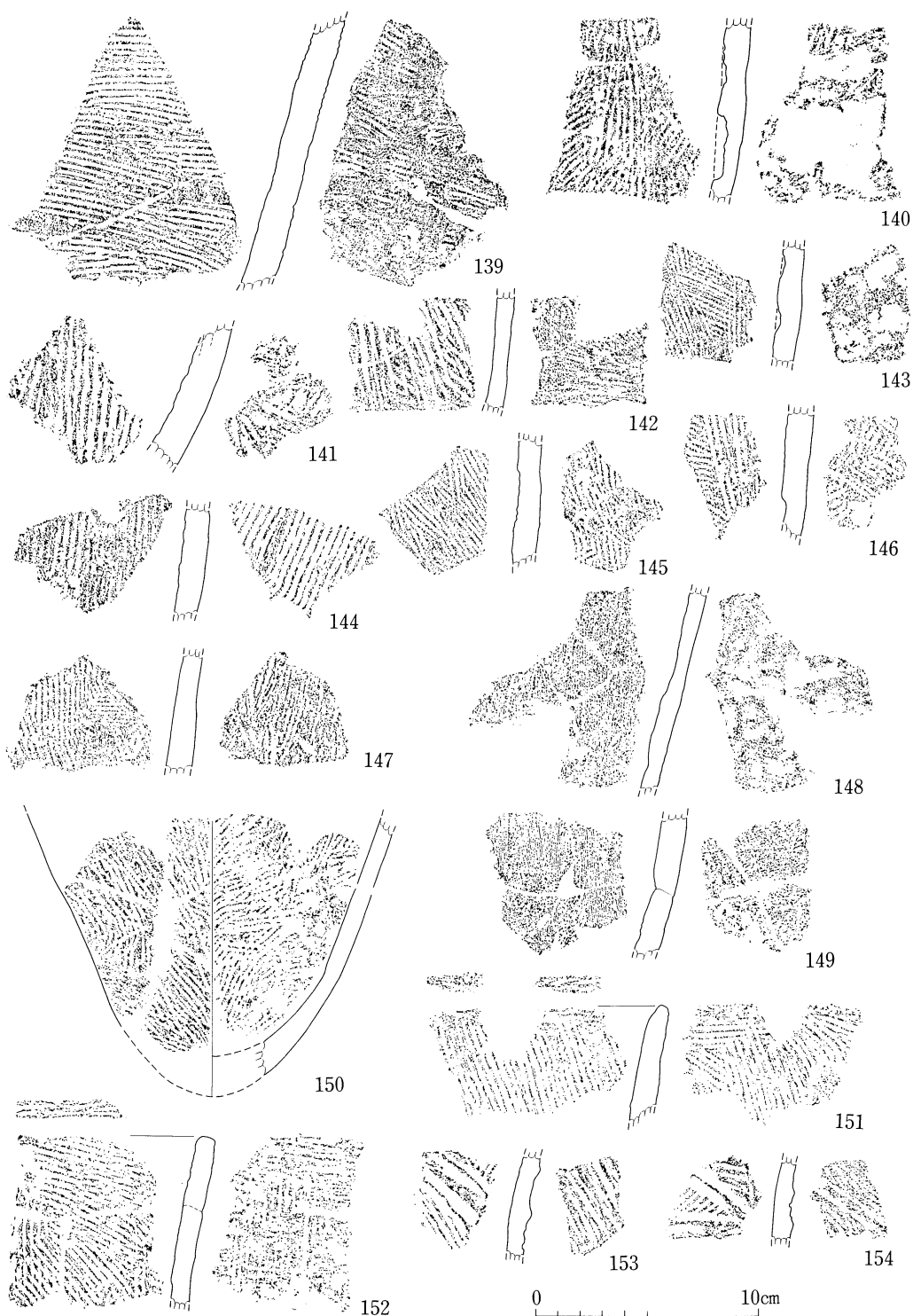
第39图 C地区遺構内 (No.107・108) 出土土器拓影図 (11)



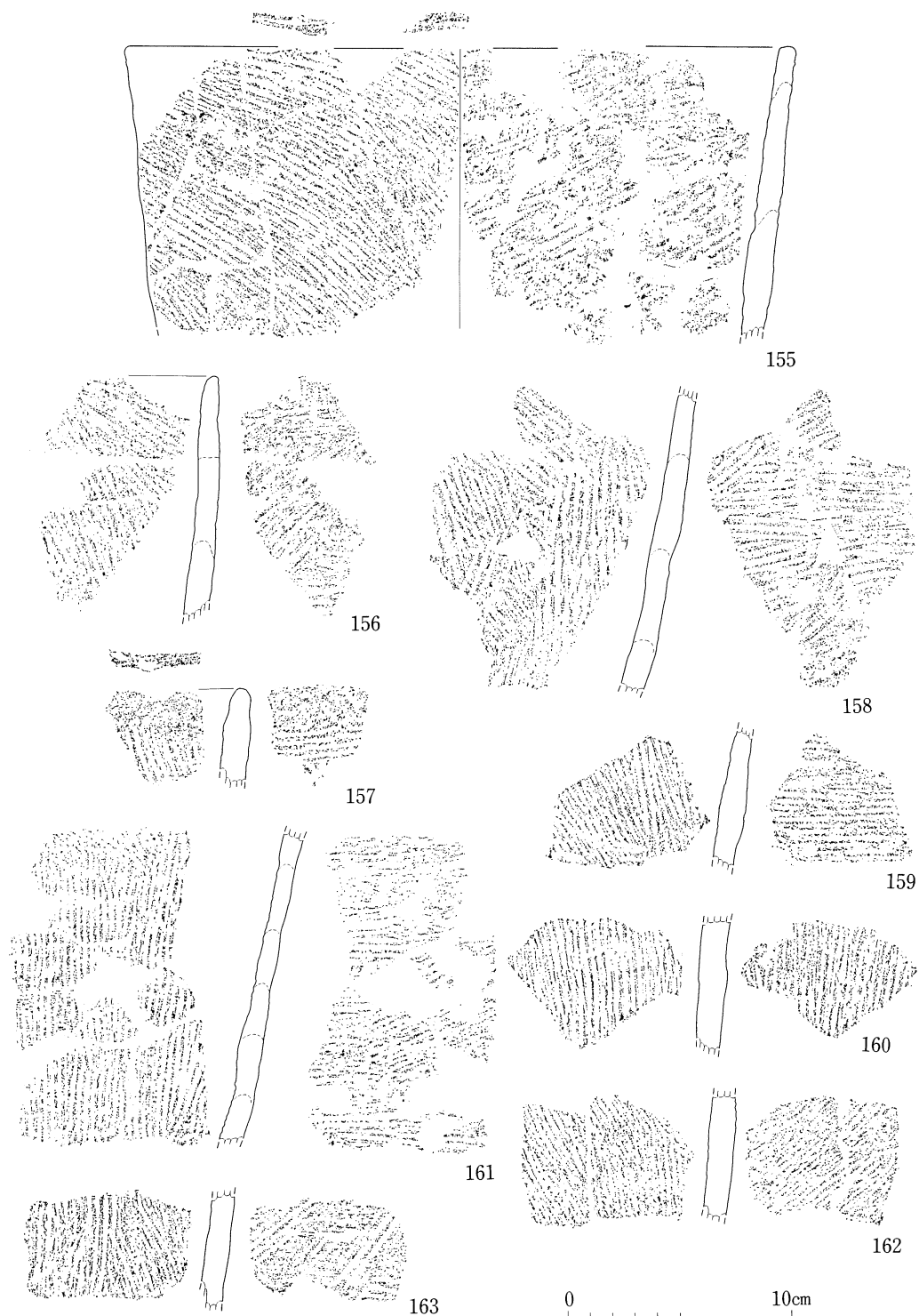
第40图 C地区遺構内 (No.108・109 a・109 b) 出土土器拓影図 (12)



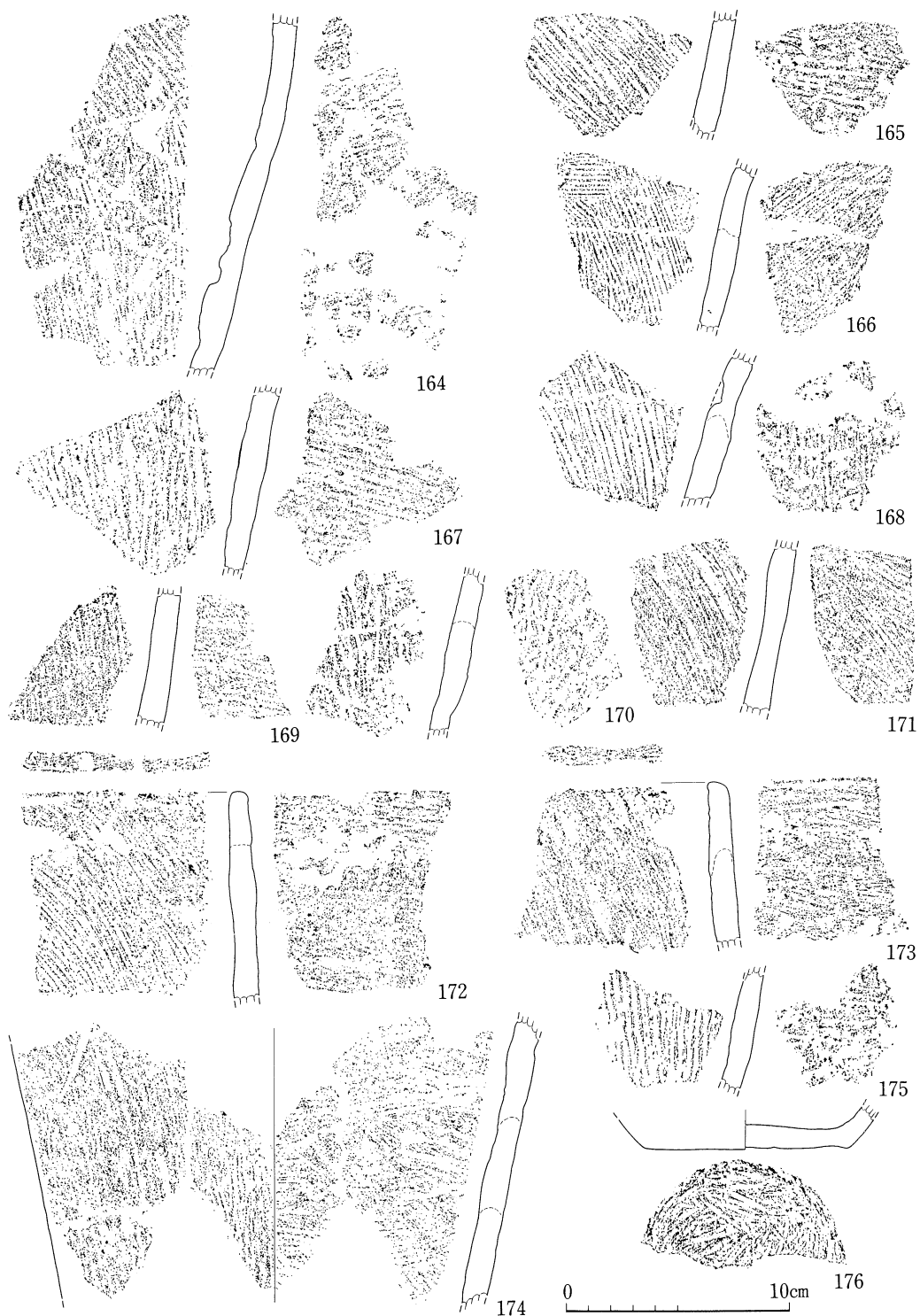
第41图 C地区遺構内 (No.109 b) 出土土器拓影図 (13)



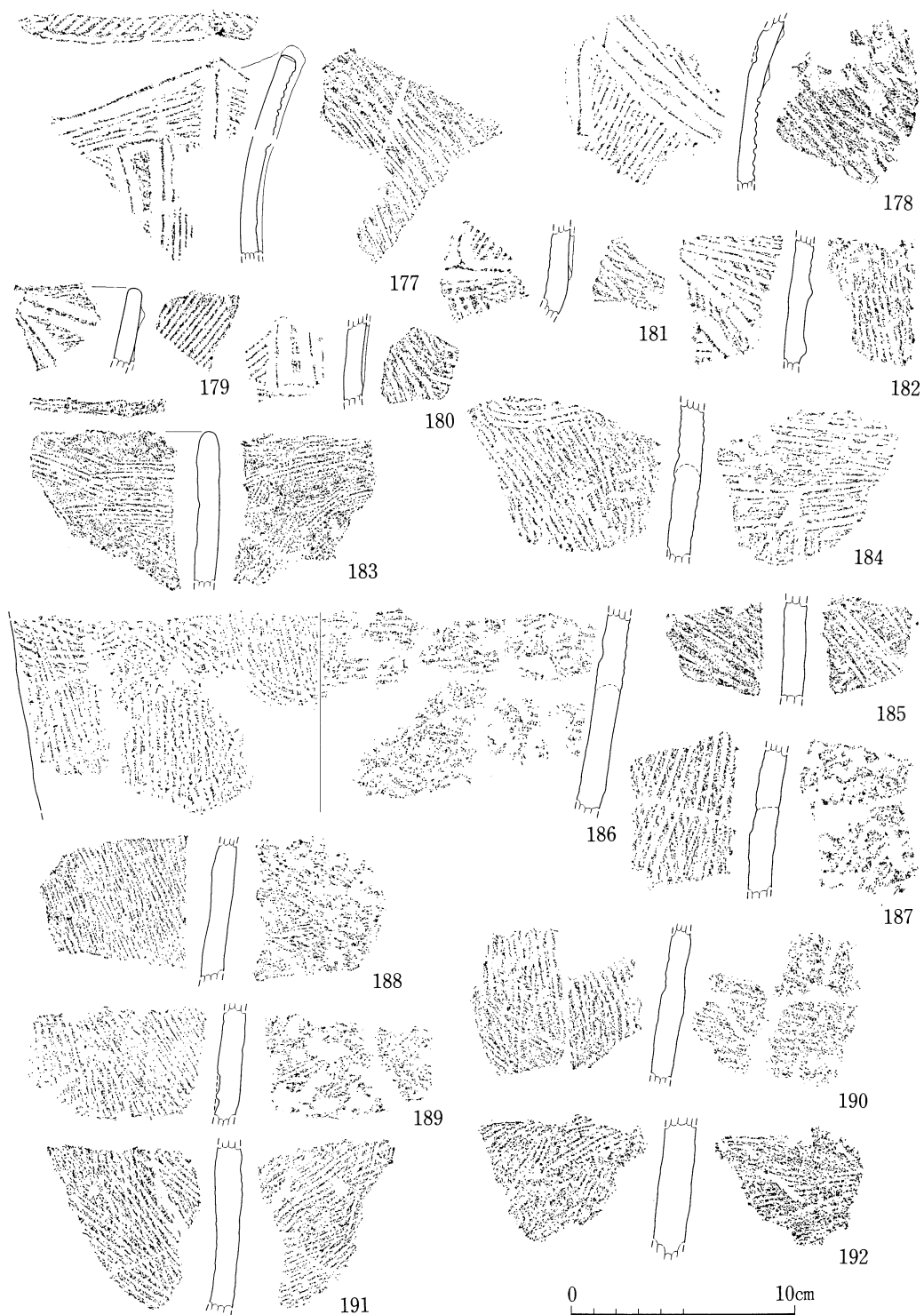
第42图 C地区遺構内 (No.109 b・110 a) 出土土器拓影図 (14)



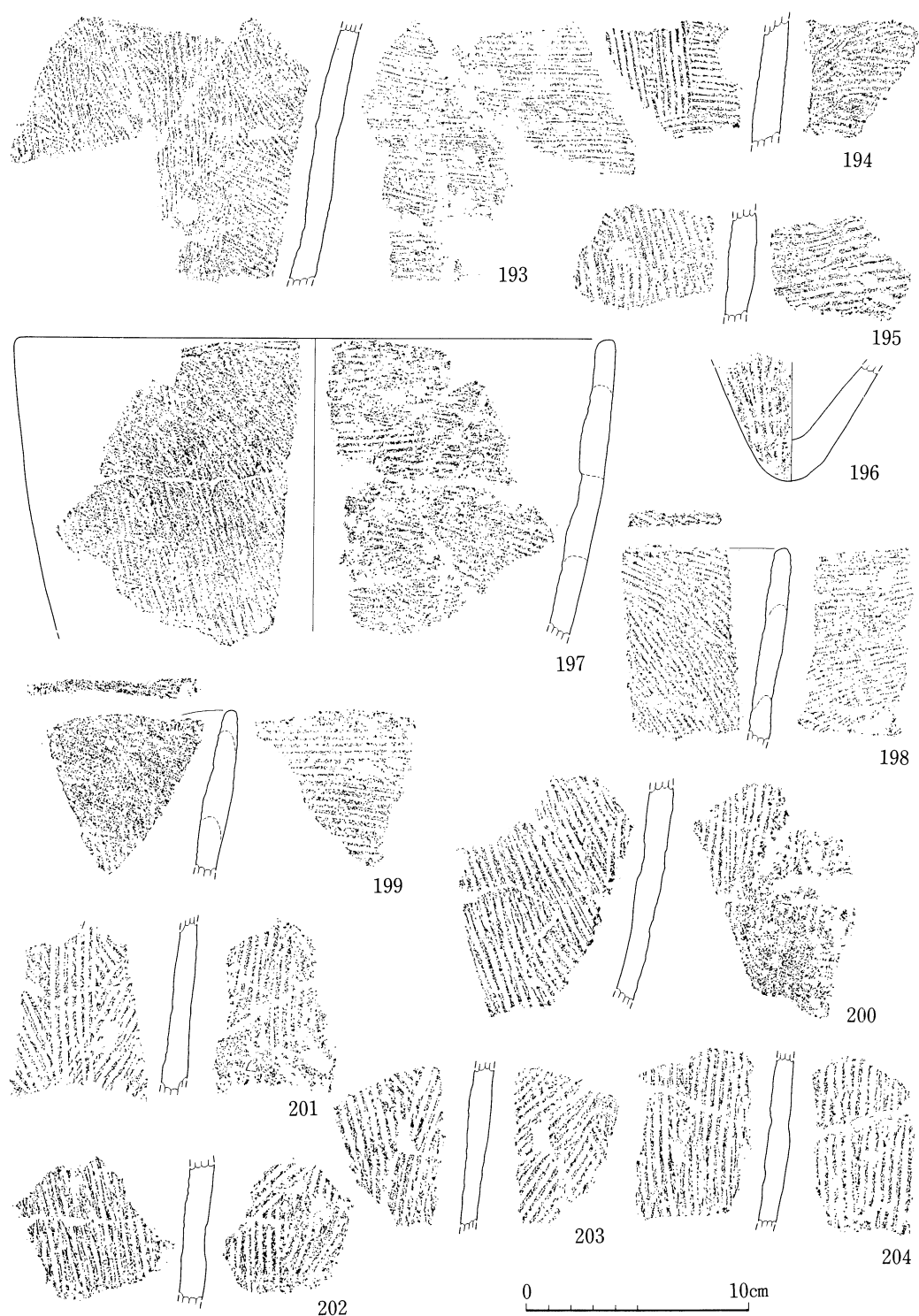
第43図 C地区遺構内 (No.110 a) 出土土器拓影図 (15)



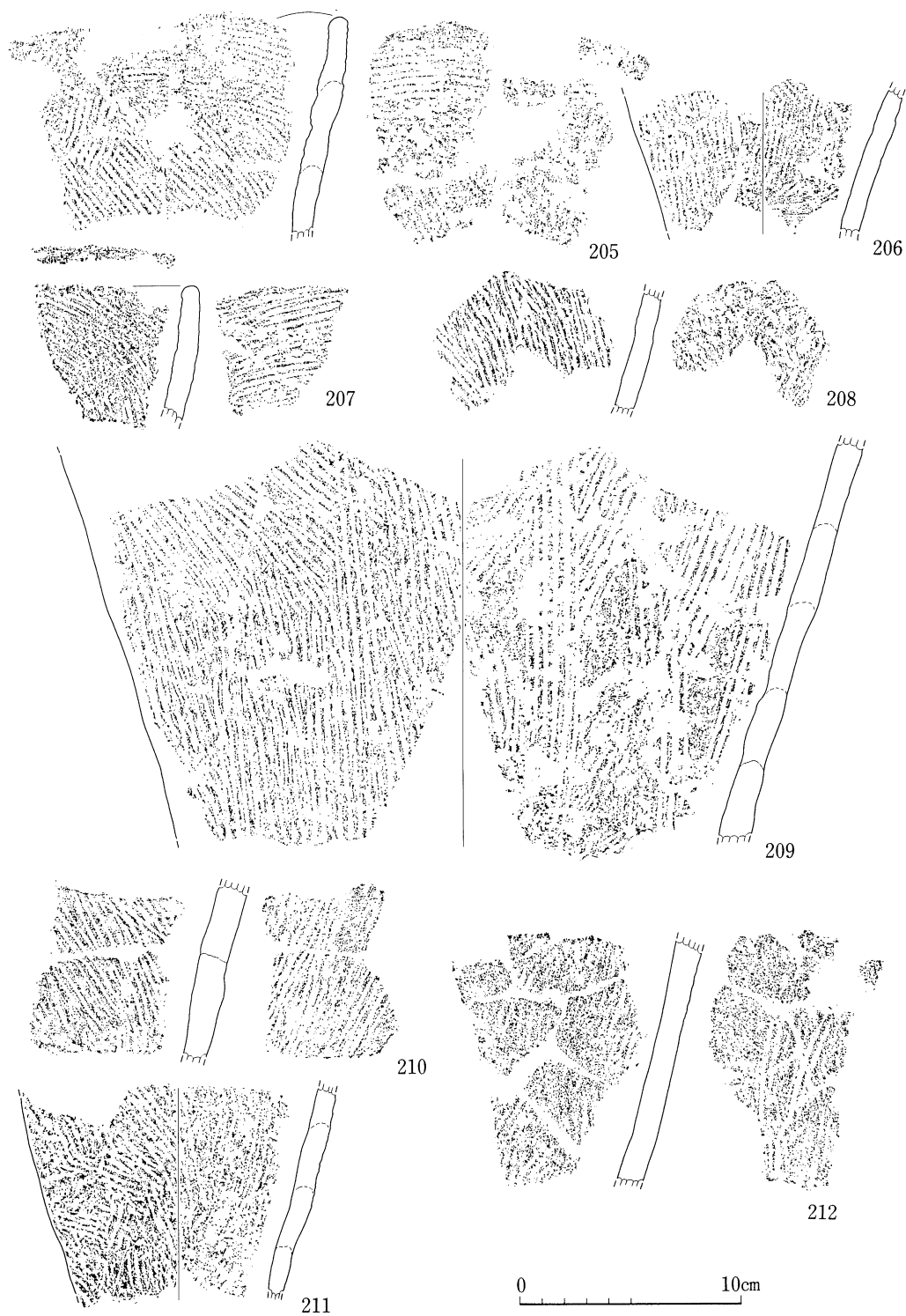
第44图 C地区遺構内 (No.110 a) 出土土器拓影図 (16)



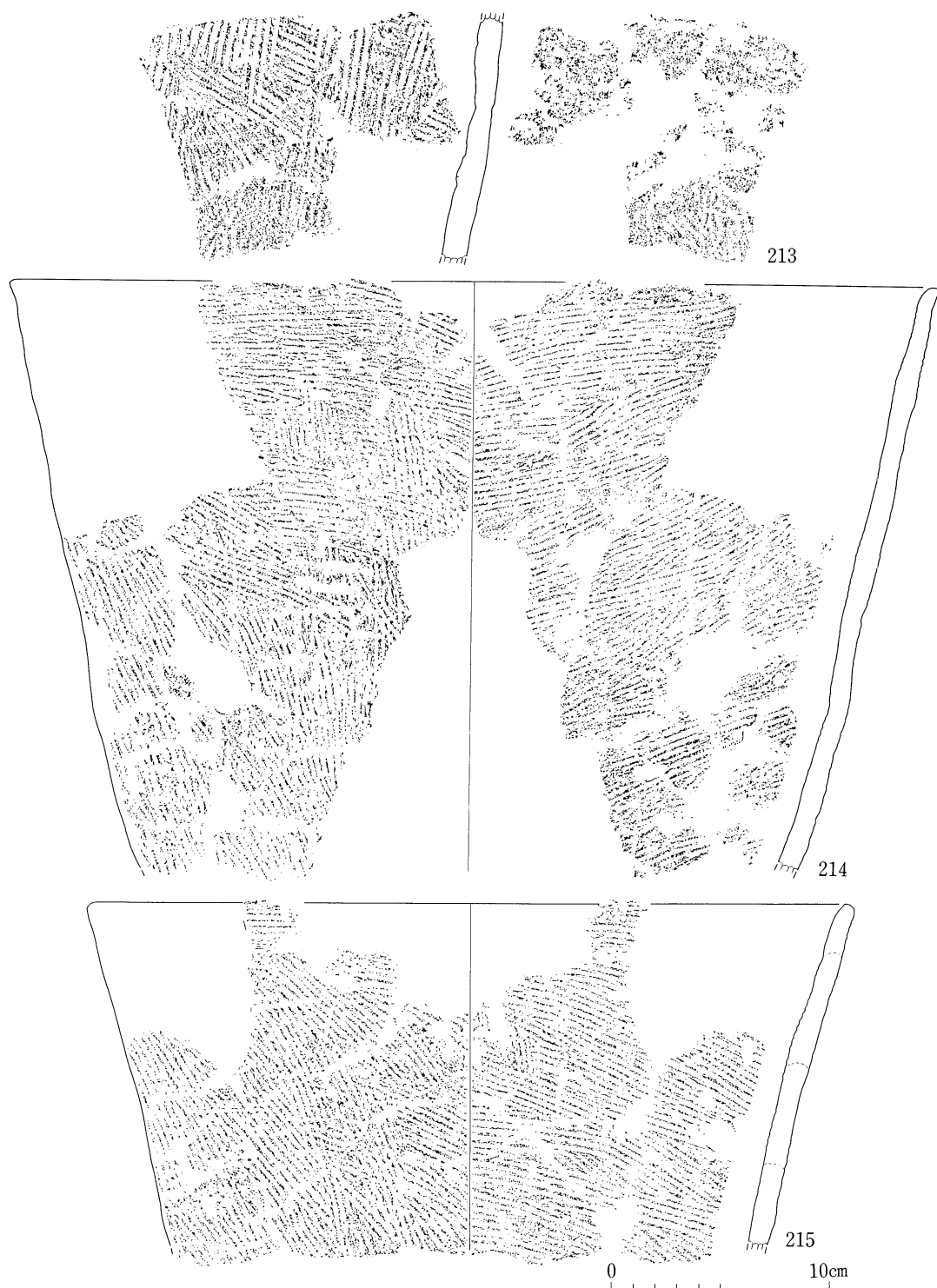
第45图 C地区遺構内 (No.110 b) 出土土器拓影图 (17)



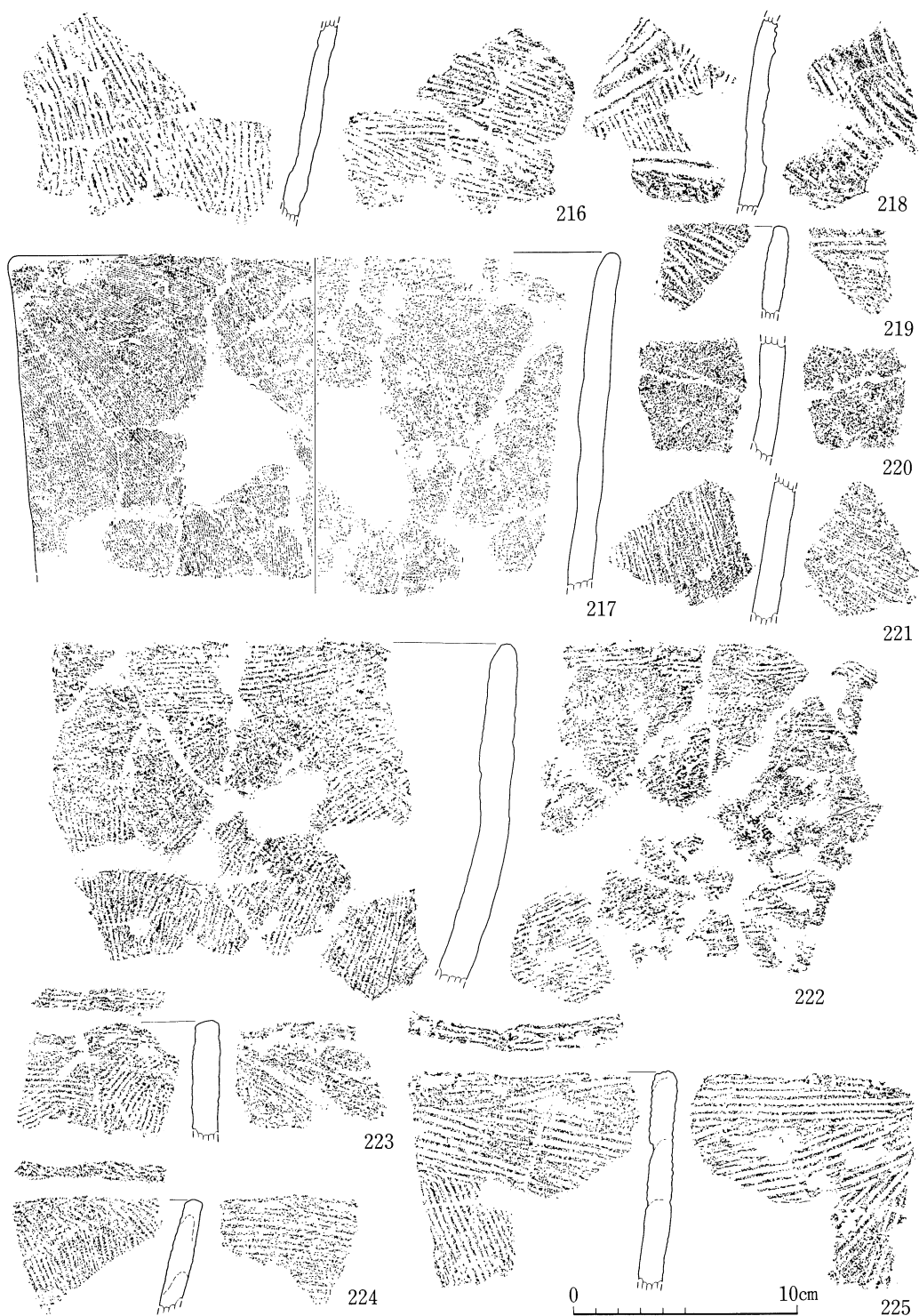
第46图 C地区遺構内 (No.110b・110c) 出土土器拓影图 (18)



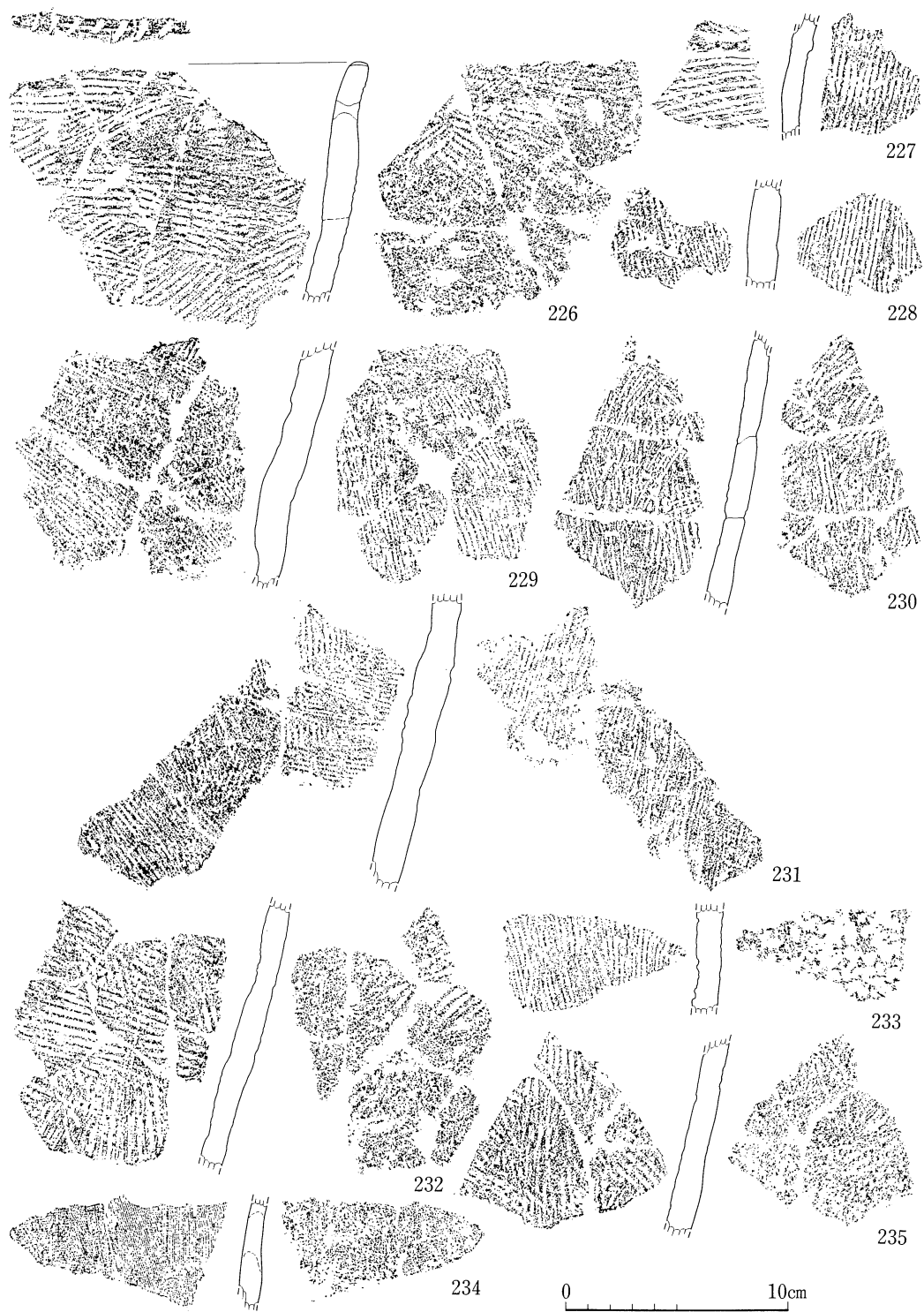
第47图 C地区遺構内 (No.110 d・110 e) 出土土器拓影図 (19)



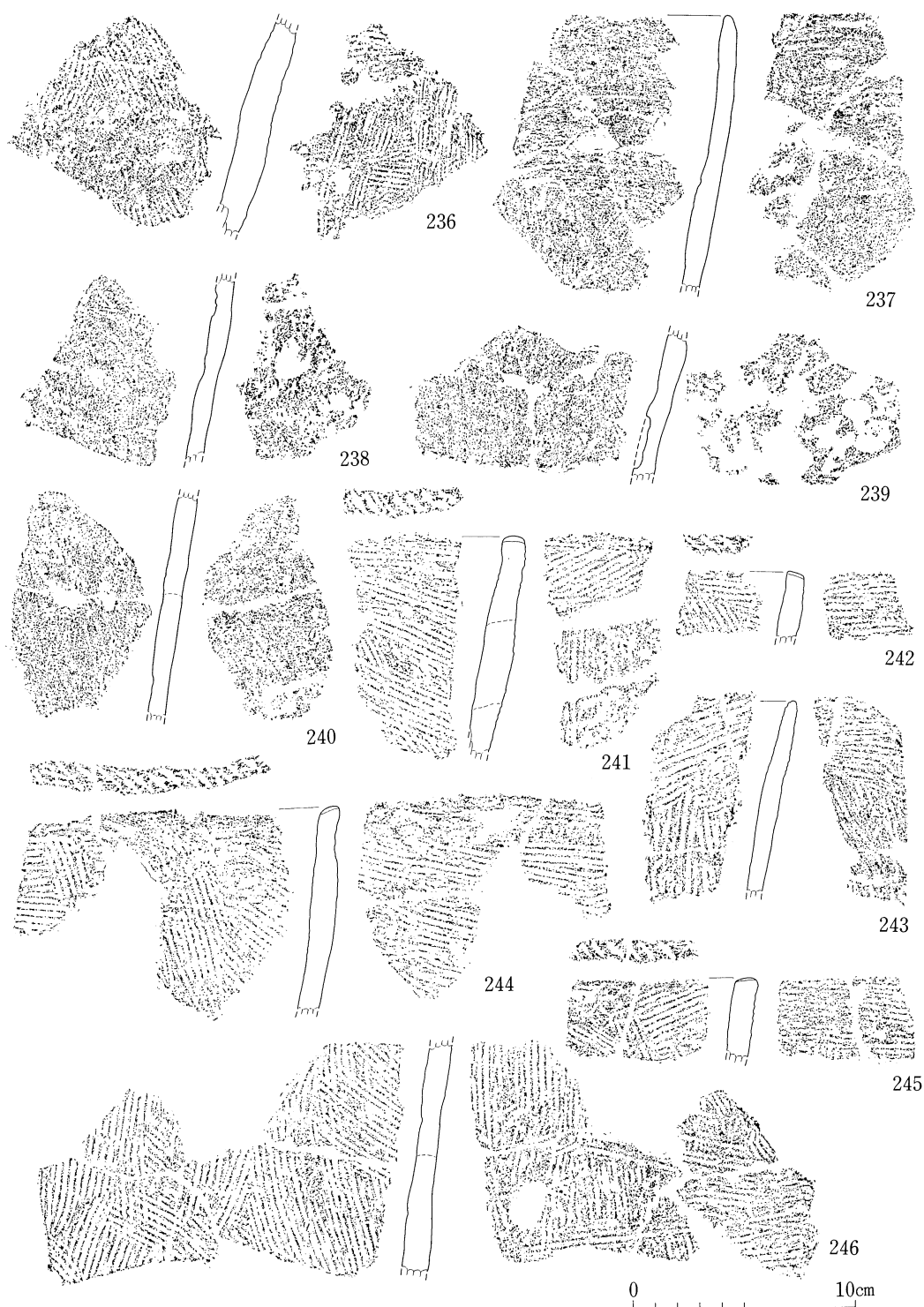
第48図 C地区遺構内 (No.110 e・110 g) 出土土器拓影図 (20)



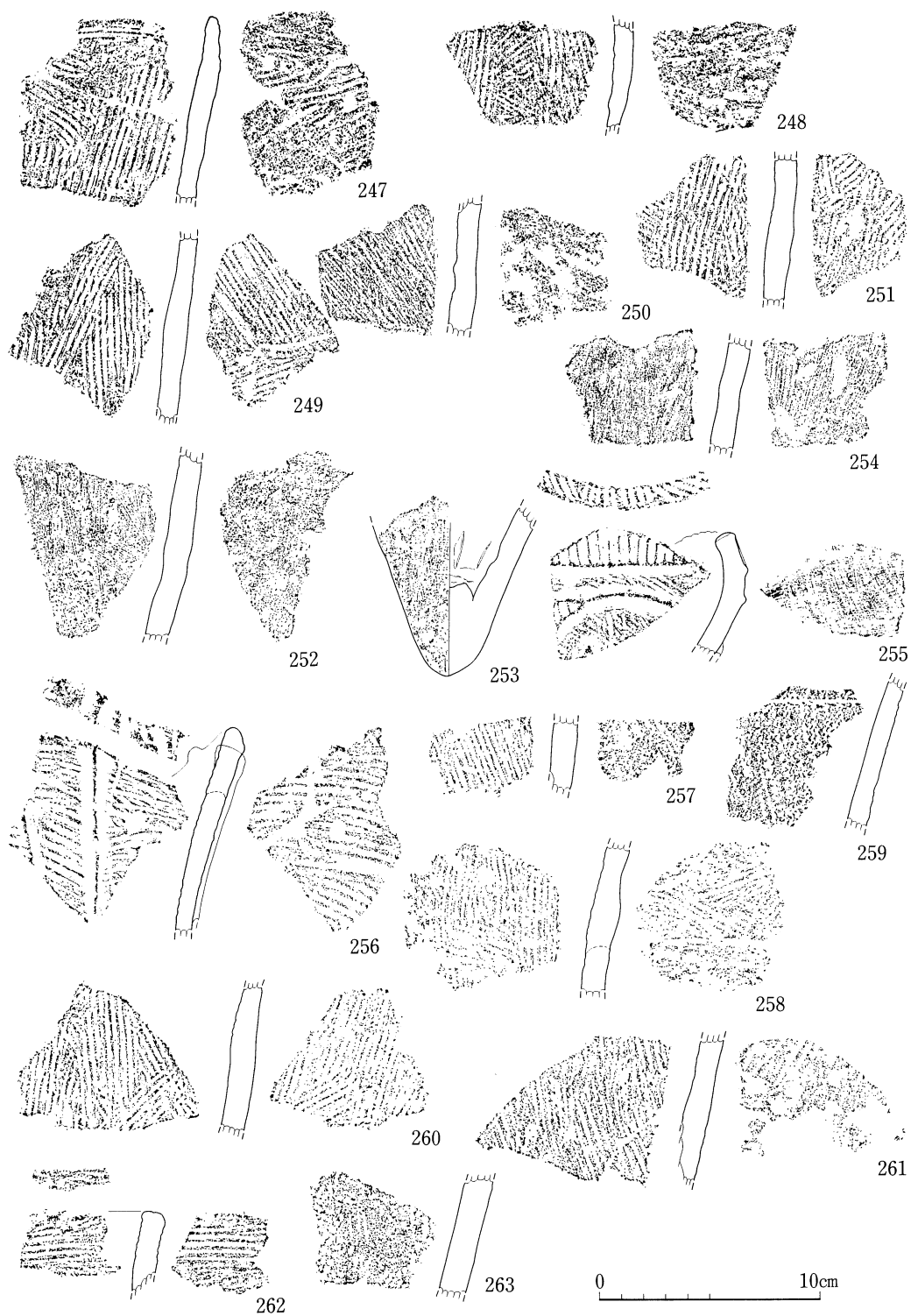
第49图 C地区遺構内 (No.110 g・111) 出土土器拓影图 (21)



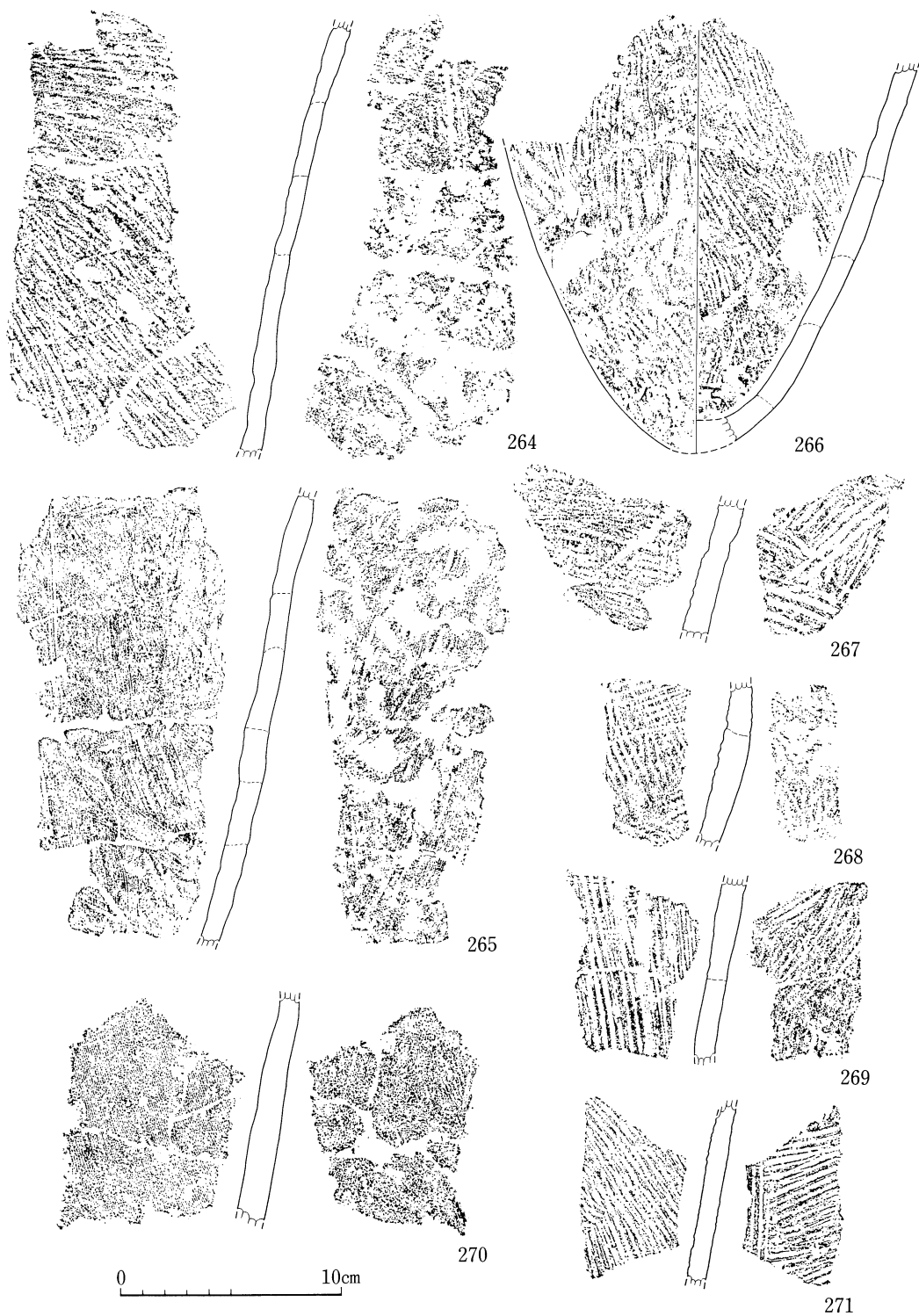
第50图 C地区遺構内 (No.111) 出土土器拓影図 (22)



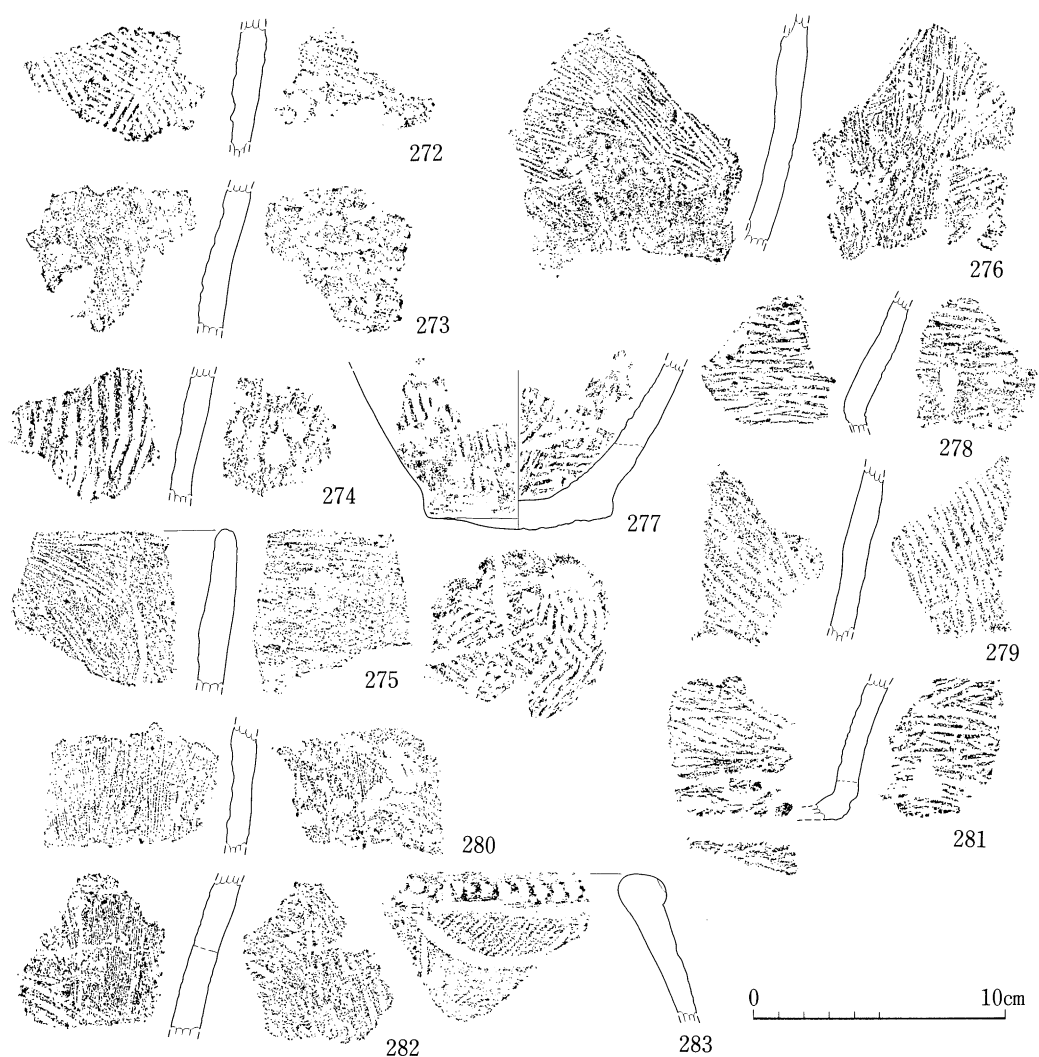
第51図 C地区遺構内 (No.111・112・114) 出土土器拓影図 (23)



第52图 C地区遺構内 (No.114・11・14・17G) 出土土器拓影図 (24)



第53图 C地区遺構内 (No.37・43・44・56) 出土土器拓影图 (25)

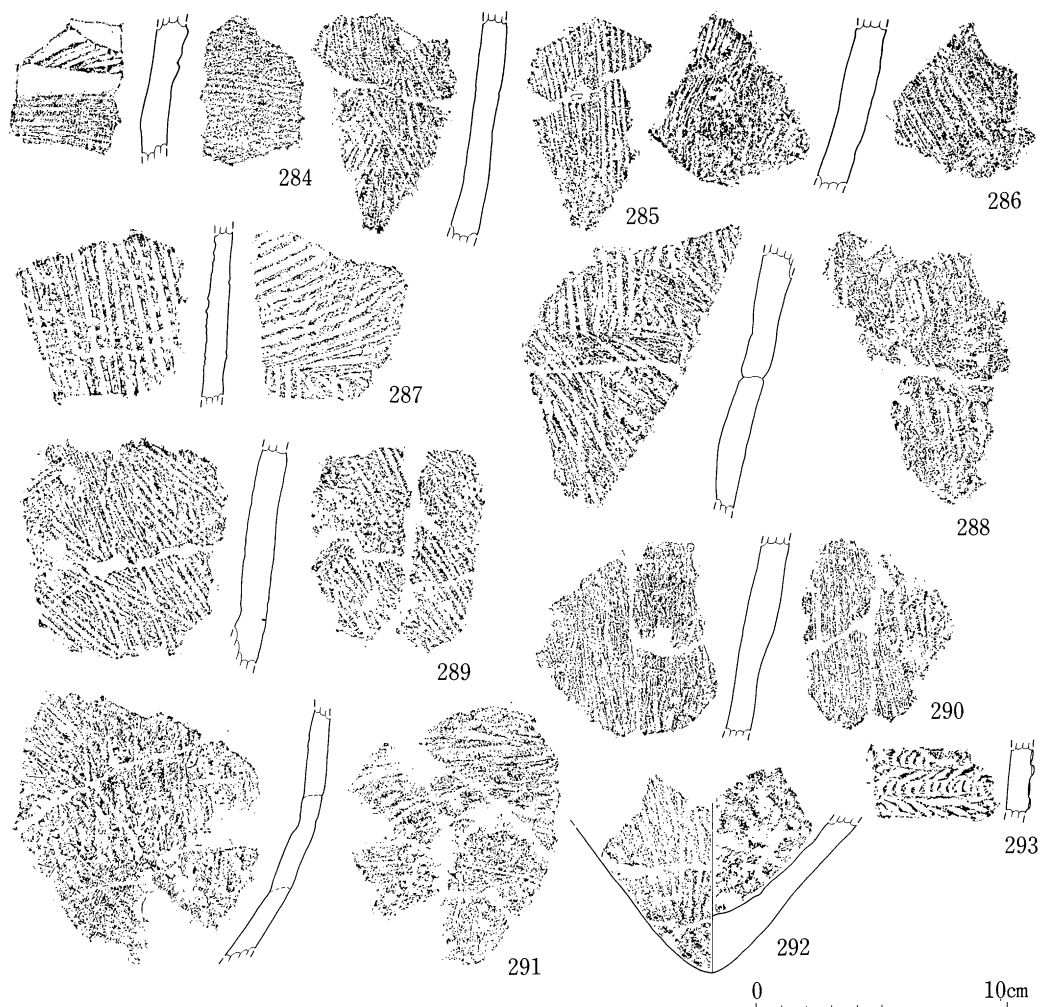


第54図 C地区遺構内 (No.57・58・59・60・62) 出土土器拓影図 (26)

ている土器と同様に貝殻条痕文施文の土器群であるが、一部に時期を異にする土器片の出土も見られた。

283及び294・295の3点が後期の土器破片であり、293が1点のみではあるが、半截竹管による爪形文を施文する前期の土器片である。

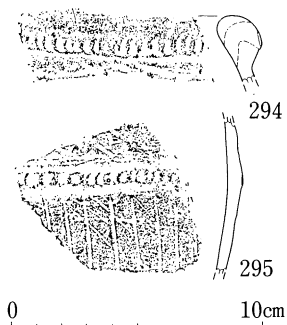
283は、No.62とした径1 mほどの円形ピットから282の土器片と共に出土している。また、294・295の2点は、No.11とした2 m×2 mほどの不整形な遺構から出土したもので、当遺構からは他に伴出遺物が見られないことから、早期末葉の遺構群の中にあつてNo.11遺構のみが、後期末葉に掘り込まれた可能性もある。



第55図 C地区遺構内 (No.201) 出土土器拓影図 (27)

溝状遺構は数条検出されているが、これらのうちC地区西側部分で確認された201号溝から第55図284～293とした土器片が出土している。

中に前述した前期に位置付けられる土器片が1点(293)混入しているが、他はいずれも貝殻条痕文を施文する土器片のみであり炉穴群出土の土器類と同一のものである。本溝状遺構が、炉穴群と重複し炉穴群を切る形で掘り込まれているため、本来炉穴群に伴っていた遺物が、溝内に2次的に入り込んだものであろう。

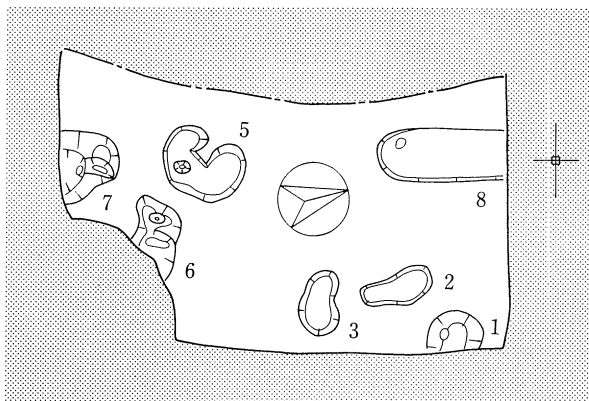


第56図 C地区遺構内出土土器拓影図 (28)

IV. D地区の遺構・遺物

D地区としたのは、第4図に示したようにC地区の西側部であるが、調査地域の関係上第57図とした南北12m、東西7mの範囲をD1地区とし、西側にE地区の連なる南北10m、東西12mをD2地区とした。

D1地区では、第57図に見るように他の地区で検出されている炉穴及



第57図 D1地区検出遺構分布図 1/200

び、溝状遺構の類はまったく発見されておらず、不整形を呈した性格不明の落ち込みのみが検出されている。また、これらのD1地区検出の遺構群からは、土器片等の遺物類も伴出していないため、時期についても把握することができない。

一方、D2地区では、第62図に見るように他地区と同様に炉穴が検出されている。

炉穴は、2ヶ所において検出され(No.9・10)、炉穴の他には、炉穴の西側部から、伴出遺物のない性格不明の落ち込みが幾つか検出されている(No.11～16)。

No.9(第58図上)は、図を一見しても明らかなように、少なくとも4基以上の炉穴が重複しているものと思われる。焼土面は6ヶ所に見ることができる。いずれも長軸2m～3.5mの長楕円形を呈した炉穴の集合体であり、第59図1～第60図19に掲げた土器が伴出している。

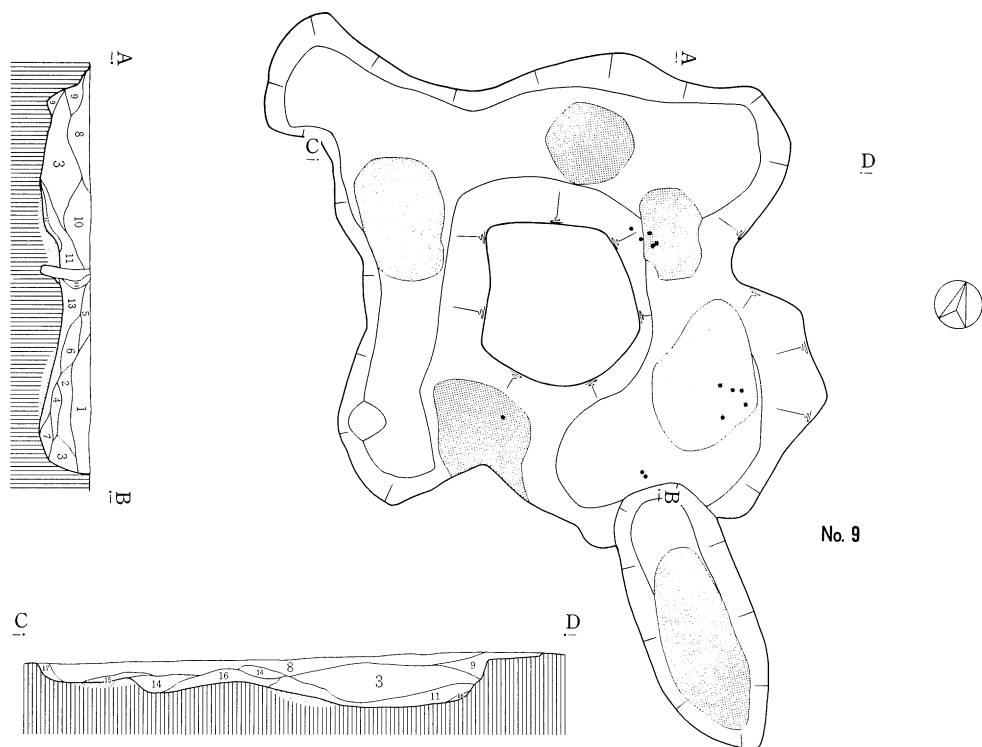
これらの土器には、口縁部に微隆起線文と篋描き沈線の組み合わせによる三角形を主体とした文様を施文した土器群と貝殻条痕文のみを器面に充填した土器群の2種がある。

No.10(第58図下)は、No.9の南側から検出された炉穴で一基のみの単独な形で検出されている。単独ではあるが、炉穴底面には、3ヶ所で焼土面が見られる。

炉穴は、東西4m、南北1.7mと東西に長い長楕円形を呈したもので、現存部で深さ50cmを測る。焼土の状況から見ると東側に在る径1mの焼土面が本炉穴の主体を成す焼土(焼成部)であり、西側に見られる一回り小さい焼土面は次段階あるいは2次的な焼成部と思われる。

遺物の伴出状況では、本遺構の西側半分より第60図20～第61図39の土器片類が遺構底面から若干浮いた状態で出土している。いずれも小破片であるが、39のように底部の形状を捉えることのできる例もある。

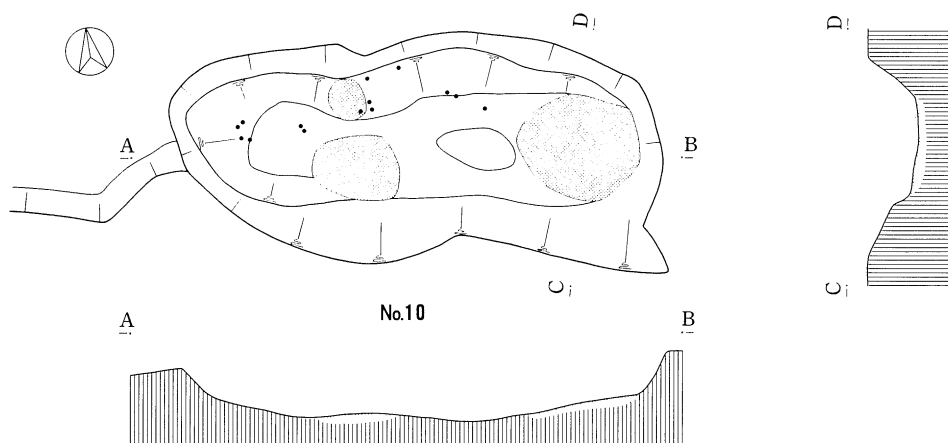
第61図40～46は、No.9及びNo.10の西側に広く見られた一段低い遺構?から出土したもので、条痕文系の土器群の中にあつて、篋描きによる集合沈線により口縁部を充填することを特徴とする土器群である。



No. 9

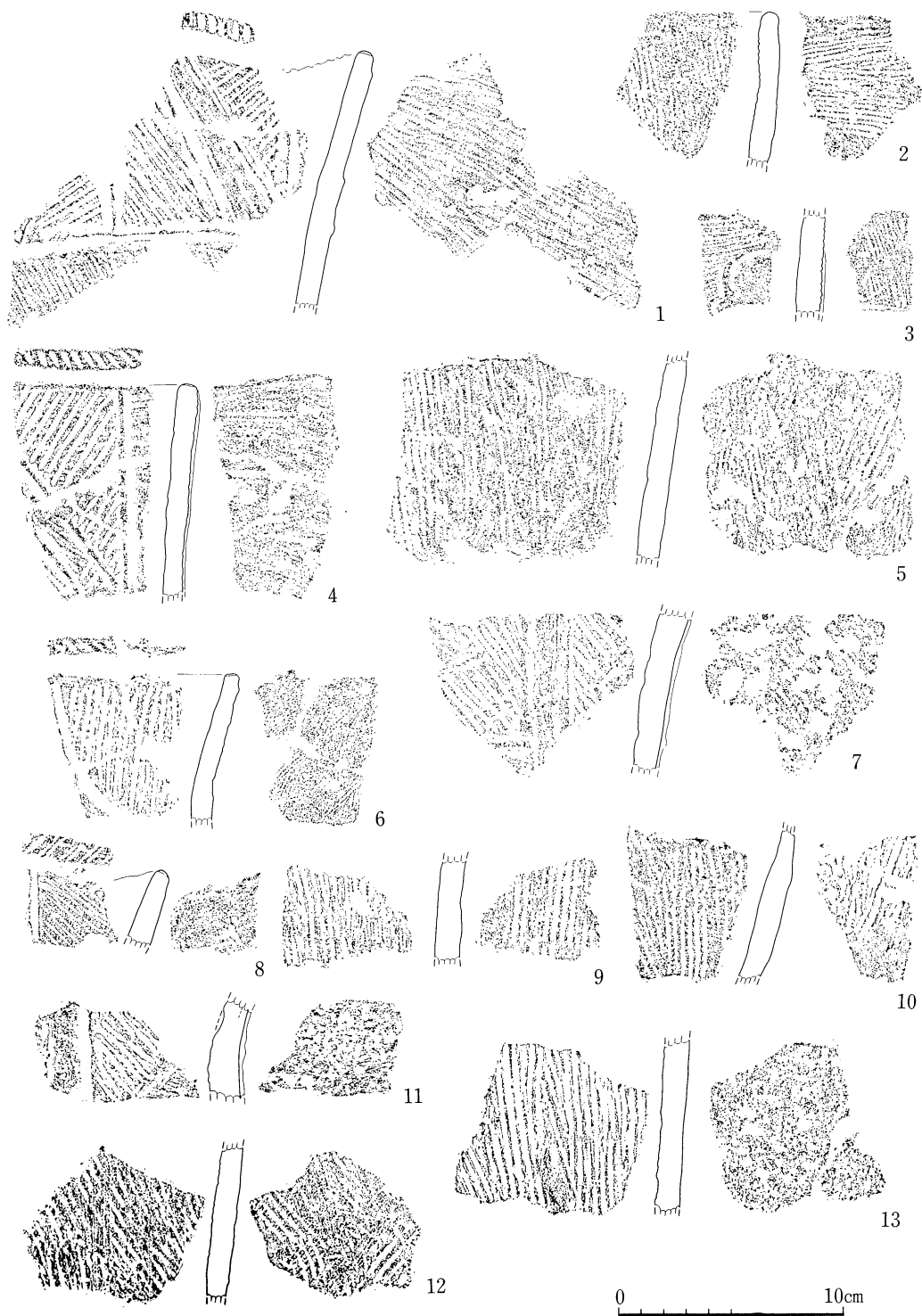
- | | |
|-------------------------------|--|
| 1 : ローム粒・焼土粒を含む黒褐色土層 | 13 : やや軟質で暗い褐色土層 |
| 2 : 1層と似た状況を示すが、1層より色調が明るい土層 | 14 : やや軟質で多量のローム粒を含み、少量の焼土粒を混入する明るい暗褐色土層 |
| 3 : ローム粒を多量に含み焼土粒を混入する黒褐色土層 | 15 : 8層と似た状況を示すが、8層より焼土の混入が多い土層 |
| 4 : ローム粒を多量に含み焼土粒を混入する暗褐色土層 | 16 : ローム土塊（径3cm）をブロック状に混入する褐色土層 |
| 5 : 多量のローム粒と少量の焼土粒を含む暗褐色土層 | 17 : 全体にロームが混入する褐色土層 |
| 6 : 多量のローム粒を含む暗褐色土層 | 18 : ローム土塊（径1cm）をブロック状に混入する暗褐色土層 |
| 7 : 軟質で多量のローム粒・焼土粒を含む暗褐色土層 | |
| 8 : ローム粒を含みごく少量の焼土粒を混入する暗褐色土層 | |
| 9 : ローム粒・ローム土塊と少量の焼土粒を含む暗褐色土層 | |
| 10 : 3層と似た状況を示すが、より明るく硬質な土層 | |
| 11 : ローム粒を含み多量の焼土粒を混入する暗褐色土層 | |
| 12 : 11層より更に焼土粒の混入がはげしい暗褐色土層 | |

0 2 m

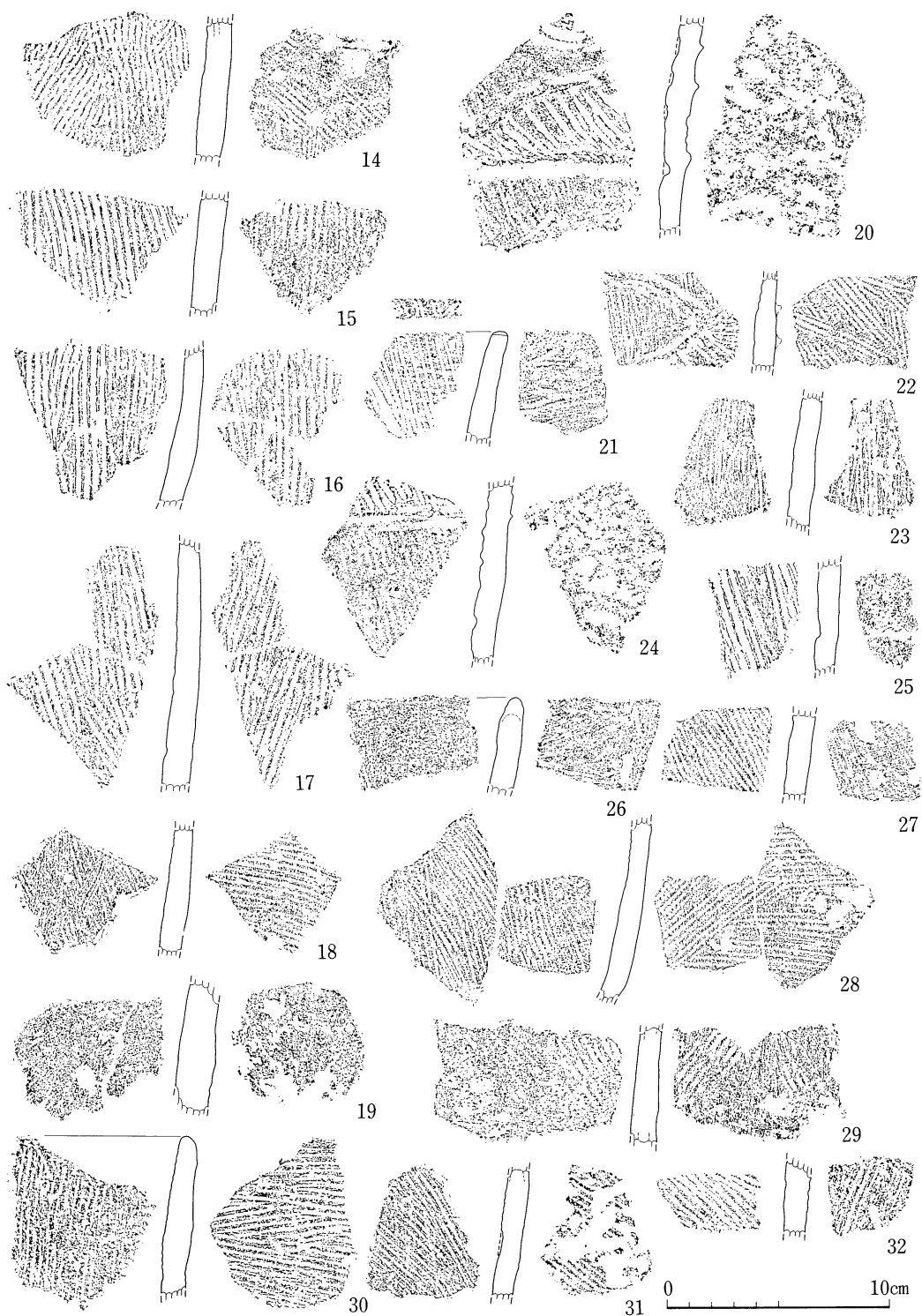


No.10

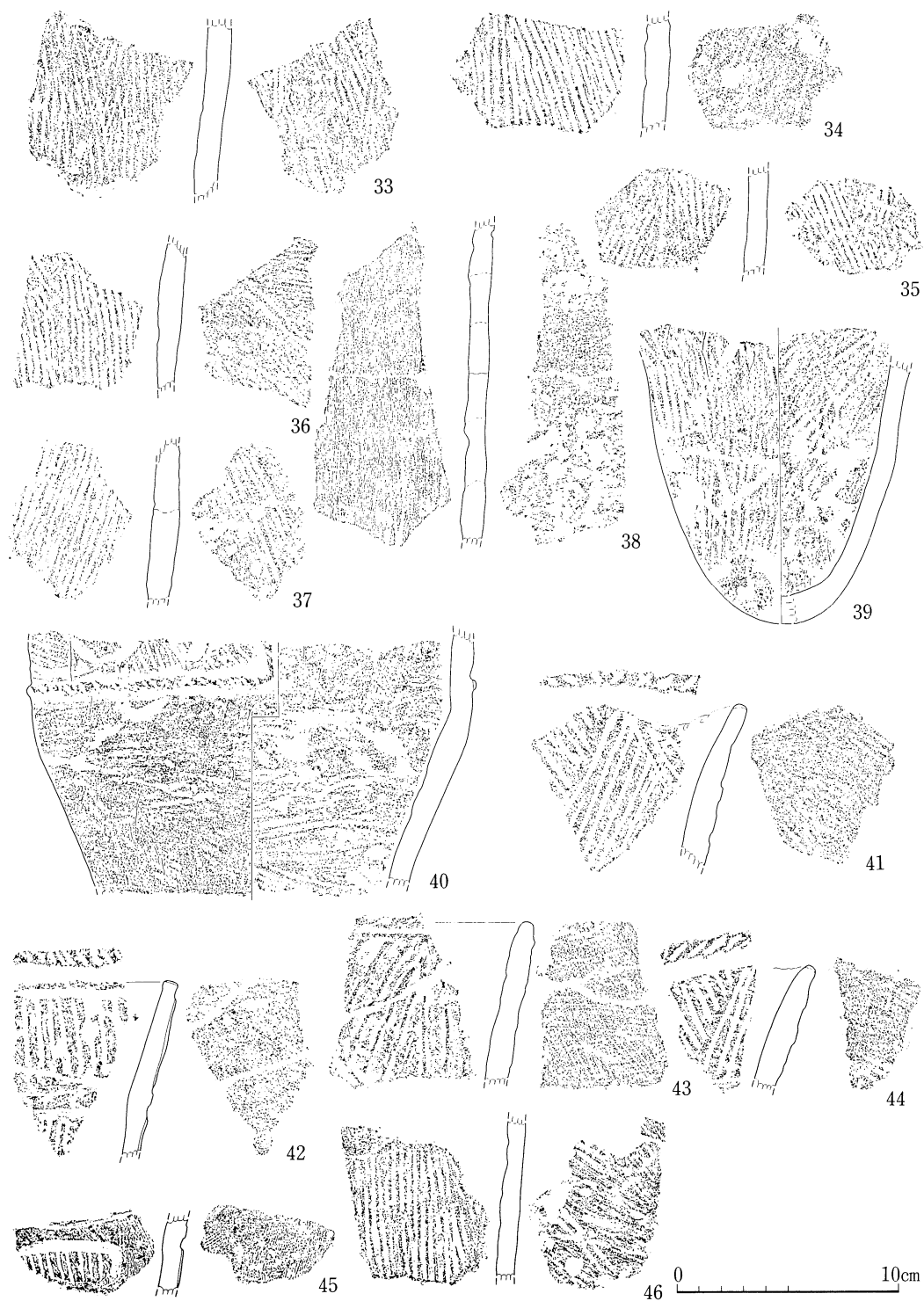
第58図 D 2 地区検出遺構実測図



第59图 D 2 地区遺構内 (No. 9) 出土土器拓影図 (1)



第60图 D 2 地区遺構内 (No. 9・10) 出土土器拓影図 (2)



第61図 D 2 地区遺構内 (No.10・17) 出土土器拓影図 (3)

V. E地区の遺構・遺物

D 2 地区に続く西側の調査区を E 地区とした(第 4 図)。

当地区では、第 62・63 図の遺構分布図に示したように、炉穴と径 1 m 前後のピットが検出されている。また、2ヶ所にゴミ捨ての大穴による攪乱部分が見られる。

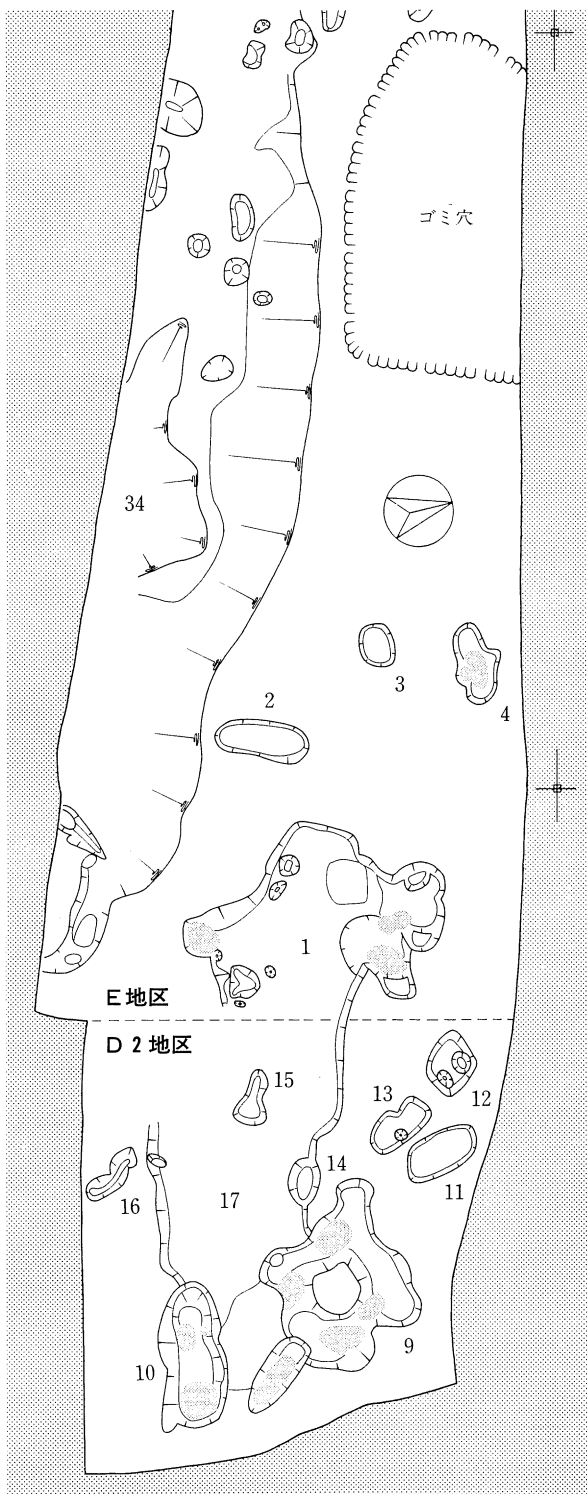
炉穴は 10ヶ所で確認されているが、C 地区等で見られたような多くの炉穴が重複したような例は余りなく、ほとんどが単独で存在している。

No. 1 (第 64 図) E 地区の東端に位置する炉穴で、3ヶ所に焼土面を有している。

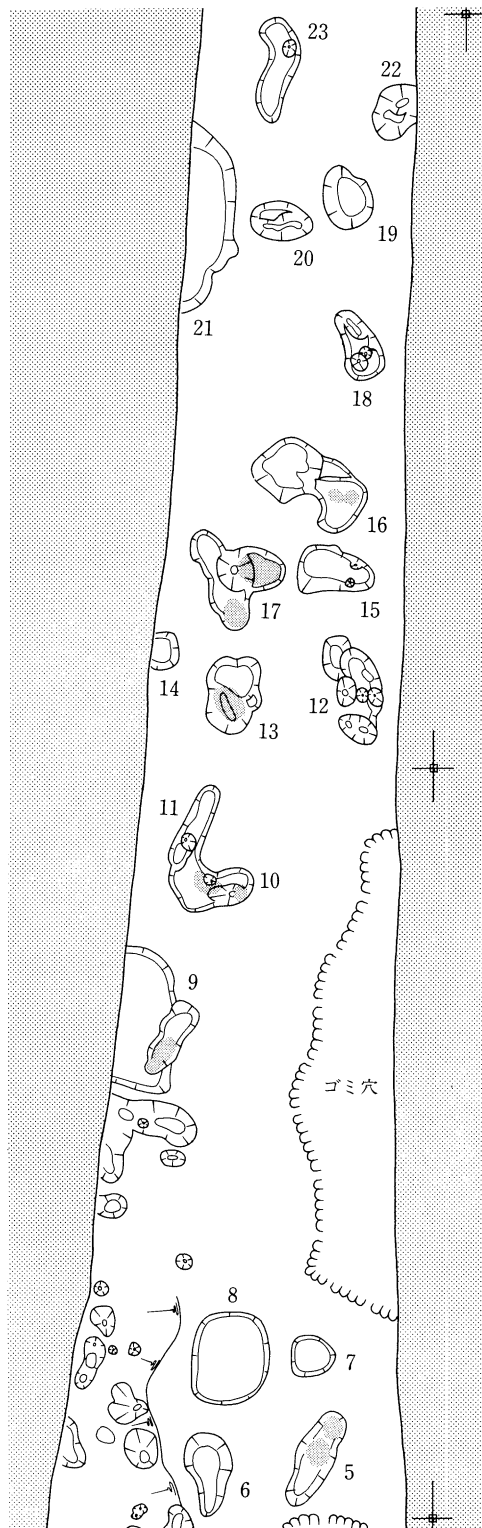
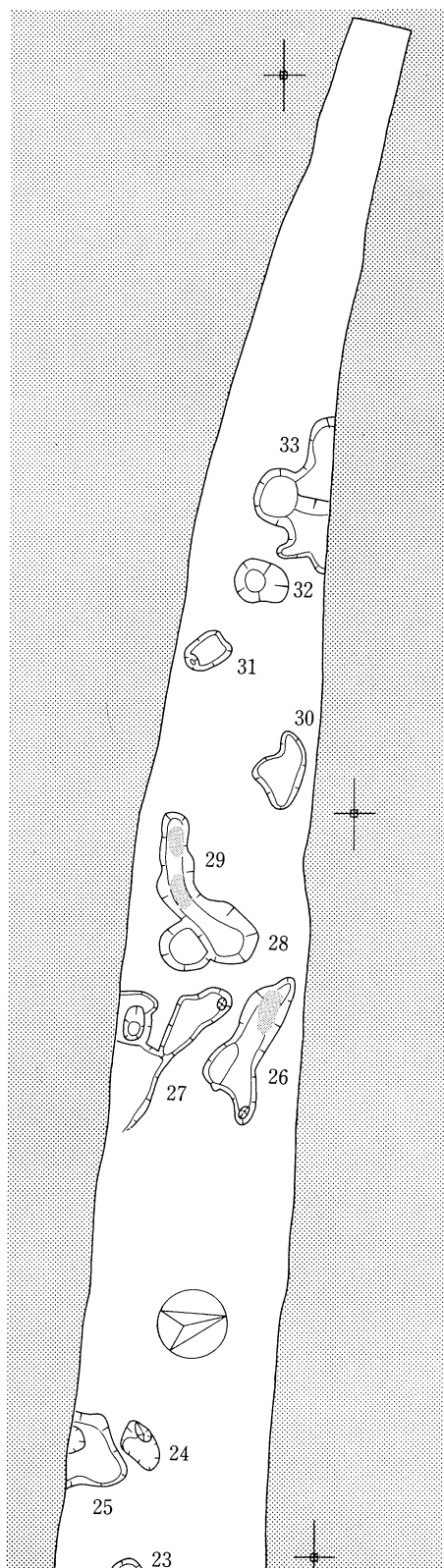
焼土は、北側に 2ヶ所、南側に 1ヶ所見られ、北側部分の焼土は第 64 図に見るように 2 基の炉穴が重複したことにより 2ヶ所に焼土を残したと思われる。

出土遺物は、北側部の焼土上面からの出土が多く、南側に離れて存在する焼土付近からの出土はほとんどない。

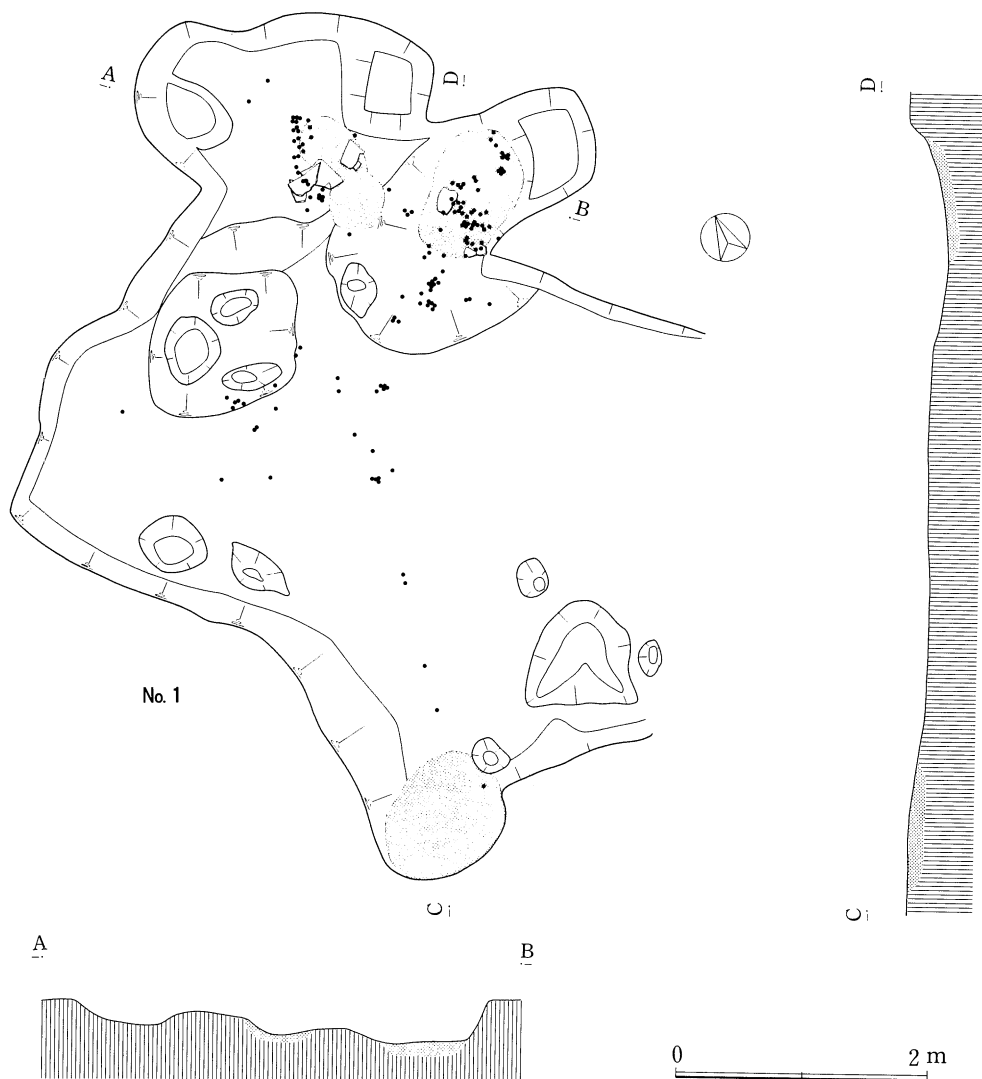
また、本跡は、第 62 図に見るように中央部分の平面な落ち込み部分が、D 2 地区の No. 9・No.10 炉穴西側部分の一段低い落ち込みへと連続しているものであり、D 2 地区 No. 9・No.10 炉穴と E 地区 No. 1 炉



第 62 図 D 2・E 地区検出遺構分布図 1/200



第63図 E地区検出遺構分布図 1/200



第64図 E地区検出遺構実測図(1)

穴とが、何らかの繋がりを持っているものと考えることができる。

前述したようにNo.1 炉穴からは、特に北側焼土付近から多数の遺物が出土しているが、それらの内、主な土器類を第67図1～第69図24として掲載した。これらの土器は、ほとんどが小片としての出土であったが、口縁部から胴部にかけて復元可能な土器が2点あった(第67図1・5)。いずれも北側部の西側焼土上面部から出土した土器で、大きさに若干の相違はあるものの口縁部は平縁で外傾し、表裏面共に貝殻条痕文を充填した土器である。

No.1 炉穴からは、これら2点の他には土器の形状等のある程度把握できる例は出土していないが、貝殻条痕文以外の文様により器面を飾る土器の破片が何点か出土している。

それらは、いずれも口縁部分の破片であるが、第68図9のように微隆起線文を施したもの、10及び12のように、直線な沈線により三角形の文様を作り出すものなどがある。

No. 4 (第65図)は、No. 1 の西北方 5 m の地点から検出された炉穴である。

東西 2 m、南北1.3mほどの不整長楕円形を呈し、中央部に焼土面を有している。遺構は残存部で20cmほどの深さしかなく、ほとんど遺構底部分が残されていたにすぎない。

伴出遺物は少なく、図示できるような土器は出土しなかった。

No. 5 (第65図)は、No. 4 とした炉穴から西方に20mほど離れた地点から検出された炉穴である。No. 4 炉穴とNo. 5 炉穴との間からは炉穴の検出はないが、この部分に径10mほどのゴミ穴が存在しているため、この範囲に炉穴等の遺構が存在したかどうか確定できない。

No. 5 炉穴は、No. 4 炉穴と同様に 1 基のみが単独で存在している。東西2.7m、南北 1 m の規模をもつ長楕円形の遺構で、底面中央部と北寄りの部分と 2 ヶ所に径60～70cmほどの焼土面が見られるが、掘り込みの重複が確認されていないため、同一ピット内において火燃し部の移動により 2 ヶ所の焼土面ができたものと思われる。

本跡からは、伴出遺物は一切出土していない。

No. 9 (第65図) E 地区のほぼ中央部から検出された炉穴で、径3.5mほどの隅丸方形状の遺構北壁部と重複している。

南北 2 m、東西80cmの細長な掘り込みの南半部に焼土面が見られる。伴出遺物はほとんどなく僅かに第70図25が 1 点出土したのみである。

No.10(第65図)No. 9 炉穴の西側 2 m に位置する。南北2.2m、東西1.4mの不整形を呈する炉穴で南側部分がNo.11とした東西2.5m、南北60cmの細長な遺構と一部重複している。

北側部及び中央部の 2 ヶ所に焼土面が見られる。伴出遺物はない。

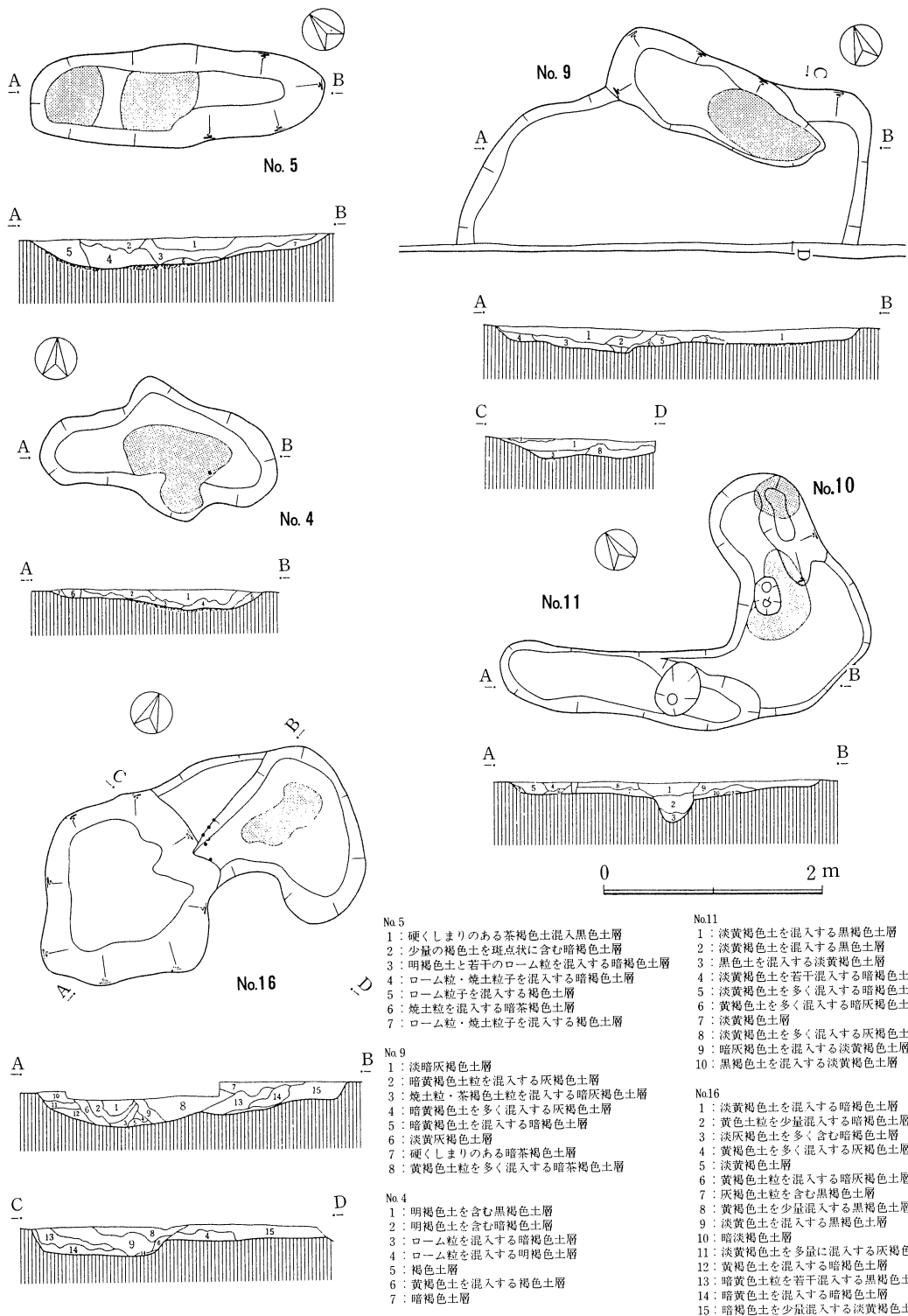
No.13(第66図) 2 m×1.5mの不整形を呈しているが、断面図に見るように西側部の径1.3mほどの円形なピットと重複して炉穴が作られている。

本跡は東西1.5m、南北 1 m と小規模であるが出土遺物には、第70図26～28、特に27に示したような大形な土器が伴出している。27は、現存部で口縁径32cm、高さ35cmと大形な土器であり底部を欠損しているが、土器の形状等は捉えることの可能な土器である。

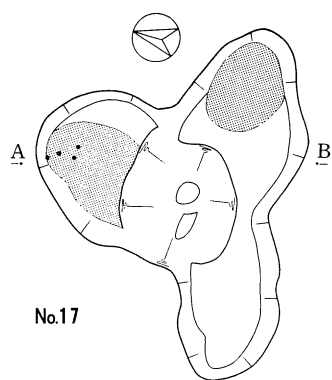
ゆるやかな波状と外反する口縁部を有し、胴部は僅かに脹らみを見せている深鉢形土器で、表面は、横、斜、縦と様々な方向の貝殻条痕文によって充填されている。

No.16(第65図)東西1.3m、南北1.3mの不整形を呈する炉穴で、南側部分が径1.7mほどの円形なピットと一部重複している。No.16炉穴と南側円形ピットとの重複関係は、第65図の断面図を見ても明らかなように、円形ピットが炉穴内充滿土を切り込んで作られている。

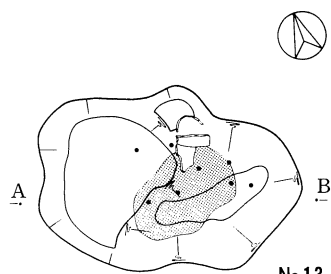
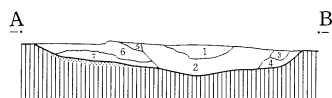
円形ピットからは出土遺物がなく、当跡の掘り込み時期については明らかではない。



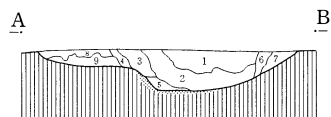
第65図 E地区検出遺構実測図(2)



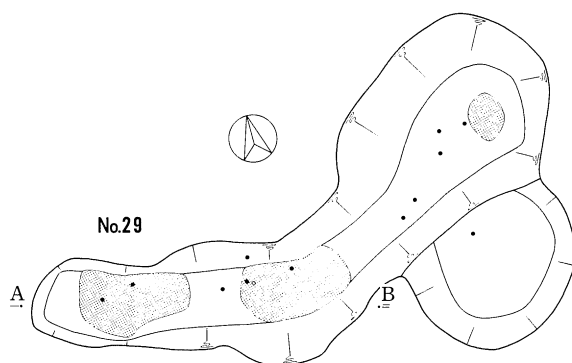
No.17



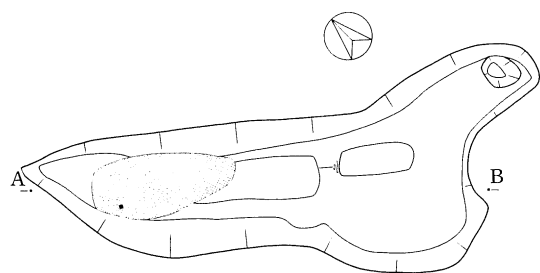
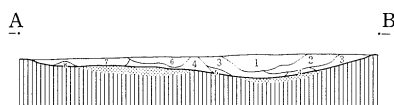
No.13



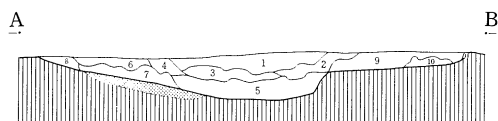
0 2 m



No.29



No.26



No.17

- 1 : 黒褐色土層
- 2 : 少量のローム粒子を混入する黒褐色土層
- 3 : 粘性のある淡黄褐色土層
- 4 : ソフトローム状の黄褐色土層
- 5 : 暗褐色土層
- 6 : ローム粒・焼土粒を若干混入する黒褐色土層
- 7 : 若干のローム粒と多量の焼土粒を混入する黒褐色土層

No.13

- 1 : ほんの少量のローム粒を混入する黒色土層
- 2 : 明褐色土を斑点状に含む黒褐色土層
- 3 : 暗灰褐色土層
- 4 : 淡黄褐色土を多量に含む暗褐色土層
- 5 : 焼土粒を混入する淡黄褐色土層
- 6 : 明褐色土を若干混入する黒色土層
- 7 : 明褐色土を混入する暗褐色土層
- 8 : 淡黄褐色土を混入する白褐色土層
- 9 : 淡黄褐色土層

No.29

- 1 : ローム粒子を若干混入する黒褐色土層
- 2 : ローム粒子を混入する暗褐色土層
- 3 : ローム粒子を少量混入する暗灰褐色土層
- 4 : 焼土粒子を混入する暗褐色土層
- 5 : 暗褐色土層
- 6 : ローム粒・焼土粒子を少量混入する暗褐色土層
- 7 : 焼土粒子を混入する褐色土層
- 8 : 黄褐色土層

No.26

- 1 : 褐色土を斑点状に含む黒褐色土層
- 2 : 黒褐色土を含む褐色土層
- 3 : 黒褐色土層
- 4 : 褐色土を含む暗褐色土層
- 5 : ローム粒・焼土粒子を若干混入する暗褐色土層
- 6 : 褐色土層
- 7 : 黒褐色土を含む暗褐色土層
- 8 : 明褐色土層
- 9 : 暗褐色土層
- 10 : 暗黄褐色土を混入する暗褐色土層
- 11 : 暗黄褐色土層

第66図 E地区検出遺構実測図(3)

No.16炉穴からは、第70図31～36とした土器小片が出土している。

No.17(第66図)No.13とNo.16との間から検出された炉穴で、2基の炉穴が重複している。

東西に細長く東側に焼土面を有する炉穴と、南側に半円形状に見られる炉穴とが重複したもので、断面図に見るように、南側の東西に細長な炉穴が、北側部半円形状の炉穴内充滿土壌を切る形で作られている。

伴出遺物は、北側炉穴内から少量の土器片が出土しているが、図示できたのは僅かに第71図37とした1片のみである。

No.26(第66図) No.9・10・13・16・17とした炉穴群から西側に25mほど離れてNo.26・29とした炉穴が検出されている。

No.26とした炉穴は、第66図に見るように4mほどの細長な遺構で北側底面に焼土面を有するが、断面図の土層堆積から窺うと、9層を切る形で2・5層が堆積していることから本来炉穴は南北2.7m、幅1mほどの細長な楕円形を呈していたものと思われる。

本跡からは第72図54に掲げた土器小破片が1点出土したのみであった。

No.29(第66図)No.26の西側から検出されている。東西4.5m、幅1mほどの炉穴で図に見るようにくの字に曲った形状を示している。中央部と両端の計3ヶ所に焼土面を有する。

伴出遺物には、第72図60～68が挙げられ、61・62のように櫛描状の沈線文も見られる。

E地区からは、以上の炉穴の他に前述したように径1m前後のピットが幾つか検出されているが、これらピット内充滿土壌中に土器片を包含しているピットも多く見られた。

第70図29・30は、No.13炉穴の北側から検出された小ピットの集中するNo.12遺構から出土している。第71図38は、No.16炉穴の西側2mから検出されたNo.18から、同図39～43は、No.18から西側2mの地点で検出された径1.5mのNo.19とした円形ピットから出土し、44・45は東西5m以上の規模を持つNo.21から、46は長さ3mの細長なNo.23遺構、47～第72図53はNo.25遺構から出土している。

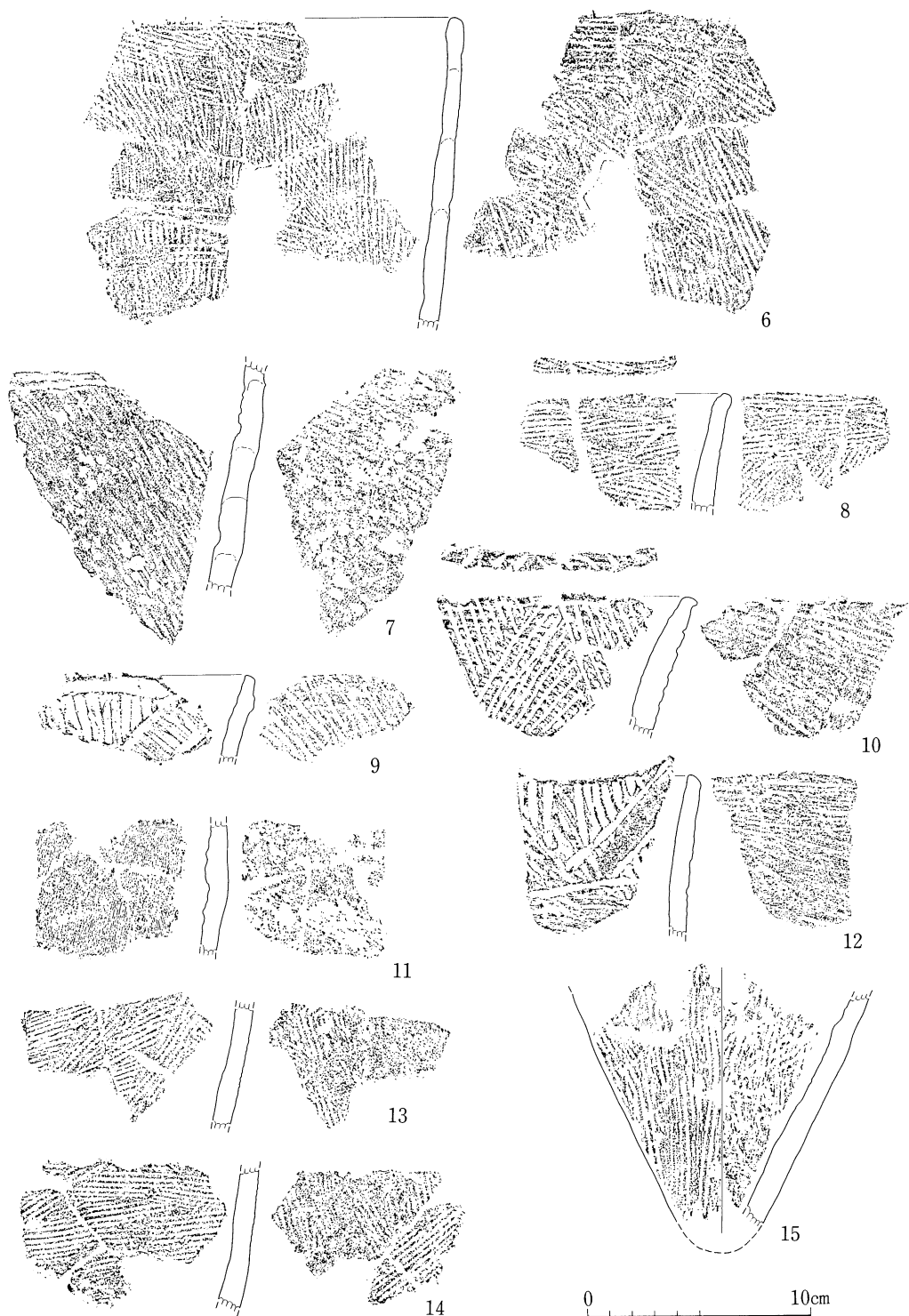
No.26炉穴の南側にあるNo.27遺構からは、第72図56～59が出土し、西側部のNo.31～33遺構からは、第73図69～76の土器小破片が出土している。また、E地区の東側部の南側寄りに30mほどの大きさでゆるやかな斜面状の落ち込みが広がっており、これをNo.34遺構としたが、ここから第73図77～82とした土器小破片が出土している。

遺構には伴出しなかったが、E地区の西端部分で幾つかの土器小片が出土しており、これらを第73図83～92としてまとめて掲載した。

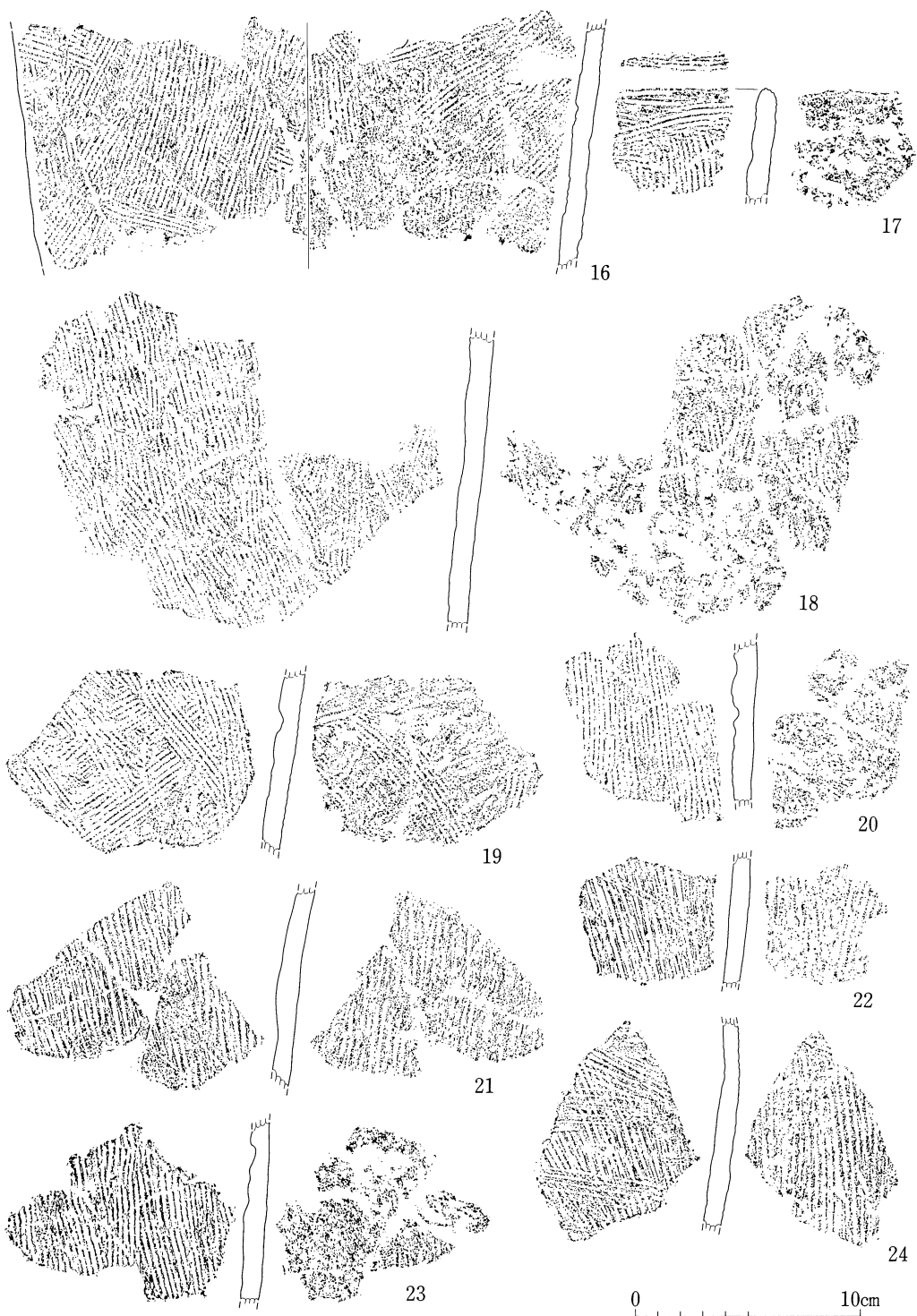
83のように器面に縄文及び縦方向の篋描沈線を施文した例、85・86のように櫛描状に斜走する沈線状の条痕文を施した例、84の如く口縁部に補修孔と思われる穿孔のあるもの、あるいは90のように半截竹管文状の2本の平行沈線文の施文されている例などが見られた。



第67図 E地区遺構内 (No. 1) 出土土器拓影図 (1)



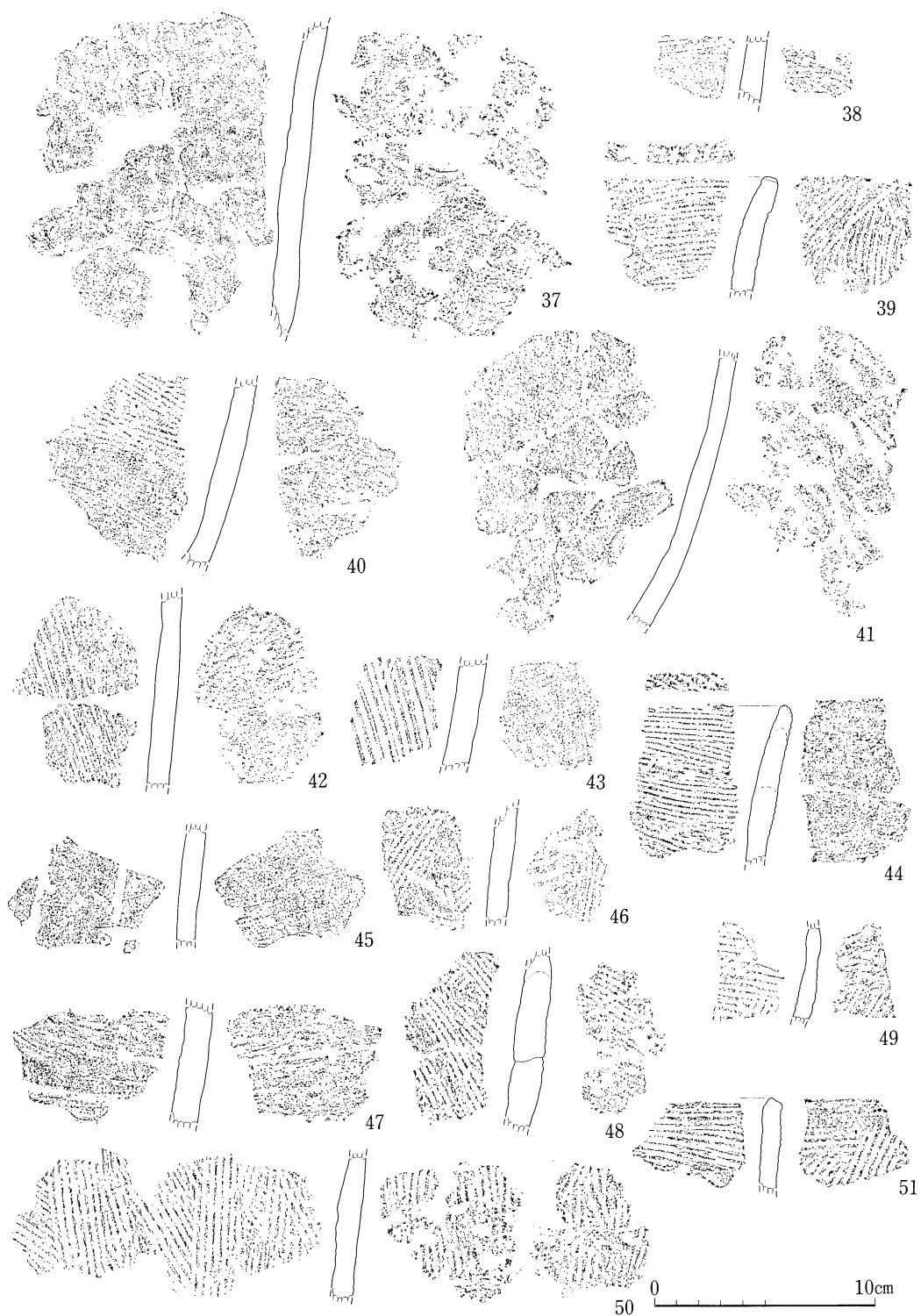
第68图 E地区遺構内(No.1)出土土器拓影図(2)



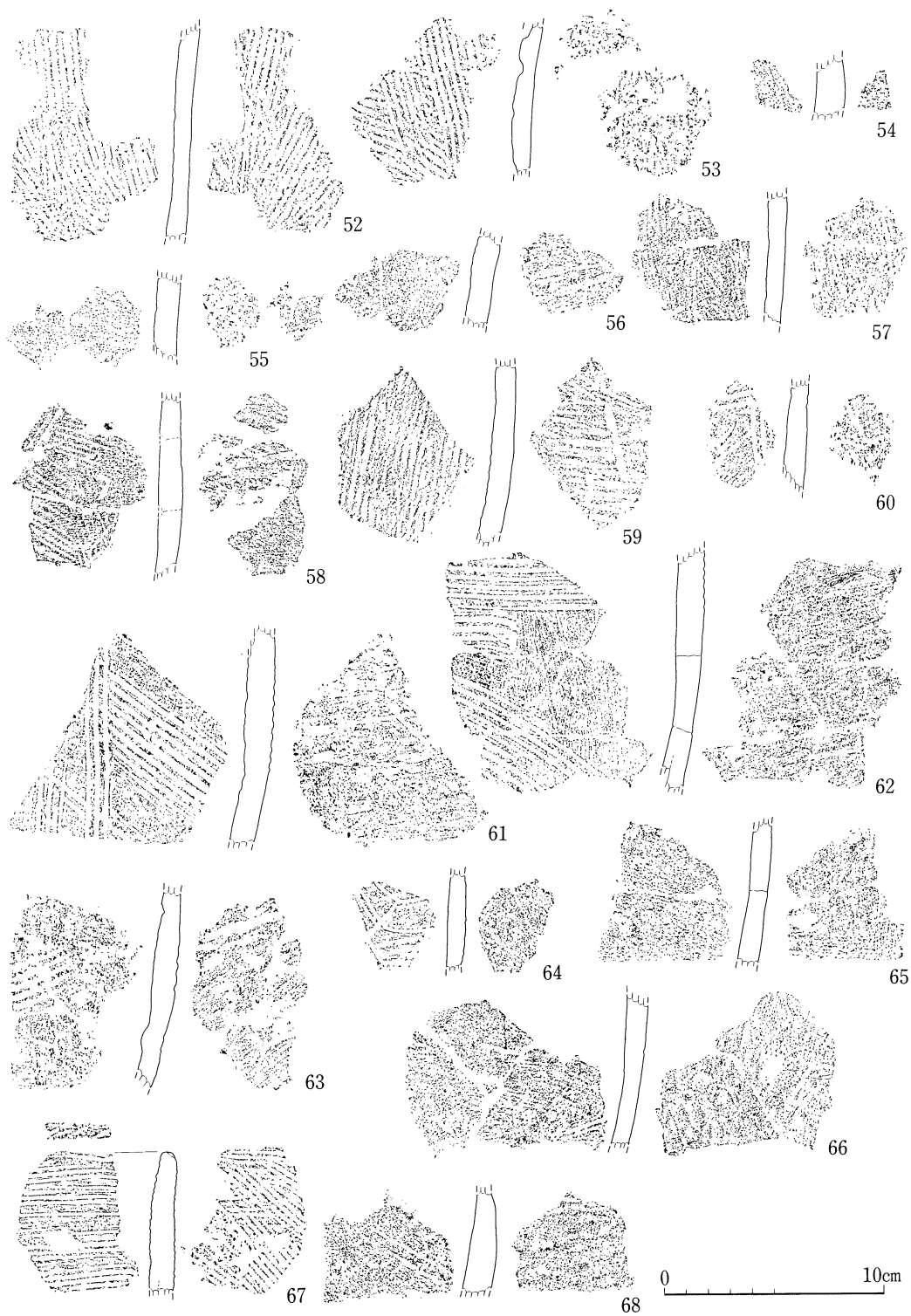
第69図 E地区遺構内(No.1)出土土器拓影図(3)



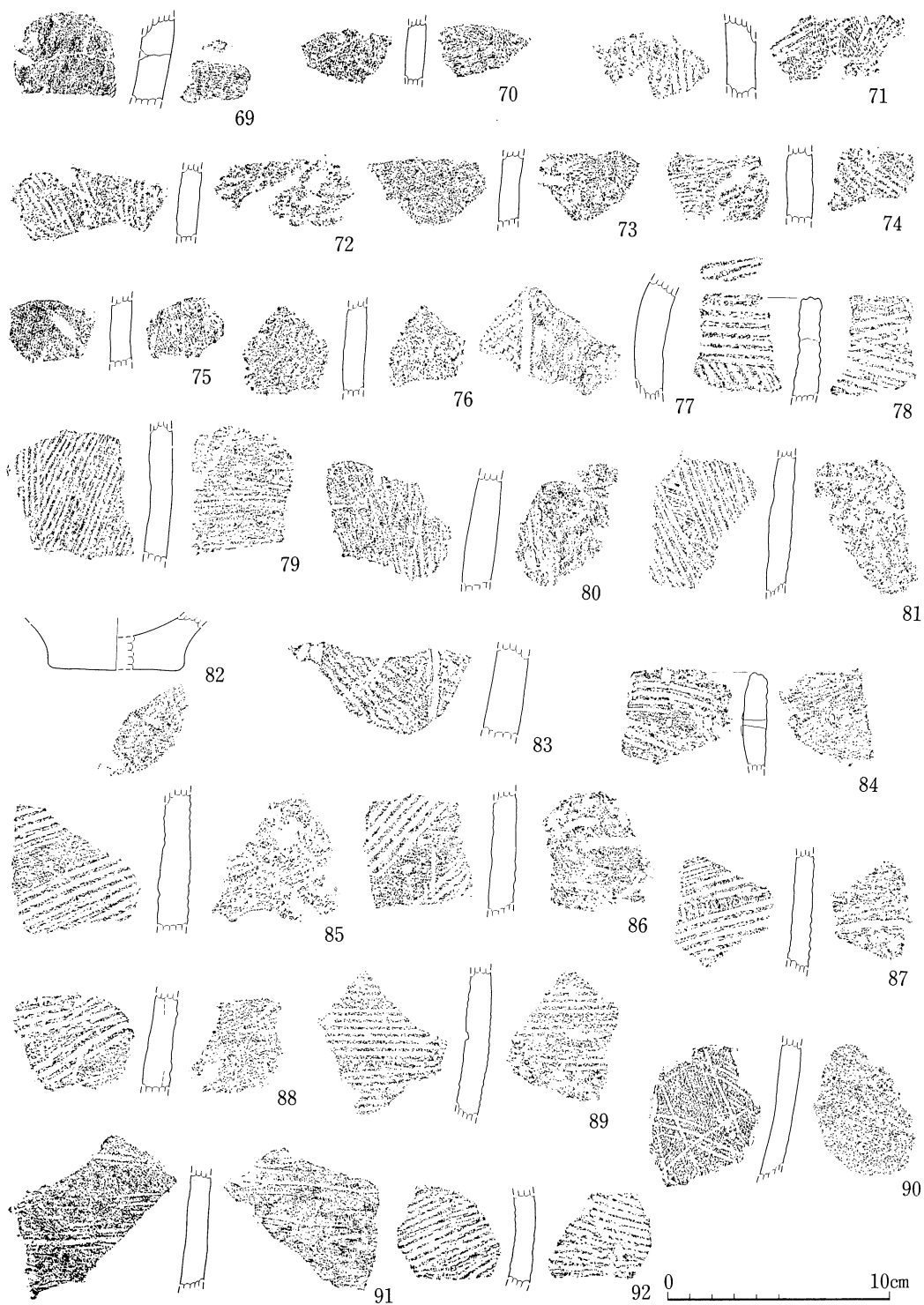
第70图 E地区遺構内 (No. 9・13・12・16) 出土土器拓影图 (4)



第71图 E地区遺構内 (No.17・18・19・21・23・25) 出土土器拓影図 (5)



第72図 E地区遺構内 (No.25・26・27・28・29) 出土土器拓影図 (6)



第73図 E地区遺構内 (No.31・32・33・34・西側) 出土土器拓影図 (7)

VI. F地区の遺構・遺物

F地区としたのは、E地区の西側部の長さ40mほどの範囲で、一部道路により分断されているため東・西に分かれるが、第74図に示すように東側の区域から順に遺構番号を付した。

当地区では、他の地区と同様に炉穴が検出遺構の主体を成しているが、他に円形の掘り込みと、西側区域の中央部を南北に走る溝が検出されている。

炉穴は、8ヶ所で検出されている。

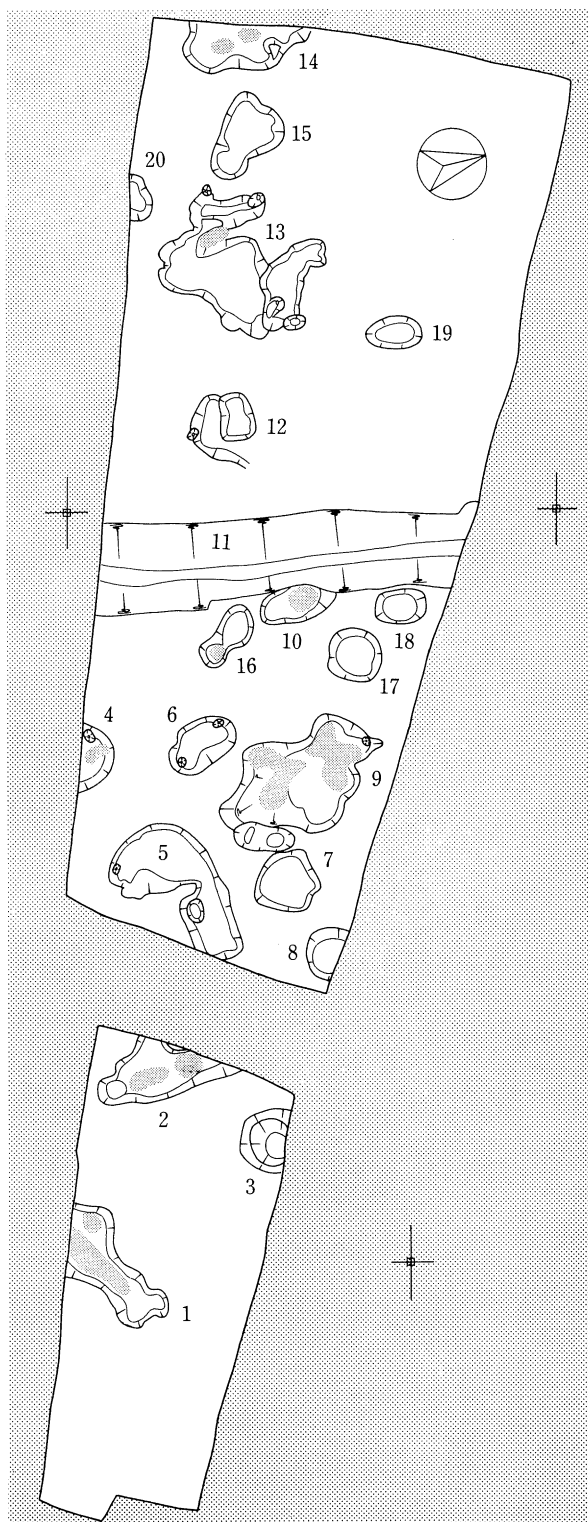
No. 1 (第75図) 長さ3.5mほどが検出されているが、南側部分が未調査地域に跨っているため、全体の規模等は把握できない。

検出された部分について見ると図に見るように北東部分が一段高くなりテラス状になる。

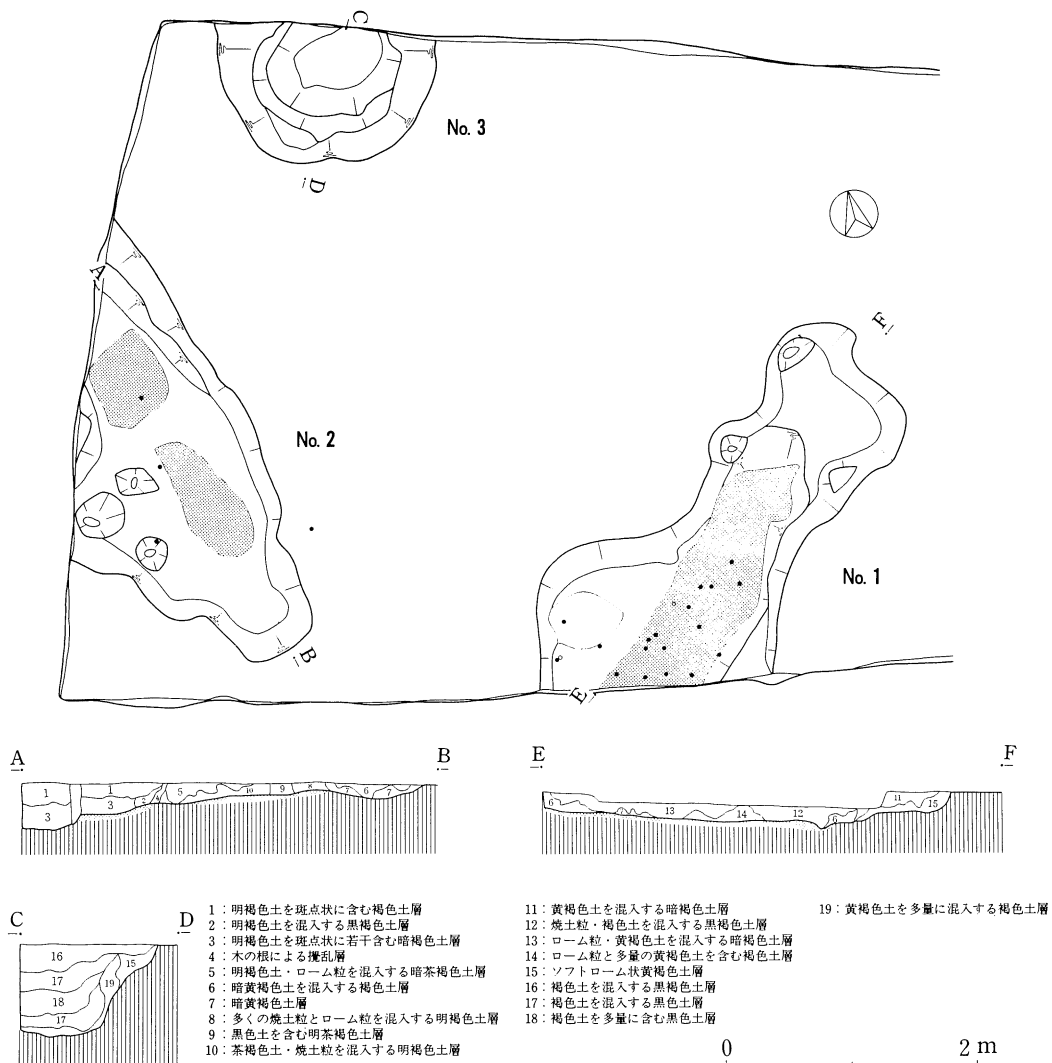
焼土面は、60cm幅で2mと遺構底面の大部分の範囲を占めており焼土面から若干浮いた状態で土器片が出土している。

出土土器の内、主なものを第79図1～9としてまとめた。これらの中では、1・2の2点が、土器の形状をある程度把握可能な例である。

共に表面に細かなハケ状の条痕



第74図 F地区検出遺構分布図 1/200



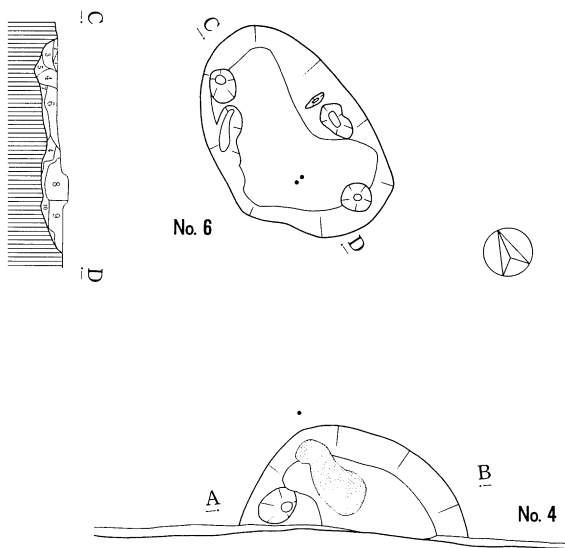
第75図 F地区検出遺構実測図(1)

を横方向に施文しているが、土器形状は異なり、1は外傾する口縁をもち、2は直立する口縁形状となっている。そのため、1は鉢状となり2は、筒状の形態を見せている。

No. 2 (第75図)長さ3 m、幅2 mほどの部分が検出されているが、No. 1 炉穴と同様に、一部が未調査地域に跨り存在するため、遺構全体の規模・形状を捉えるには至っていない。

焼土面は、2ヶ所で確認されているが、No. 1 のように広範囲にわたるものではない。また、出土土器も少なく、図示できたのは、第80図10～14とした4点のみであった。条痕文土器であるが、11とした小片だけは、他と様相を異にし、竹管によると思われる円形押捺文が施されており、条痕文土器とは時期を異にするものと思われる。

- 1：黒褐色土層
- 2：ローム粒を多量に混入する褐色土層
- 3：明灰褐色土層
- 4：暗褐色土層
- 5：ローム粒を多量に混入する明灰褐色土層
- 6：暗灰褐色土層
- 7：黄褐色土層
- 8：黒灰褐色土層
- 9：ローム粒を少量混入する暗灰褐色土層
- 10：黄色土を混入する暗灰褐色土層



第76図 F地区検出遺構実測図（2）

No. 4（第76図）図に見るように遺構南部が未調査地域にかかっているため、全体の規模・形状は不明であるが、検出部分の状況から径2mほどの円形状を呈する遺構と思われる。

焼土面は70cm×30cmほどの範囲に見られた。又、出土遺物は極めて少なく、第80図15の土器小片が1点出土したのみである。

No. 9（第77図上）南北4.7m、東西3mの不整形を呈する落ち込みの中に、2ヶ所の焼土面を有した遺構である。

遺構底面は平坦ではなく、幾つかの遺構が重複した様相を呈し、遺物の伴出状態は、平面図に見るように、焼土上部に集中している。

本跡から出土した土器の内、主なものを第80図16～24としてまとめた。いずれも破片の状態で検出されたもので条痕文を主体とするが、16のように口唇直下に刻目文をもち、口縁部に縦2条の円形突刺文を施文する土器片も出土している。

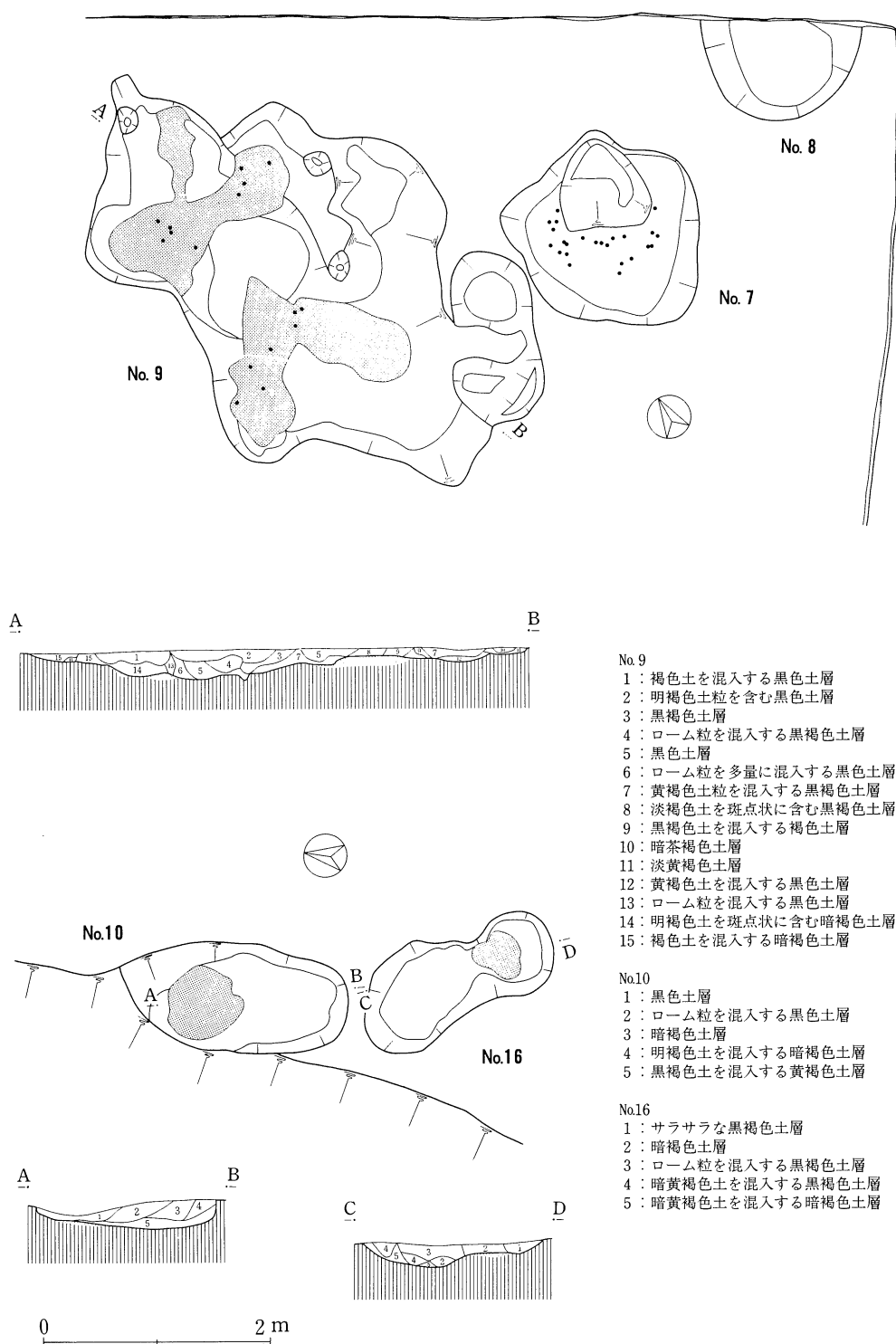
No. 10（第77図下）No. 9 炉穴の西方3mの地点で、No. 11とした南北に走る溝に西側部分を一部削られた炉穴で、南北2m、東西1mの細長な楕円形を呈している。

重複関係の多い他の炉穴に比べ、No. 16と同様に珍らしく単独で存在している。

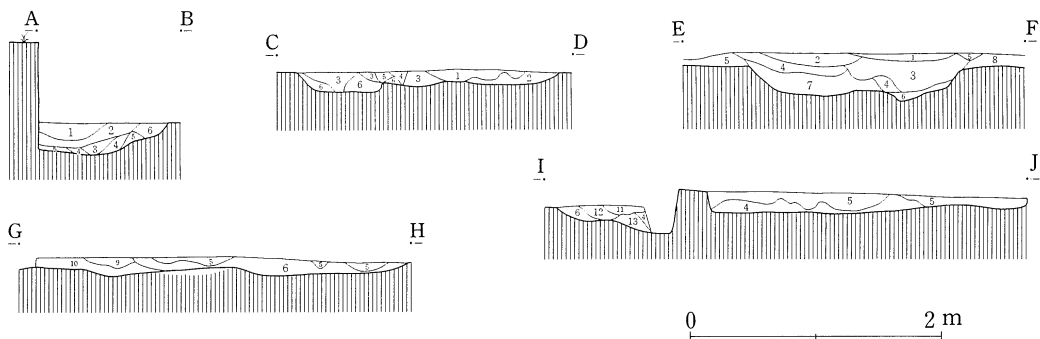
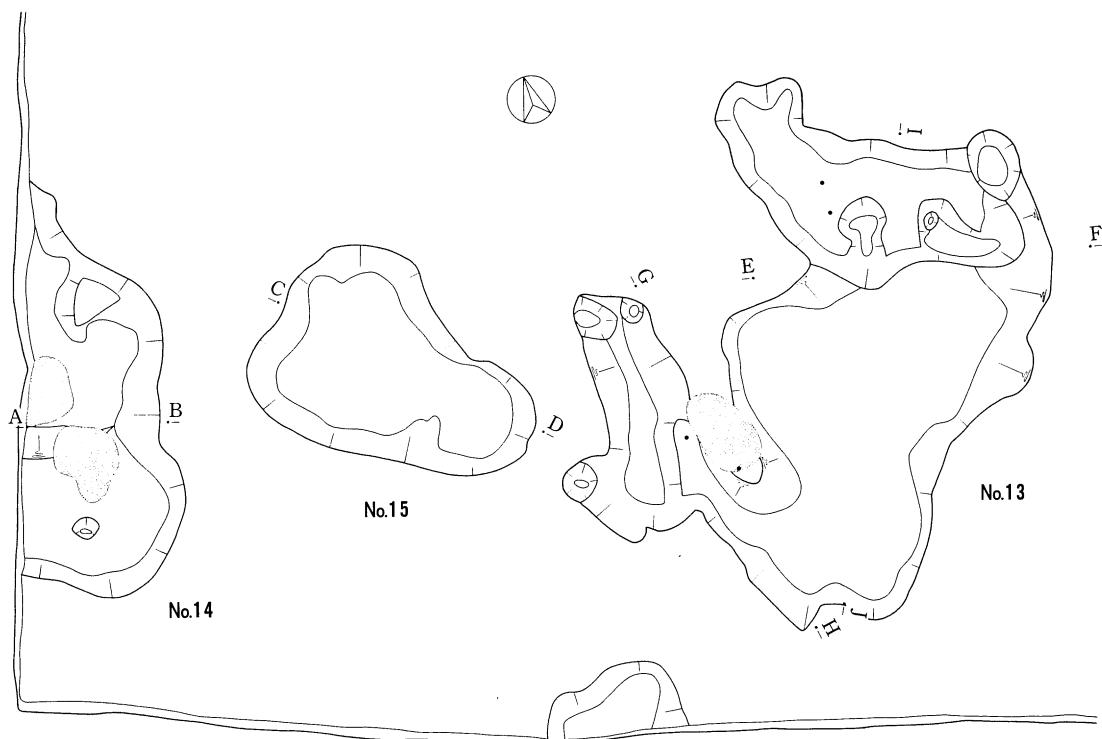
本跡からは伴出遺物は検出されていない。

No. 16（第77図下）No. 10 炉穴に接するようにその南側から検出された炉穴で、前述したように単独で存在する。

規模的にもNo. 10 炉穴とほぼ同様の大きさをもつが、形態的には若干異なり、No. 16 炉穴は中央



第77図 F地区検出遺構実測図(3)



No.14 (A～B)

- 1 : 黒褐色土層
- 2 : 黄褐色土を多量に混入する暗褐色土層
- 3 : 黄褐色土を少量混入する暗褐色土層
- 4 : ソフトローム状黄色土を多量に含む褐色土層
- 5 : ソフトローム状の黄色土層
- 6 : 黄褐色土を多量に混入する褐色土層

No.15 (C～D)

- 1 : 黄褐色土を混入する褐色土層
- 2 : ソフトローム状の黄色土を多量に混入する褐色土層
- 3 : 黄褐色土を混入する暗褐色土層
- 4 : 黄褐色土を少量混入する黒褐色土層
- 5 : 明褐色土を混入する暗褐色土層
- 6 : ソフトローム状の黄色土層

No.13 (E～J)

- 1 : 黒色土層
- 2 : 黒色土を混入する黒褐色土層
- 3 : 黄褐色土と暗褐色土を混入する黒褐色土層
- 4 : 黄褐色土を混入する暗褐色土層
- 5 : 暗褐色土層
- 6 : 暗黄褐色土層
- 7 : 黄褐色土層
- 8 : 暗黄褐色土を含む暗褐色土層
- 9 : 褐色土層
- 10 : ローム粒を多量に含む褐色土層
- 11 : 黄褐色土を少量混入する黒褐色土層
- 12 : 黄褐色土を多量に混入する黒褐色土層
- 13 : 暗褐色土を混入する暗黄褐色土層

第78図 F地区検出遺構実測図(4)

より少し南側部でくびれ、そのくびれ部より南側部に、径50cmほどの焼土面が見られる。

No.10炉穴と同様に伴出遺物は検出されていない。

No.13(第78図)図に見るように少なくとも3基以上の遺構が重複した状況を呈した遺構で、一部に南北70cm、東西45cmの楕円形を呈した焼土面を有しているが、この焼土面は、遺構底部にある訳ではなく、遺構の外側にあるとあって良い状態であるため、他の炉穴とは様相を異にしている。

そのため、No.13は、焼土面は存在するものの他の炉穴とは区別し、炉穴とは別の性格を有する遺構として捉えるべきかも知れない。また、規模に比べ出土遺物も少なく僅かに第81図25・26とした2点の土器片が図示できた程度である。

No.14(第78図)F地区の西部、今回の調査範囲の最西端から検出された炉穴で、図に見るように西側部が未調査地域に跨り存在しているため、遺構全体の規模・形状は明らかではない。

南北3.5m、東西1.3mの部分が検出され、底面に径50cmほどの焼土面が2ヶ所に見られる。規模的にはかなり大きな炉穴であるが、伴出遺物は見られない。

F地区では、以上の炉穴の他に、前述したように円形を呈する幾つかの遺構と溝が検出されているので、以下、それらについて簡単に説明する。

No.3(第75図)No.2炉穴の北側部から検出された遺構で、図に見るように北側部が未調査地区に及んでいるが、検出された部分の状況から径1.8mの円形な遺構と思われる。

現存部で75cmほどの深さを有し、遺構内充滿土壌は、第75図断面図のように極めて自然な堆積状況を示している。出土遺物は見られない。

No.6(第76図)No.4炉穴の北1.5mから検出された南北2m、東西1.3mの楕円形を呈する遺構で南・北・東側の壁直下に径25cmほどの小ピットを配している。

規模・形状等はNo.10炉穴と近似したものがあるが、焼土面はない。伴出遺物は、第81図29とした土器片が1点出土したのみである。

No.7(第77図上)No.9炉穴の東側に接するように検出された遺構で、南北1.9m、東西1.7mの不整形円形を呈した遺構である。

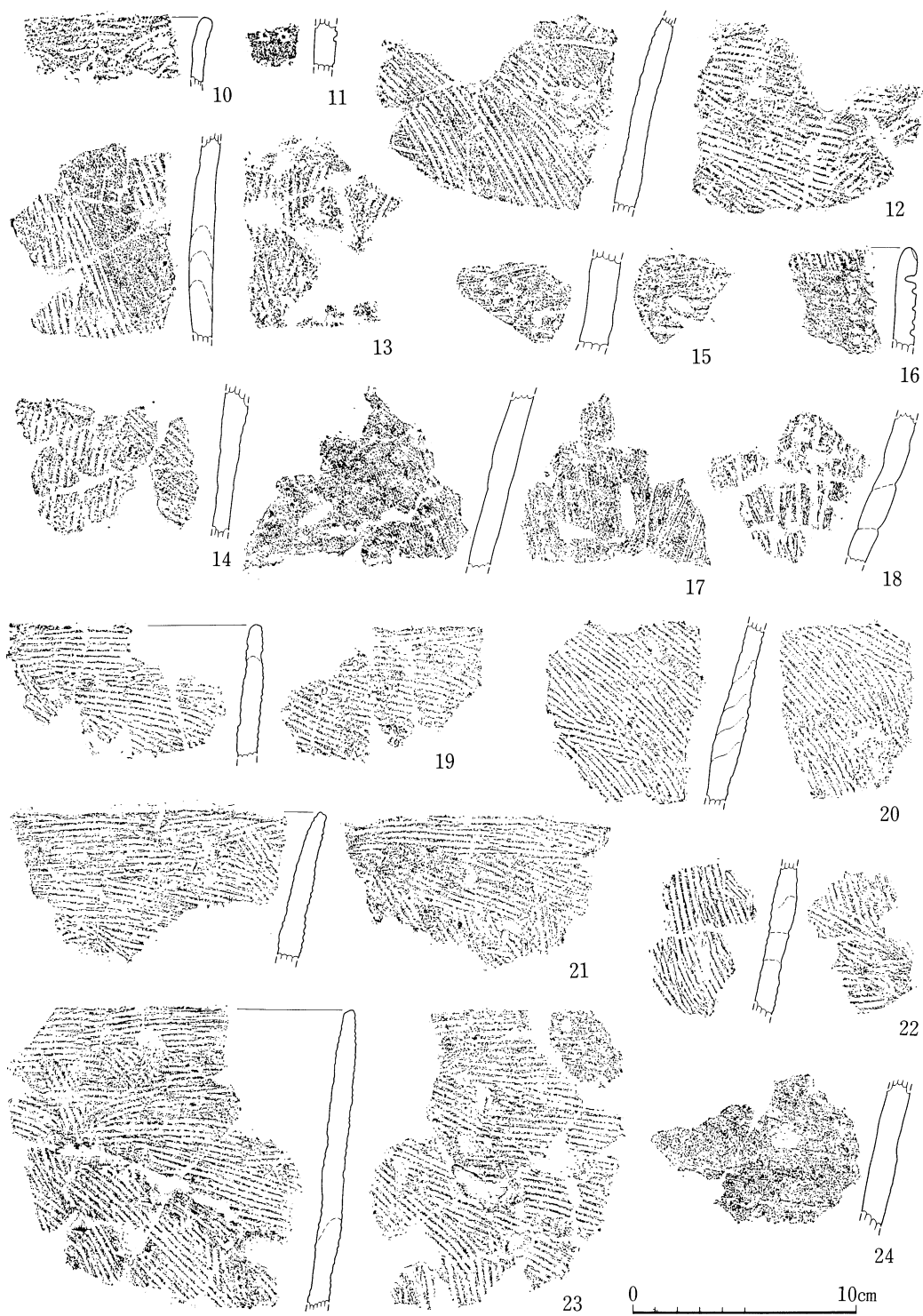
北側に径80cmほどのピットを1つ設けている。他の炉穴以外の遺構が非常に伴出遺物が少ないのに比べ、No.7遺構は、第81図30～41に示した土器に見るように比較的多くの土器片が出土している。これら土器では、32～37とした土器類が他とは若干異った雰囲気条痕を施している。また、30は口唇部に刻目文をもつ土器である。

No.8(第77図上)No.7の西側1mから検出された遺構で、北側部が未調査地域にかかっているが、検出された部分から見て径1.5mの円形な遺構と思われる。

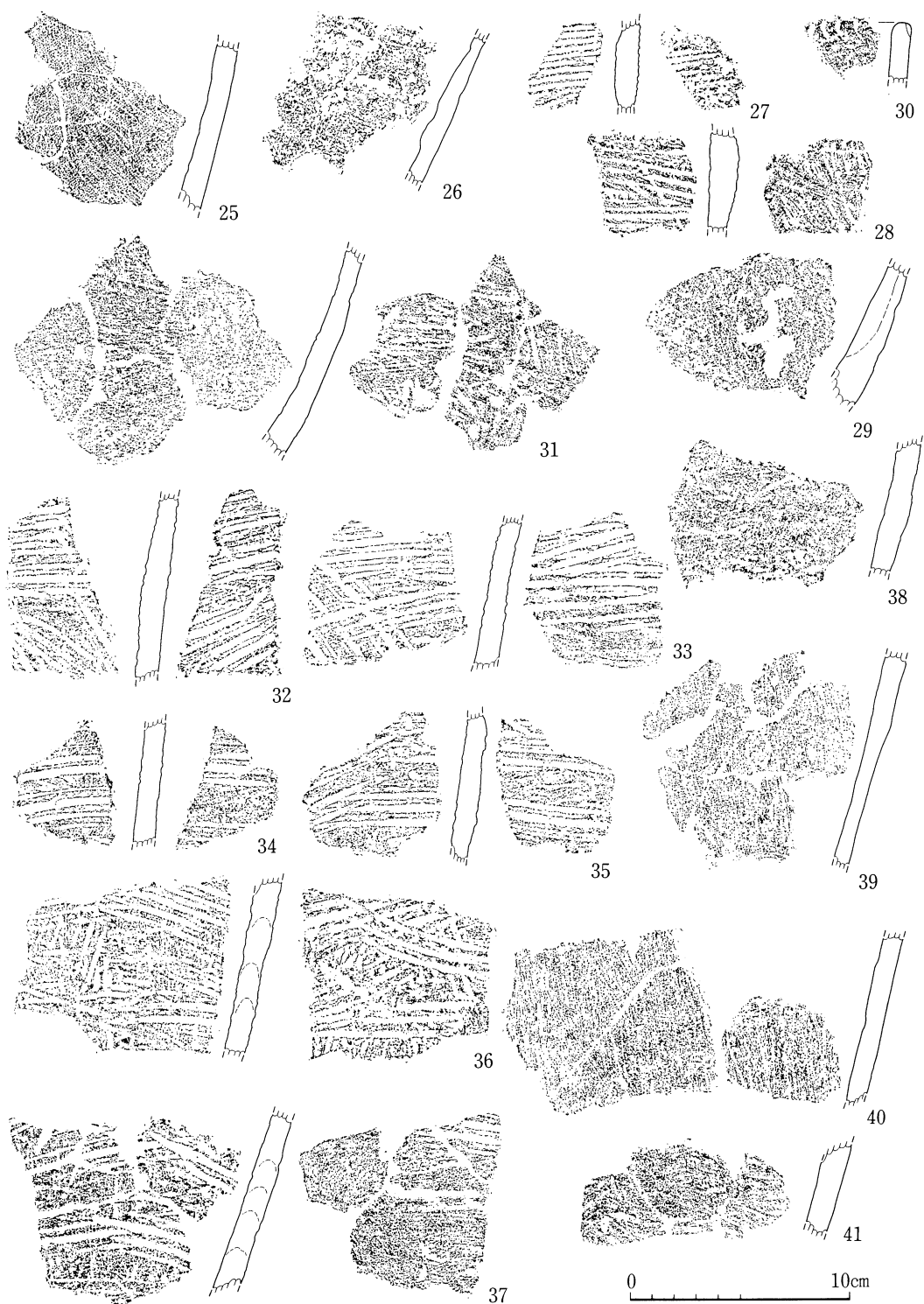
伴出遺物はない。



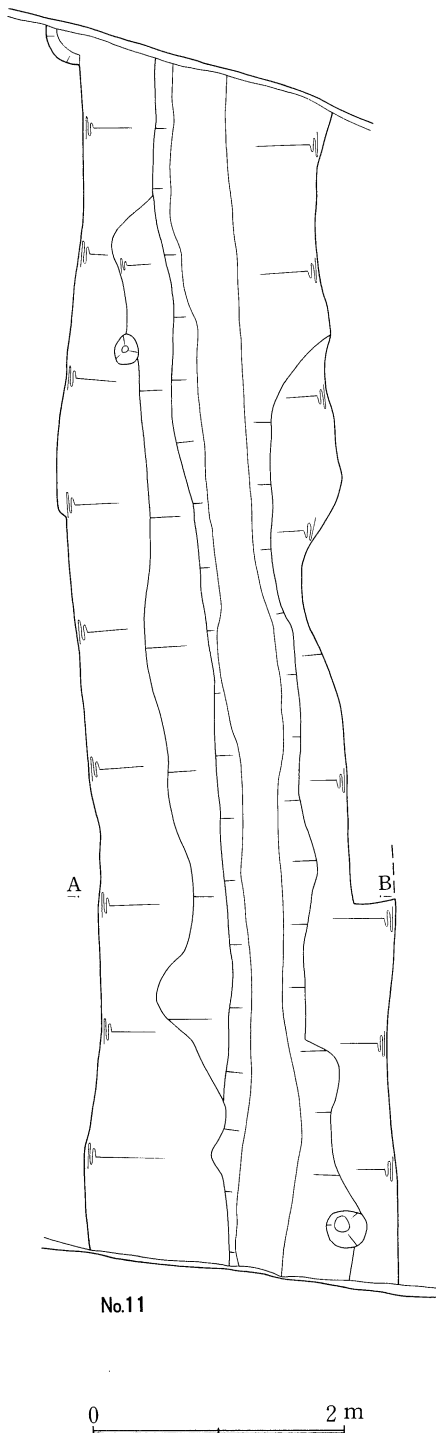
第79图 F地区遺構内(No.1)出土土器拓影図(1)



第80图 F地区遺構内 (No. 2・4・9) 出土土器拓影図 (2)



第81图 F地区遺構内 (No.13・15・6・7) 出土土器拓影图 (3)



No.15(第78図)No.13炉穴とNo.14炉穴との間から検出された $2.3 \times 1.6\text{m}$ ほどの不整形を呈する遺構で、第81図27・28とした2点の条痕文土器破片が出土している。

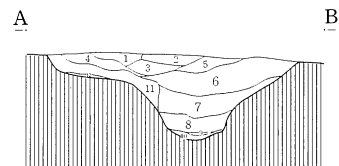
これらの遺構の他にも、第74図に示すようにF地区からはNo.17・18のような円形な遺構が検出されている。

また、F地区西側部の中央部から、南北に走る掘り込み面幅2.5mの溝が検出された。

この溝は、比較的緩やかな壁面を持っているが、溝中部で幅80cm、深さ30cmほどの範囲が更に一段底く掘り込まれている(第82図)。

この溝は、A地区の南側で東西に延びる溝(No.44)と似た断面形状を呈したもので、走る方向性は異なるが、同様の目的を持って掘り込まれた溝跡との解釈も可能と思われる。

断面図中の第7層は、硬くしまった状況が見られるところから、当溝が道路として利用されていたことも考えられる。



- 1：黒褐色土層
- 2：暗褐色土層
- 3：ローム粒を多量に混入する暗褐色土層
- 4：ローム粒を少量混入する暗褐色土層
- 5：黄褐色土を混入する暗褐色土層
- 6：ローム粒・黄褐色土を混入する黒褐色土層
- 7：硬くしまった黒褐色土層
- 8：暗褐色土を混入する黒色土層
- 9：黒色土層
- 10：灰黒褐色土層
- 11：褐色土を混入する黒褐色土層
- 12：黄褐色土層

第82図 F地区検出遺構(溝)実測図

VII. 今富大道遺跡出土の石器(第83・84・85図・図版44)

今富大道遺跡の石鏃は、市内のほぼ同時期に属する新井花和田、片又木、南富士台遺跡の形態と似ている。それらは、小型で基部が平基又は挟りの浅い凹基無茎となっている。出土地点は炉穴の集中部に検出されており、片又木の指摘と同様である。第83図8・9の削器と搔器はどちらも黒曜石製で明瞭な調整剥離が加えられ、刃潰れ等の使用痕が認められる。8の削器はD2地区の29号遺構炉穴内にて検出されている。9の搔器は、被熱によりやや白くくすんだ黒曜石面を呈し、85図38の礫器状の石器と85図30の敲石と共に出土している。それらは厨房用具に属するものであり、機能と出土遺構との関連が想定される資料となっている。しかし、85図38は83図2と接合関係を有し、83図1とも同一母岩の可能性が非常に高い、そのため、礫器状の石器は石核となり、作出された剥片2点が同一遺構内にあることになる。また85図35も、同一遺構内出土の小型の石核であり、焼土の付着が見られる。30の敲石は、石器の製作する道具ではないが、被熱の搔器、焼土の付着の石核等、炉穴の使用段階とこれら石器の廃棄段階の過程が問題となるだろう。石器の製作跡としては、C地区の17G付近が考えられる。そこには、同一母岩と思われるややくすんだ黒曜石の小剥片が11点以上検出されている。83図15がその一部の調整剥片である。打製石斧が1点D2地区で出土している。形態は短冊形を呈し、緑泥片岩製の完形品である。出土した17号遺構は、周囲に炉穴のある一段低い堅穴状の凹地となっており、同じ緑泥片岩の破片(5×3cm)が検出されている。上記と同様な橙色焼土の付着がこれらにも見られる。85図37の石皿片と、85図28～34等の敲石はセットの関係があるが、当遺跡では出土地点に関連は求められなかった。図版44の39は大型の台石と考えられる。11kg以上の重量があり、底部と考えられる面は平坦である。逆に頭頂部と考えられる面は敲打痕が数多くありかなり磨耗しており重なる使用の痕が認められる。

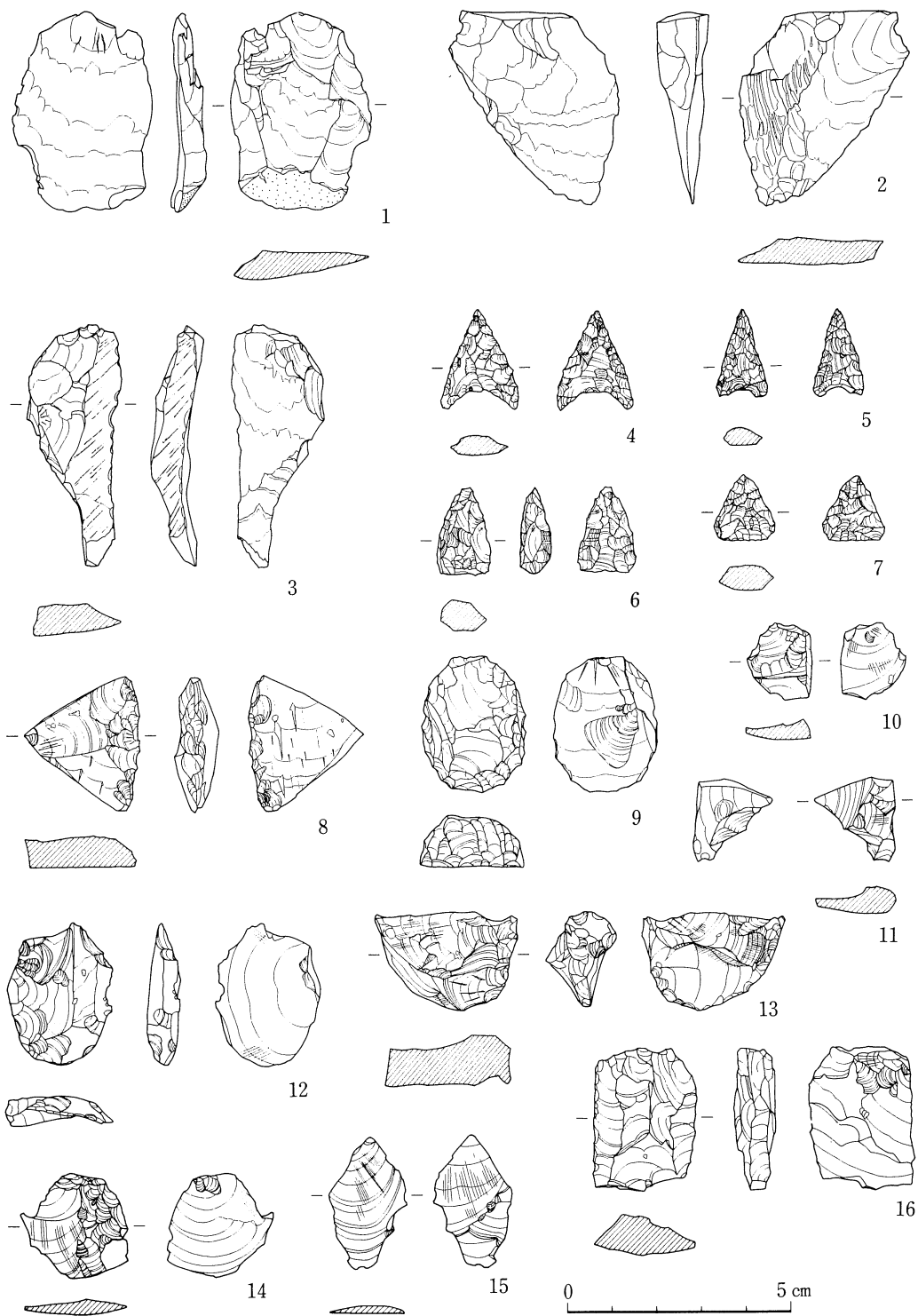
空港No.14遺跡のB地点は鵜が島台式期の遺跡で、石鏃が多量に検出され、石器製作跡も数地点確認されている。石鏃が多い点を除くと石器組成が当遺跡と似る。石鏃・打製石斧・石皿削器・搔器と一応の道具の組み合わせを有している。しかし、No.14遺跡には敲石等の記載が少ないので不確実な部分も残る。大道遺跡には、その他整理箱2箱分の円礫、割礫、焼礫等が出土しているが、集石等の状態で検出されず石器としての地位を与えることが出来なかった。

引用参考文献

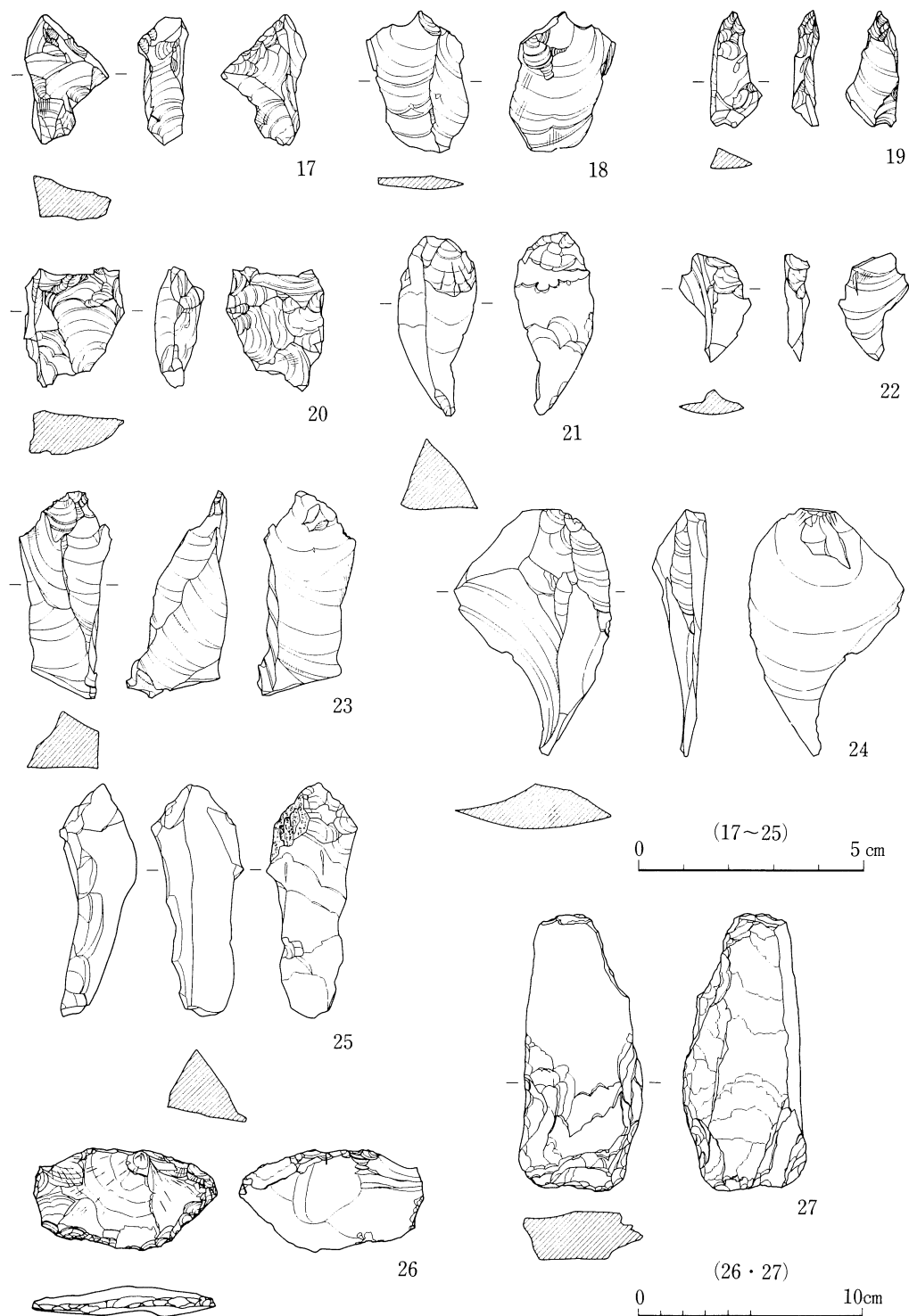
- 山田昌久 1985「縄文時代における石器研究序説」論集日本原史 (榊吉川弘文館)
西山太郎他 1983「新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ-No.14遺跡」(財)千葉県文化財センター
寺島 博 1984「片又木遺跡」(財)市原市文化財センター調査報告書第3集
鈴木英啓 1985「新井花和田遺跡」(財)市原市文化財センター年報S59年度
近藤 敏 1987「南富士台遺跡」(財)市原市文化財センター調査報告書第22集

今富大道遺跡石器一覽表

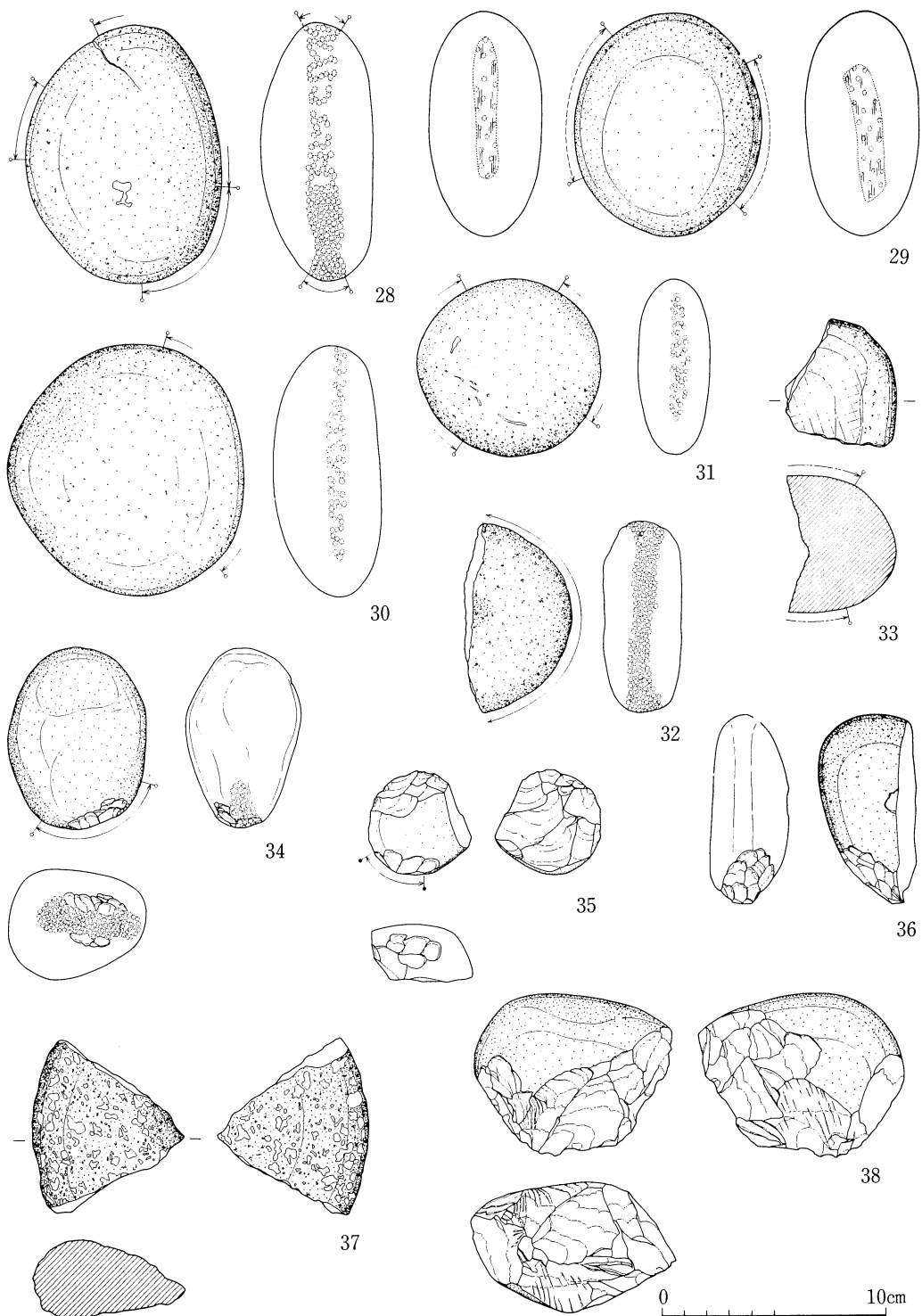
挿図番号	器 種(形態)	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	材 質	備 考
83-1	自然面を残す剥片	45.5	31.6	5.9	8.9	凝 灰 岩	2 と同一母岩 C・6 C
83-2	打面を残す剥片	46.4	35.6	8.8	12.1	"	1 と同一母岩 C・6 C
83-3	使用痕のある剥片	57.8	21.1	8.9	9.6	安 山 岩	焼土付着 C・6 C
83-4	石鏃凹基無茎	22.9	16.8	4.5	1.0	黒 曜 石	背面に一次面 F・No.09
83-5	" "	19.3	10.9	3.9	0.6	"	" 9 T
83-6	" 平基無茎	19.1	12.4	6.4	1.4	"	製作途中か? 1 T
83-7	"	14.4	13.5	5.3	0.9	"	" C 108
83-8	削器?	30.0	29.6	8.2	5.1	"	上・下端を折る E・No.29
83-9	搔器	29.7	22.5	12.1	9.1	"	被熱サムスクレパー C・6 a
83-10	調整剥片	17.0	14.6	3.7	0.9	"	A一括
83-11	"	21.4	18.2	6.5	1.6	"	右端折り取り F・No.7
83-12	端部削器	28.9	21.3	5.6	3.7	"	C・6 b
83-13	調整剥片	31.0	22.1	11.0	6.6	"	F・No.1
83-14	"	23.1	24.9	3.1	0.4	"	83-12と同一母岩・5 T
83-15	"	29.4	15.7	1.4	0.6	"	83-14と同一母岩 C・No.17 G
83-16	削器	30.3	22.2	8.8	6.4	"	被熱焼土付着 C 59
84-17	石核調整剥片	21.6	19.4	9.1	3.5	"	D 2・No.17 II R
84-18	調整剥片	25.4	28.2	2.4	1.6	"	5 T
84-19	石核調整剥片	25.0	11.5	4.2	1.0	"	F一括
84-20	折り取り剥片	29.9	21.4	8.2	4.8	"	C・No.17 G
84-21	原礫面を残す剥片	41.2	17.5	14.3	7.0	"	被熱 11 T
84-22	折り取り剥片	21.8	15.9	5.1	1.0	"	A・No.4
84-23	残核	42.3	18.7	22.3	9.7	"	C・No.17・179
84-24	使用痕のある剥片	54.3	32.3	10.1	11.0	"	5 T
84-25	石核調整剥片	52.0	17.1	13.2	9.9	メ ノ ウ	A一括
84-26	削器	81.6	45.0	12.3	45.1	粘 板 岩	被熱 6 T
84-27	打製石斧	122.0	52.5	21.7	210.6	緑 泥 片 岩	焼土付着 D・2 No.17
85-28	敲石	116.6	87.1	49.0	686	石 英 は ん 岩	4 T
85-29	"・磨石	100.2	82.8	49.9	593	砂 岩	110 E-7
85-30	敲石	110.1	106.5	46.4	784	流 紋 岩	C・6 B-11
85-31	"	78.6	78.3	31.0	280	砂 岩	C・20-1
85-32	敲石・磨石片	86.3	—	36.6	(184)	輝 緑 岩	4 T
85-33	敲石片	52.3	63.9	—	(217)	安 山 岩	3 T
85-34	敲石	81.6	61.8	49.5	318	被熱赤化砂岩	C・G
85-35	石核	46.5	48.5	25.4	61.6	細 粒 砂 岩	C・6 B-12
85-36	敲石片	86.6	—	35.5	(163)	砂 岩	C・105-79被熱赤化後破損
85-37	石皿片	(78.6)	(65.8)	35.5	(165)	玄 武 岩	A・T
85-38	石核	73.4	94.0	61.9	394	凝 灰 岩	C・6 B-13 83-2と接合
図版 44-39	台石	253	225	155	11.410 g	砂 岩	C 111-10 頭頂部敲打痕



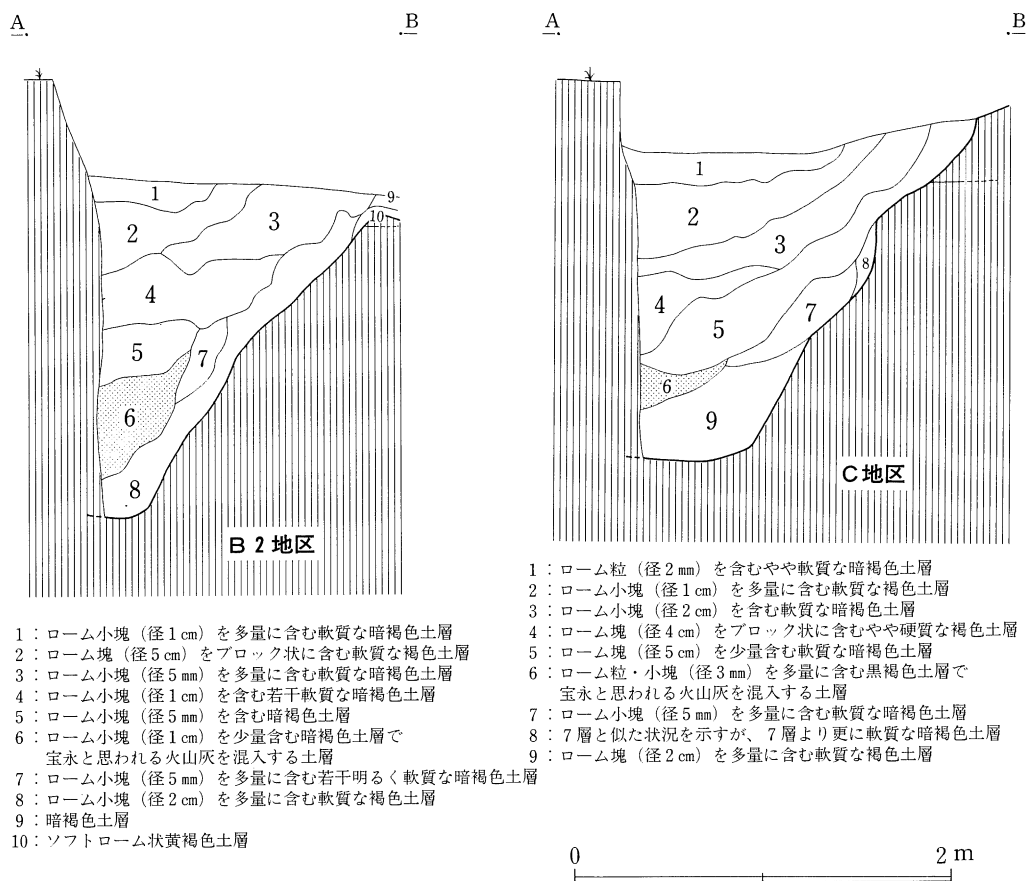
第83図 今富大道遺跡出土石器実測図(1)



第84図 今富大道遺跡出土石器実測図（2）



第85図 今富大道遺跡出土石器実測図（3）



第86図 性格不明大型遺構内土壌堆積状態図

VIII. 性格不明な大型遺構

今回の調査では、前述してきたように性格不明な大型の落ち込みが検出されている。検出地区は、A地区・B 2 地区・C 地区の3地区であり、いずれも調査地区の南端部から検出されているため、遺構全体の形状・規模等は把握されなかったが、3ヶ所から検出された遺構には、類似した面が幾つか見られた。

深さは、いずれも確認面から1.8m前後を有し、第86図に見るように緩やかな傾斜をもって掘り込まれ、A地区・B 2 地区例のように両端に更に径1.5～2m、深さ2mほどの円形なピットを配している。

大きさは、A地区例が14m、B 2 地区例31m、C 地区例35mで、C 地区例のみは両端にピットがなく、中央部分に円形ピットを配置している。

これらの大型遺構内を充満する土壌は、第86図の断面図に見るように自然な堆積状態を示している。

底面直上には、径2cmほどのローム小塊を多量に含む軟質な褐色土層が堆積し、以降7層ほどローム小塊を含む土層が堆積しているが、いずれの遺構の場合も、底面直上に堆積した土層の上に火山灰を多量に混入する土層が堆積していることが特徴的である。

この火山灰は、砂状で黒灰色を呈しており、いわゆる宝永の火山灰に相当するものと思われ、本遺構の掘り込まれた時期を考える上で一つの目安となる土層である。

また、A地区・B2地区・C地区共に、炉穴が多く検出され早期の土器が多く出土しているが、3地区の大型な遺構内からは、早期の条痕文系土器類はほとんど出土せず、他の伴出遺物も一切見られなかった。

本遺構は、検出部分が極めて大型であるが、前述したようにいずれも南側部分が未調査地域に跨っているため、東西方向での大きさのみ確認され、南北方向の広がりについては一切手掛りを掴むことができない。

遺構全体の平面形態を確認した部分から考えると、

i. 東西方向の規模を南北にも同様に持つ方形と考え、四隅に円形ピットを配置し、底面を平坦とした形態

ii. 確認されている円形ピットを両端に持つ、上面幅3m、底面幅1mほどの細長な溝状の形態

iii. その他の形態

の3種を考えることができよう。

また、明確ではないが、B3地区の南側部分でも似た形状の落ち込みが一部検出されているところから、A地区からC地区に至る現道路の下にほぼ等間隔に、本大型遺構が配置されているものと思われる。

そして、これらの掘り込みの間には上面幅2m、底面幅20cm、深さ20～50cmほどの溝が取り付くような形で東西に延びており、溝と大型遺構とを合わせ一つの遺構として見ると、長さ200mにも及ぶ規模の遺構が存在することになるが、現時点では、これらの掘り込みが何の用途を目的として掘り込まれたものか明らかではない。

ただ、使用時期に関しては、遺構内充満土壌の下部から宝永と思われる火山灰を各遺構内で確認していることによって、江戸時代の中頃に掘り込まれた可能性が高い遺構と考えても差し支えないものと思われる。

第3章 ま と め

以上、今富大道遺跡における発掘調査により検出された遺構・遺物について概略を述べてきたが、最後に、調査結果にもとづいて簡単にまとめておきたい。

I. 遺構について

今回の調査は、市道2135号線の改良工事に先行する発掘調査として実施したものであり、台地上に広がる遺跡の南部域の限られた地域を調査対象としている。

そのため、今富大道遺跡の全容を把握することは困難であるが、調査地域が幅は非常に狭いものの、東西長510mの範囲にわたっており、調査地区のほとんどから同様の性格を有する遺構・遺物が検出されており、遺跡全体に同種の遺構・遺物が分布しているものと思われる。

調査は、便宜上A～F地区に分け行ったが、検出された遺構は、各地区共に類似した様相を呈したものであり、大別五つに分けることができる。

- i：いわゆる炉穴と呼ばれる焼土を伴う遺構
- ii：性格・用途の不明な落ち込みで、径20cmと小型のものから数mに及ぶ例があり、形状的には円形・楕円形・隅丸方形・不整形と様々である。
- iii：極めて大型な落ち込みで、遺構内堆積土層に火山灰の堆積が見られるもの。
- iv：溝として捉えられる細長な遺構。
- v：道路として利用されていたと思われる硬く締まった面が帯状に検出されるものである。

i：炉穴

炉穴には、単独で存在するもの、幾つかの炉穴が重複しているものを、それぞれ一群とし、底面等に見られる焼土面は、便宜的に一つが一時期と考え一つずつ数えた場合。

A地区＝9群26ヶ、B3地区＝3群3ヶ、C地区＝14群55ヶ、D2地区＝2群7ヶ、E地区＝10群18ヶ、F地区＝8群12ヶで、合計46群121ヶが検出されている。

本遺跡では、以上のように多数の炉穴が検出されたことによって炉穴についての形態面での類型的な分類が可能と思われるが、基本的には円形・楕円形・不整形の3類に分類され、焼土(炉)の位置等によって若干趣を異にしている。また、炉穴の残存状態が悪く、炉穴上部が検出されたものがなく、いずれも底面に近い部分のみが検出されている状況であるため、炉穴の深さについては省略した。炉穴の形態には以下の3種類がある。

A類 ほぼ円形を呈している炉穴で、径1 m前後から、C地区No.58のように2 mに及ぶものが見られるが、全体的に非常に検出例の少ない形態であり、焼土面は遺構底面の全域にわたるものと、底面の一部を占めるものがある。

B類 楕円形を呈する炉穴で、長径が短径の2倍以内のものから、3倍以上の長さを持つ長楕円形を呈するものがあり、焼土面(炉)は、長径方の一方に偏し1個所のみのもの(A地区No.7・37、E地区No.9、F地区No.10など)、両方の2個所に焼土を有するもの(A地区No.3・8、E地区No.29など)、また、長径方の壁直下に1個所と底面の中央部付近に1個所の炉を設けるもの(D2地区No.10、E地区No.5など)など様々である。

これら焼土面(炉)の位置及び数の相違は、使用時期の違いによるものか、使用方法・目的の相違によるものか明かではないが、炉穴自体その使用方法が明確でないため、立ち入って焼土(炉)の位置関係などについて考える術を持たない。

C類 A・B類の円～楕円形を基本とする炉穴以外の形態を有するものを一括してC類としておく。これらには、C地区No.37・112のように一段低い円形ピット内に炉を設け、足場を一段高く円形に作る形態、さらに足場を広く住居状に設けたE地区No.1なども含んでいる。

以上、A～C類とした形態が今富大道遺跡から検出された炉穴の基本的な形態であり、A地区No.30、C地区No.104・106・108～110、D2地区No.9などの炉穴群は、これらの基本形が重複し複雑な形態を呈したもので、基本形態の明確な認識のもとで基本形に分解することが可能となるものである。

調査地区内を一見しても、数基の炉穴が重複している周囲に炉穴の確認されない空間が多くあるのに気付く。このことは、新たな炉穴を構築するに際し、焼土(炉)を置く部分のみを広げていく、あるいは今まで炉として使用していた地点を足場として反対側(前の足場)に炉を設けるなどの行為によって、足場の部分は余り動かさずに炉の部分を移動・拡張することによって複雑な形態となっていたものと解釈することができる。おそらく往時は地表面から炉穴底面までの深さが、現状よりかなり深かったため、新たに炉穴を構築する労力を省くために、炉の部分のみを拡張していったものと考えられる。

これらの足場と炉の関係について、西田道世氏は東間部多遺跡の炉穴分類に際し、「一見、複雑な炉穴も、結局は上記の炉の形態と足場の二次利用との複合に過ぎない。」と述べているが、今富大道遺跡の炉穴群の複雑な形態も、東間部多遺跡と同様な解釈によって捉えることが可能なものである。

ii：ピット

炉穴のように、ある程度性格なり遺構としての特色を持つとは別に、まったく性格を捉え

ることができない遺構がある。

径20cmほどの小型の例から数mに及ぶ大型なものまで、規模は様々であり、また、平面形も円形・楕円形のもの、不整形を呈するものなどがある。

径50cm内外の大きさを持つ円形ピットがB・C地区からB 1地区に集中して検出されている。第13図を見ても明らかなように、当地区には他の地区に比較して炉穴が少ない地域であり、炉穴分布地域とは異なった生活空間がB 3地区を中心として広がっていたものと思われる。しかし、遺構分布の有り方には斉一性が認められず、炉穴とは性格を異にした空間としての認識は可能としても、当地域が往時の日常生活の中で占める役割について言及することができない。

他の地区では、短辺1m×長辺2～3mの楕円形を呈するピットが全域にわたって散在的に検出されている。これらのピットには、底面が平坦となる例と、底面部に径20～50cmほどの小ピットを1～2ヶ配置している例とが見られるが、後者はC地区の中央部で集中的に検出されている(C地区No.9・11・14・20・21・23～29・32・33・39・41・44・45・61など)。

これらの底面に小ピットを持つ遺構は、土壌として捉えられるピットと相似した形状を示しており、ある程度の範囲に集中して分布している点からも、この地域を当時の墓域として考えることも可能かと思われる。

iii：大型遺構

当遺構については、Ⅷ性格不明な大型遺構の項で述べた如く、A・B 2・C地区の3個所で確認されているが、その配置状況からB 1・B 3地区の現道路下にも存在する可能性がある。

規模的に極めて大きく円形ピット・溝が取り付くことが特徴として挙げられる。また、遺構内充滿土壌中に火山灰の堆積が見られることから、時期的には江戸時代に掘り込まれた可能性を有するものである。が全体的な形態が明確ではなく用途が明らかではない。

iv：溝

今回の調査範囲においては、大別して3種類の溝が確認されている。

- ①上記した大型遺構に伴うと思われる深さ20～50cm、上面幅2m、底面幅20cmの規模を持ち東西に延びる溝(A・B 1地区)。
- ②深さ20cm、上面幅0.5～1m、底面幅50cm程の東西に延びる溝(C地区)。
- ③F地区から検出された南北に走る、深さ70cm、上面幅2.5m、底面幅50cm程の規模を持つ溝。規模・形状等からA地区の溝と同一目的で掘り込まれた可能性が高い。

v：道路跡

道路の跡と思われる遺構がB 2 地区において検出されている。東西14m程の範囲にかけて幅1～1.5mが硬く締まった面として確認されたものである。今回の調査範囲からは、他に道路跡と考えられる遺構は検出されていない。道路跡については明確な伴出遺物がないため使用時期の確定には困難さが伴うが、当道路跡の南側に見られる大型遺構との重複関係では道路跡の方が古く、大型遺構によって道路跡が切られる状況を呈していたため、江戸時代中頃以前には当道路が活用されていたものと思われる。

II. 遺物について

出土遺物は、土器と石器の2種類のみであるが、前述してきたように、今回の調査では調査区の全域にわたって炉穴が検出されており、出土遺物のほとんどが炉穴に伴う遺物である。

そのため、時期的には縄文時代早期条痕文土器の範疇として捉えられる遺物が多くを占めており、僅かにC 地区において縄文時代前期・後期の土器片が数点出土したに過ぎない。

炉穴に伴出した土器がほとんどであるため、本項では広義の茅山式期に位置付けられる条痕文土器のみを扱うこととする。全てが同一の形態を示すことはなく、それぞれの土器は形状・文様などにおいて若干の相違を見せている。

i：形状

- ①全体形 …… 基本的に深鉢形を呈する。
- ②口唇部 …… 平縁及び波状の2種がある。
- ③口縁部 …… 外反・内湾・直行の3種がある。
- ④胴 部 …… 口縁部～底部にかけて直線的となるもの、口縁部と胴部との間に括れを持つものの大別2種がある。
- ⑤底 部 …… 大別して尖底と平底の2種があるが、尖底の形態には丸底に近い形態のもの・砲弾状のもの・鋭角的に尖るもの3種がある。

①出土土器のうち全体的な形状把握できる例は極めて少ないが、ある程度器形・規模の想像できる資料を用いて今富大道遺跡の土器を見ると、土器の形は尖底形土器が主であり、口唇部直径15cm～42cm、器高20cm～40cm近い大きさを有し、器壁厚1.5cmほどの土器が今富大道遺跡において日常使用されていた土器とすることができる(第87図)。

今回の調査で出土した土器のうち、最大の例はC 地区No.110炉穴から出土した表裏面に条痕文のみが見られる土器(第48図214)で、底部を欠損しているが現在高27cm、口唇部直径42cmの

大きさを有している。また、最小の例は同じく、C地区No.106炉穴から出土した土器(第35図62)で、現存高10cm、口唇部直径15cmと小型で底部を欠損している。表裏面は共に縦方向の条痕文により充填されている。

②口唇部は、平坦となる例が多いが波状を呈するものが幾つか見られる。これらの中には僅かに波打つもの(第9図15・16)、突起状となるもの(第30図11、第34図55、第45図177)、大きく波打つもの(第70図27)などがある。

③口縁部の傾きには3種がある。先ず外反する形態は余り多くなく、第30図11が顕著な例として挙げられ、口唇部直下で僅かに外反する第38図94、第50図226、第70図27などがある。が第30図11は口縁部下に括れを持つ器形から生じた形状であり、外反の範疇に属さないかも知れない。

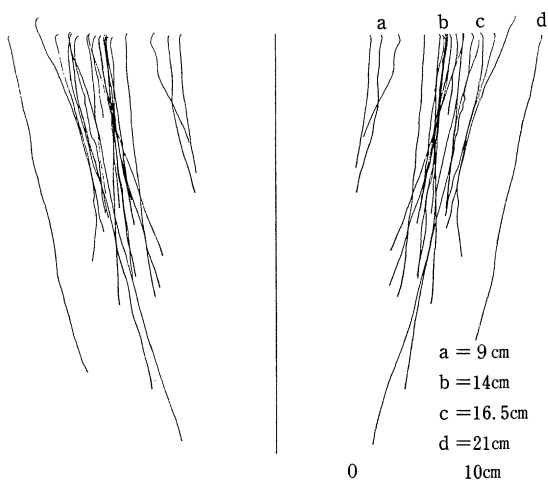
内湾する口縁部を持つ土器も極めて少なく、はっきりとした内湾形態を示す第52図255の他は第32図40、第33図42などが僅かな内湾器形を示しているのみである。

以上の他は、ほとんどが直行する口縁部を持つ土器である。

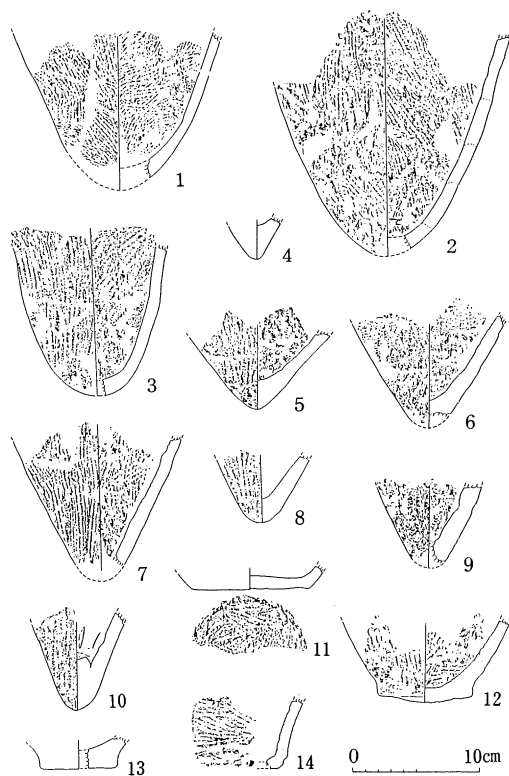
④胴部は直線的に上方に向けて開く形態の土器がほとんどであり、口縁下に括れを有する例としては第30図11が代表的であり、同種のものに第45図177がある。

⑤底部はほとんどが尖底形を呈するが、僅かに平底の土器が混在している(第44図176、第54図277・281、第73図82)。

尖底の形態には幾つかのタイプが見られ



第87図 今富大道遺跡出土土器口縁部径比較図



第88図 今富大道遺跡出土土器底部比較図

る(第88図)。先ず丸底～砲弾状の形態としては、第88図1～3などが挙げられるが、3は底部からの立ち上がりから円筒状の器形が連想される。鋭角的に尖る底部の土器は、4・7～10があるが特に10は細長く突き出る形態となっている。

ii：文様

土器の表裏面共に条痕文を有することを最大の特徴とする土器である。

表面の条痕文は、表面全体に施されるものと、胴部～底部にかけて施されるものがあり、後者においては、口縁部に微隆起文あるいは沈線を主とした文様を持つものが多く見られ、それらには、口唇部に刻み目を施す例がある。

今富大道遺跡出土の土器に施された文様のうち主なものを、図版40～43として掲載した。

図版を一瞥してもわかるように、文様は微隆起文・篋描き状の集合沈線・刺突文・条痕文などにより構成されている。

図版40－1～14には、口縁部に見られる文様をまとめてある。微隆起文・集合沈線文・無文帯により文様を構成する野島武土器の特徴を持つ土器が多くある。これに加えて7などの太い条痕文や12・13などの極く細かい条痕文、そして稀に11とした刺突文も見ることができる。

図版41は胴部に見られる文様であるが、口縁部に続く文様として口縁部と同様な文様構成を持つものがある。また、図版42・43には今富大道遺跡出土土器の各種の条痕文を掲載した。

条痕文は、27・29～32・39のように太い集合沈線状のものと、35～37のような極めて細かいハケ状の条痕文とに大別され、土器の表裏面共に施文されている。

条痕文による土器表面の施文方向は、口縁部は横方向に施し、口縁部以下底部に至るまで縦方向に施文するもの(第9図16、第3図22、第35図61、第36図77、第37図86、第48図214、第67図5、第70図27)と、口縁部から底部に至るまで縦方向に施文するもの(第9図13、第38図96～99、第67図1)などの他、第43図155のように全体的に斜方向に施文するものなどがあるが裏面の施文方向は横位が多く見られる。

口唇部に見られる刻み目には、図版43－46～51があるが、篋描きにより斜方向に太くしっかりと刻み込むものと、51のように半截竹管によると思われる平行沈線により表現したものなどがある。

また、文様構成とは異なるが、口縁部に補修孔と思われる穿孔が幾つか見られた(図版43－52～55)。いずれも口唇直下2～3cmの部分に直径8mmほどの穴を表裏両方向から穿っているもので、穿孔部横2cmほどのところから縦方向に破損していることから、罅割れの補強用としての穿孔と考えられる。より新しい時期の土器にこうした補修孔が余り見られないことから、当該期にはこれらの器は貴重な持ち物としての位置を占めていたものと思われる。

Ⅲ. おわりに

今回の調査は、市内の立野から海保に至る市道2135号線の改良工事に先行する発掘調査として、昭和61年5月に1か月間約2kmにわたりトレンチによる確認調査を実施し、確認調査の結果に基づいて、同年6月から9月の4か月間東西520mの範囲について本調査を実施し、炉穴をはじめとする遺構及びこれに伴う土器・石器を検出した。

発掘調査は、道路改良工事に起因した調査であり、調査範囲が限定されているため、市原市今富の台地上一角を対象としたものであるが、東西500mにわたる調査区域の全域から縄文時代早期の炉穴及びこれに伴う条痕文系土器が多数検出され、この地における人々の足跡を一部窺い知ることができた。

今回の調査結果による限りでは、この地に人々が足を踏み入れたのは、縄文時代早期の末頃であり、その後、前期そして後期に僅かながら生活の痕跡を観ることができた。しかし、縄文時代以降は長い間人が生活した痕跡を見ることができず、次にこの地が活用されるようになるのは、性格不明の大型遺構を掘り、道路跡を残した江戸時代に至ってからであり、遺構の検出状態から観ると縄文時代早期末頃が最も当地が活気に満ちた時であったと言える。

縄文時代の遺構は炉穴と呼ばれる焼土を伴う細長い穴であり、合計46群121個所の炉穴が検出されており、調査区域以外を合わせると国分寺台の諏訪台遺跡に並ぶ縄文時代早期の大遺跡となる可能性がある。これらの炉穴が何の目的を持って掘り込まれたのか明確ではないが、遺構に伴う焼土は、食物を煮焼き、土器を焼き、暖をとり、明かりを灯す役目を担っていたことを暗示させている。

遺物の面では、条痕文系土器が多数出土している。これらには完形品はないものの、全体の形状・大きさを見てとれるものも多く、直径27cm、高さ35cmほどの尖底土器が当地域において多く使用されていたことを窺わせている。

付近には、第1図に見るように多くの遺跡が点在している。これらの遺跡は縄文時代から奈良・平安時代にかけて時代を超えて様々な生活が営まれていたことを偲ばせてくれる。今富大道遺跡と同じような炉穴が確認されているのは、当遺跡の西方1.5kmの片又木遺跡のみで、その後は当地の北に位置する諸久蔵貝塚や南西方1.2kmの山見塚貝塚の後期貝塚、南西方500mの晩期土器が出土している唐沢遺跡などが近隣の遺跡として在る。炉穴が今富大道遺跡と片又木遺跡から検出されたことから、この地域では先ずこの2個所に縄文時代早期に人々が生活の場を求め、その後周辺地域に生活空間を広げていったことと思われ、今富大道遺跡の地は往時における先進地としての位置を占めていたものと思われる。

この地が、今回の市道改良工事により人々の往来が活発となり、最初に人々が生活していた時のように発展していくものと期待される。



今富大道遺跡周辺の航空写真 1 : 13,000



調査区最東端区確認調査用トレンチ（西側より）



今富大道遺跡土層堆積状態



A地区西部域遺構検出状態（西側より）



A地区中央部遺構検出状態（西側より）



A地区第30号炉穴内遺物出土状態（西側より）



A地区第30号炉穴検出状態（西側より）



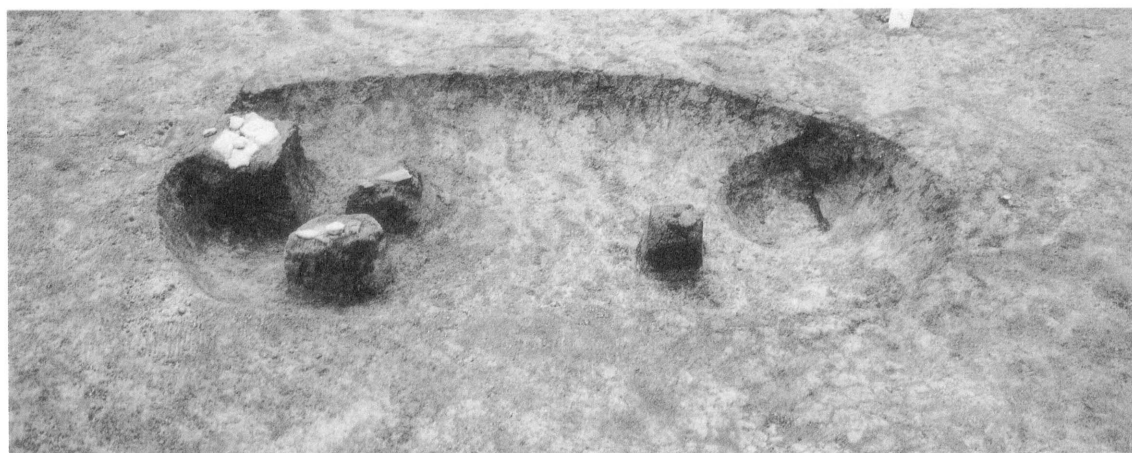
A地区第5号・第7号・第8号炉穴検出状態（南側より）



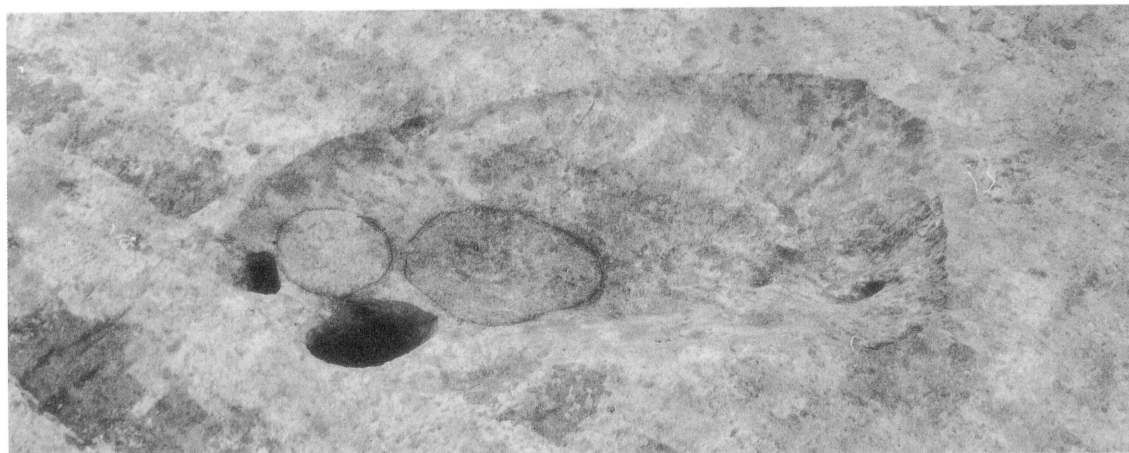
A地区第7号・第8号・第5号炉穴検出状態（北西側より）



A地区第38号炉穴内土層堆積状態（西側より）



A地区第38号炉穴内遺物出土状態（西側より）



A地区第38号炉穴検出状態（西側より）



A地区第37号炉穴検出状態（西側より）



A地区第43号炉穴検出状態（南側より、耕作による攪乱が激しい）



A地区第26号遺構検出状態（西側より）



A地区東部域を東西に走る溝（No.44）内土層堆積状態（西側より）



A地区中央部南側より検出された大型遺構内土層堆積状態（北側より）



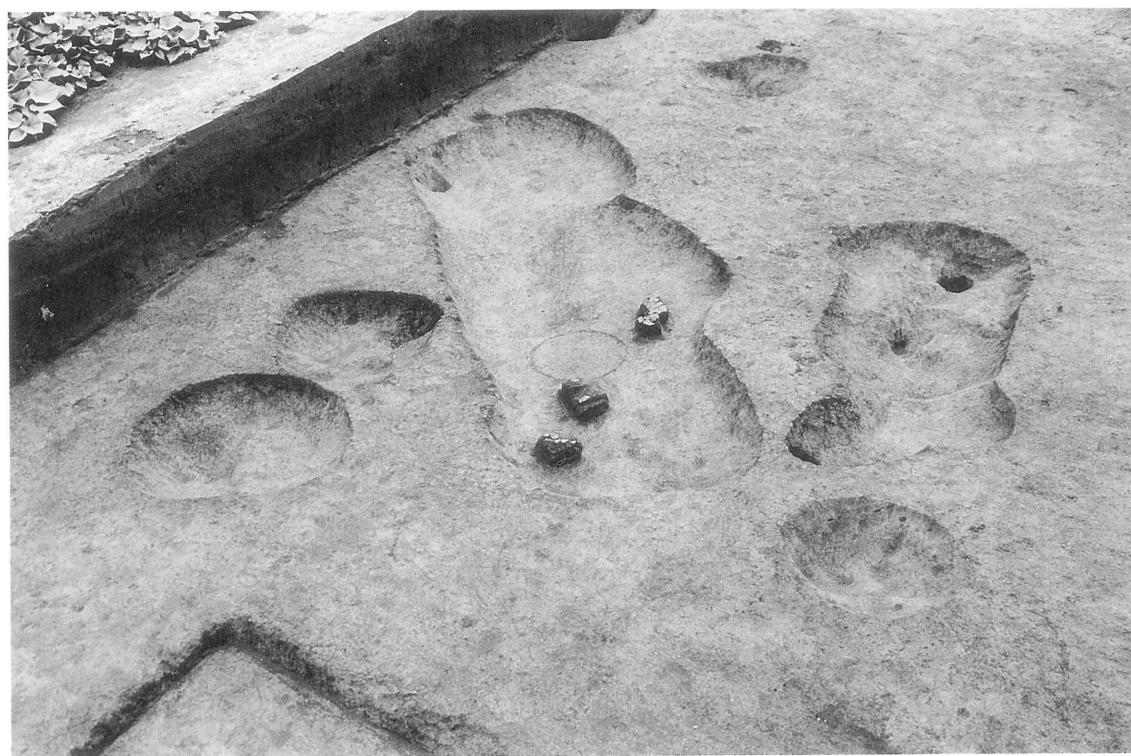
B 3 地区東部域遺構検出状態（西側より）



B 3 地区東部域遺構検出状態（東側より）



B 3 地区中央部域遺構検出状態（東側より）



B 3 地区第59号炉穴検出状態（南西側より）



B 2 地区全景（西側より）、中央部に道路状遺構が走る。



B 2 地区大型遺構検出状態（東側より）



B 1 地区大型遺構検出状態（西側より）



C地区全景（東側より）



C地区遺構検出状態（西側より）



C地区中央部域遺構検出状態（西側より）



C地区東部域遺構検出状態（西側より）



C地区第1号炉穴検出状態（東側より）



C地区第2号炉穴検出状態（東側より）



C地区第3号炉穴（右側）及び他遺構検出状態（南側より）



C地区第4号炉穴検出状態（南西側より）



C地区第4号・第5号炉穴検出状態（南側より）



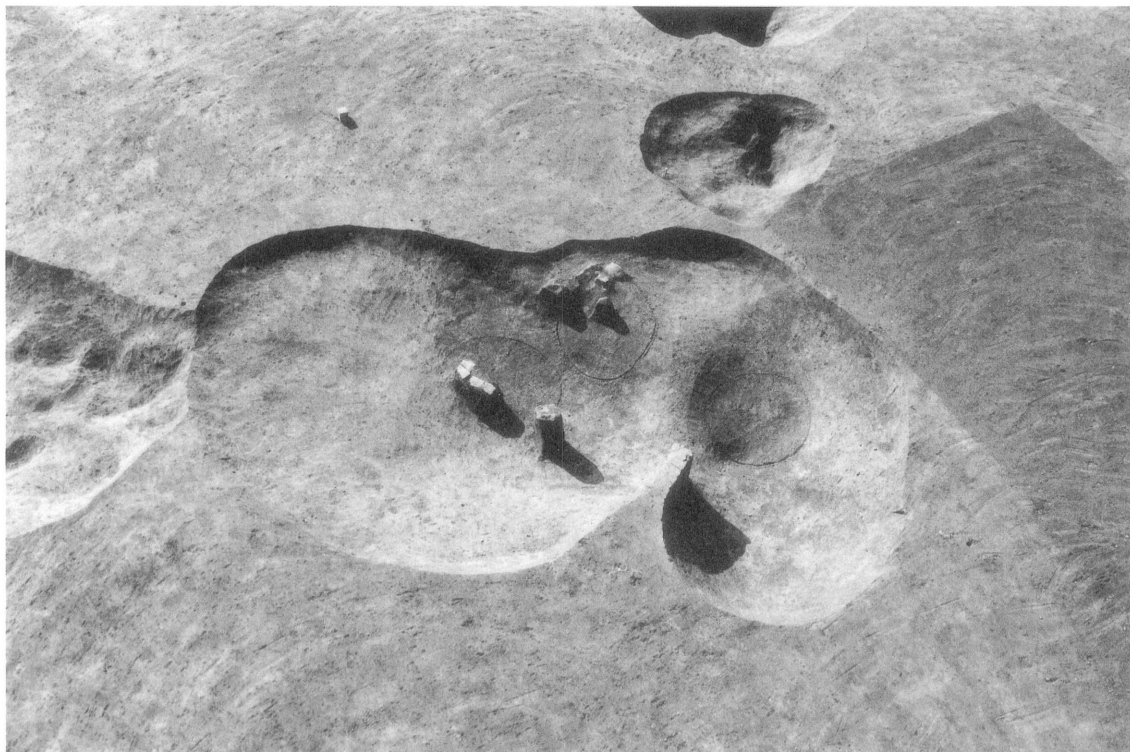
C地区第12号遺構及び第7号炉穴検出状態（南側より）



C地区第6号炉穴検出状態（東南側より）



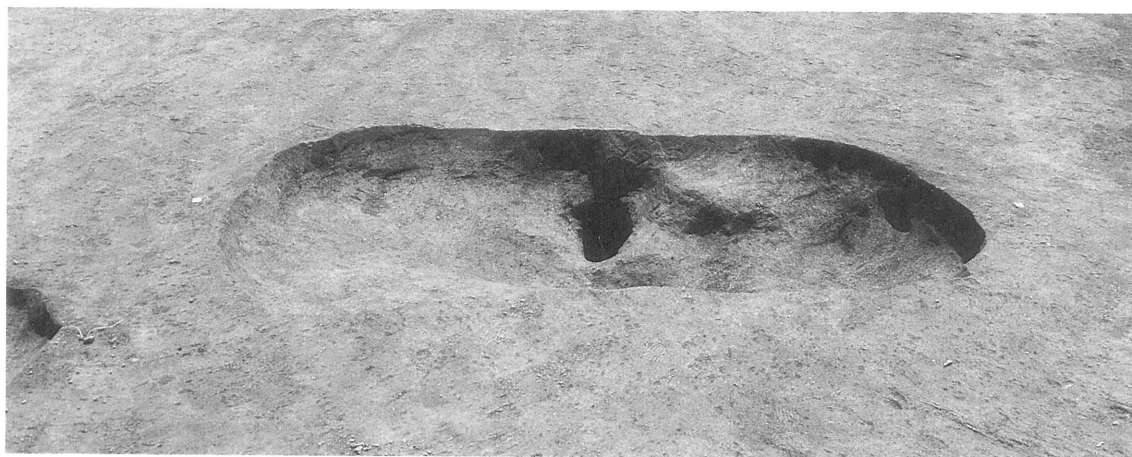
C地区第10号炉穴検出状態（北側より）



C地区第36号炉穴検出状態（東側より）



C地区第20号・第21号・第23号遺構検出状態（南側より）



C地区第22号遺構検出状態（西側より）



C地区第26号遺構検出状態（西側より）



C地区第9号遺構検出状態（西側より）



C地区第11号炉穴内遺物検出状態及び土層堆積状態（西側より）



C地区第26号遺構内土層堆積状態（西側より）



C地区第6号遺構内遺物出土状態及び土層堆積状態（北側より）



D地区全景（東側より）



D地区西部域遺構検出状態（東側より）



D地区東部域遺構検出状態（北側より）



D地区第9号・第10号炉穴検出状態（東南側より）



D地区第5号遺構検出状態（北側より）



D地区第10号炉穴検出状態（東側より）



E地区全景（東側より）



E地区西部域遺構検出状態（東側より）



E地区遺構検出状態（西側より）



E地区第1号炉穴内遺物出土状態（南側より）



E地区第1号炉穴検出状態（南側より）



E地区第8号・第6号遺構及び第5号炉穴検出状態



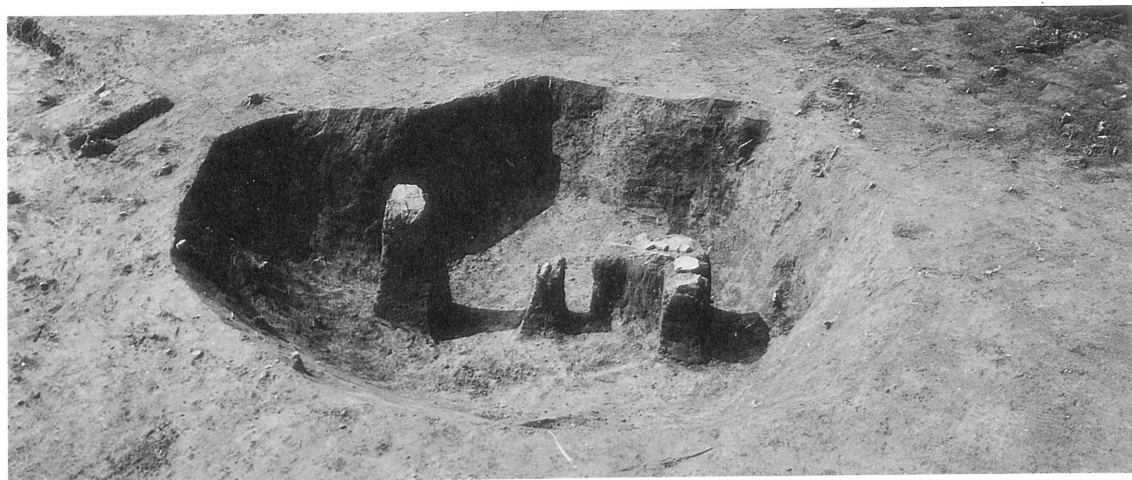
E地区第16号・第17号炉穴及び第15号遺構検出状態（南側より）



E地区第13号炉穴内遺物出土状態（南側より）



E地区第13号炉穴内土層堆積状態（南側より）



E地区第19号遺構内遺物出土状態（東側より）



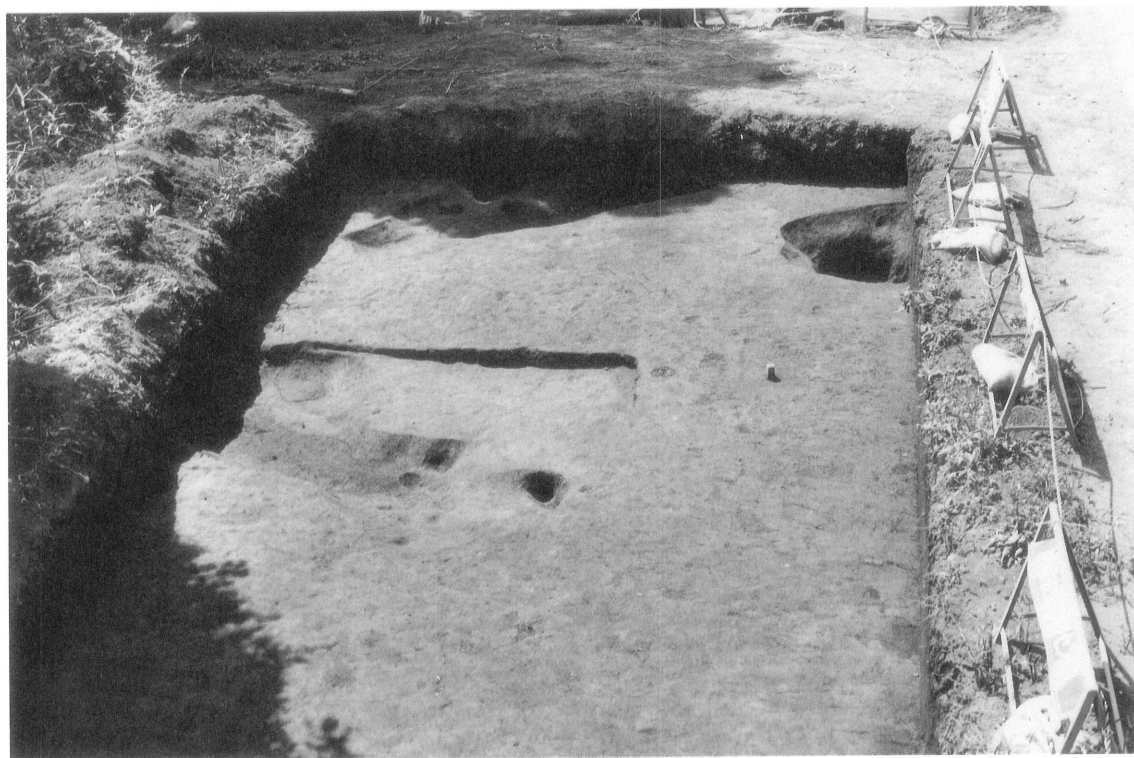
E地区第26号炉穴検出状態（南西側より）



E地区第29号炉穴検出状態（東南側より）



F地区西側部遺構検出状態（東側より）



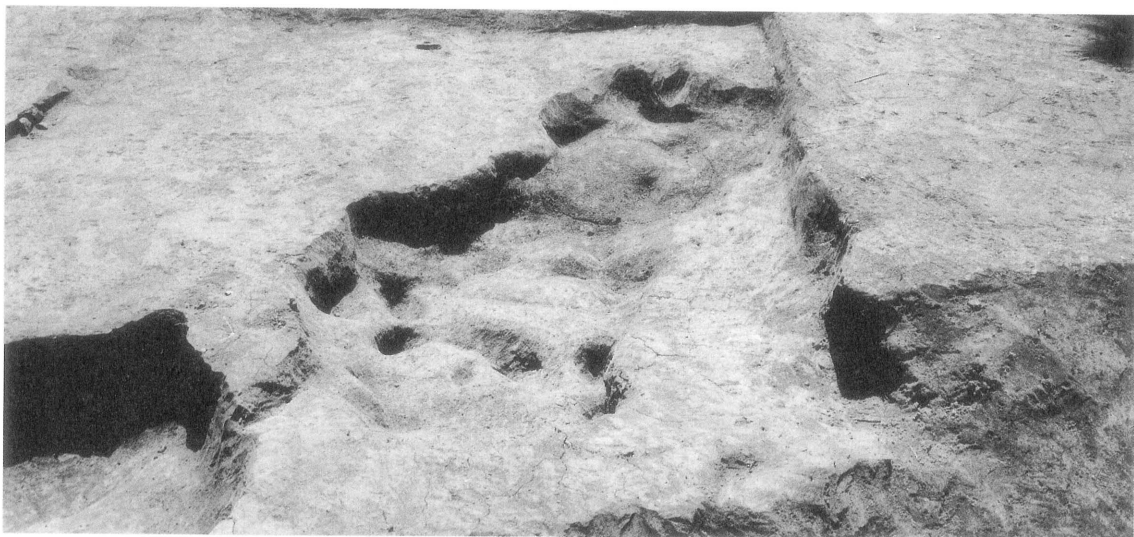
F地区東側部遺構検出状態（東側より）



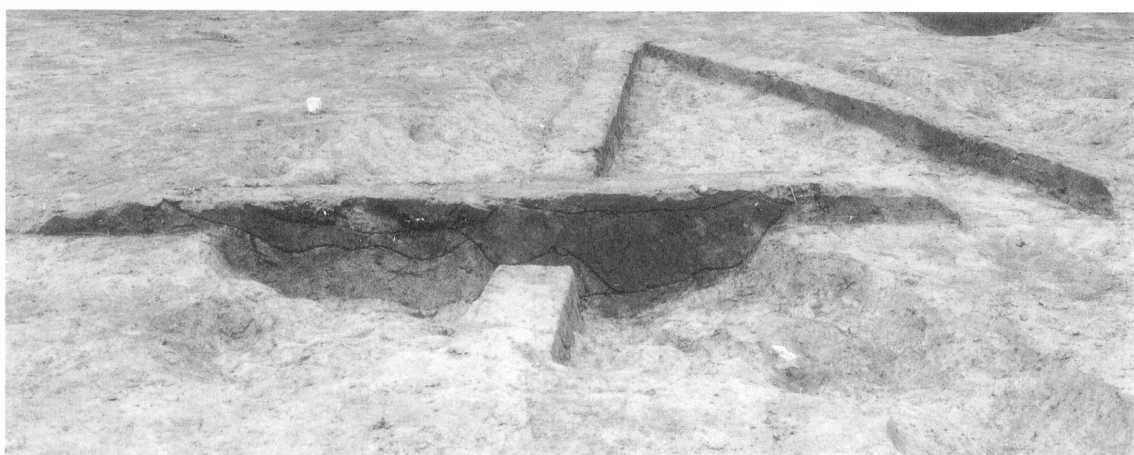
F地区西側部遺構検出状態（東側より）



F地区第10号炉穴検出状態（東側より）



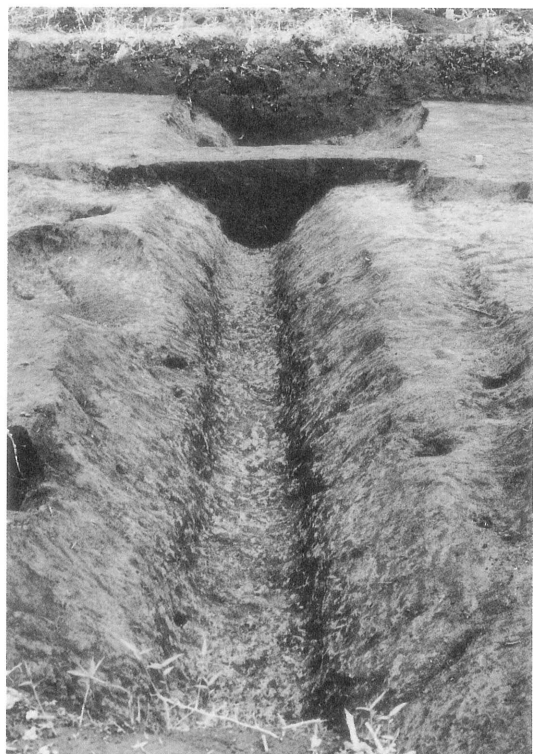
F地区第16号炉穴検出状態（西側より）



F地区第13号炉穴内土層堆積状態（南側より）



F地区第14号炉穴検出状態（東側より）



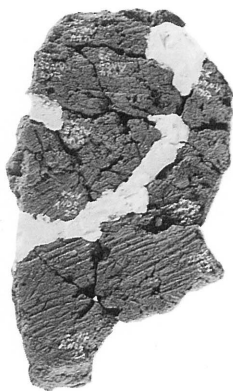
F地区西側部溝検出状態（南側より）



F地区第11号遺構検出状態（西側より）



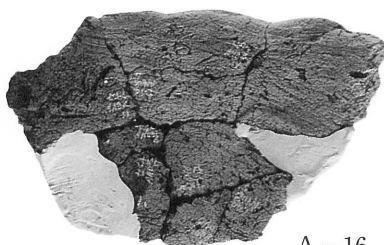
F地区第3号遺構内土層堆積状態（西側より）



A-1



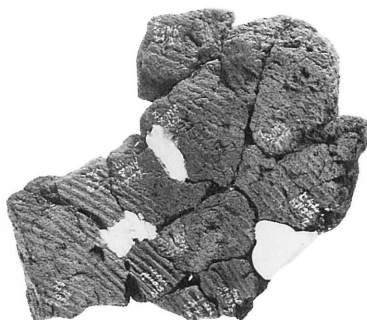
A-13



A-16



A-20



A-19



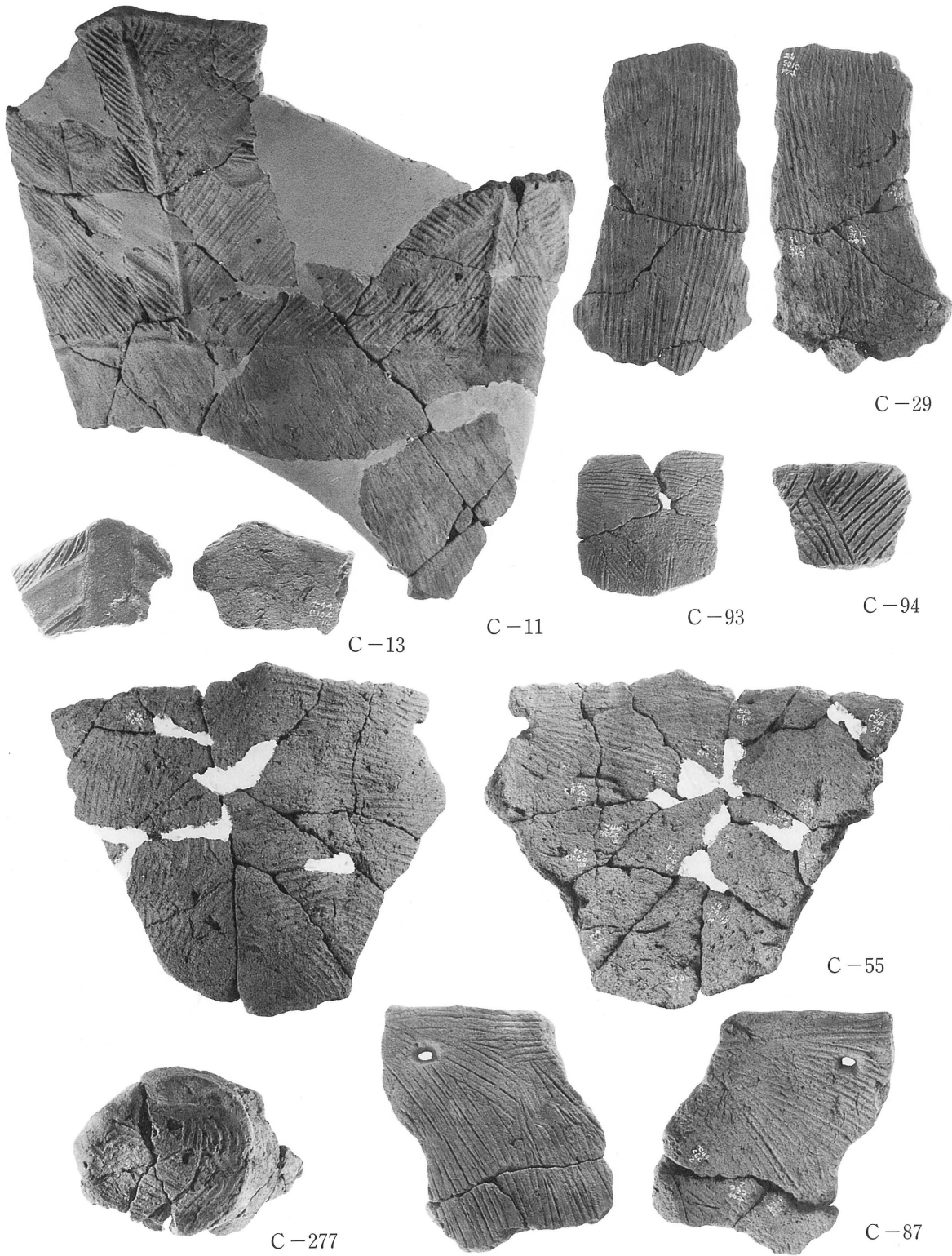
A-47



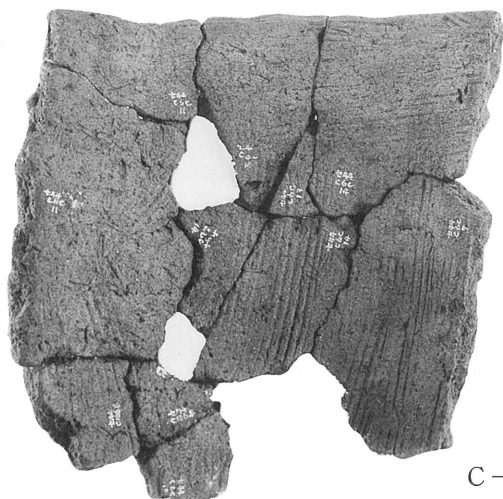
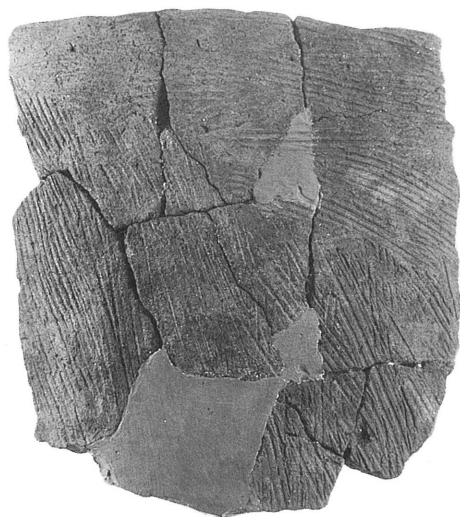
A-22



C-7



C地区No.104 · 105 · 106 a · 106 c · 106 e · 60出土土器



C-86



C-99



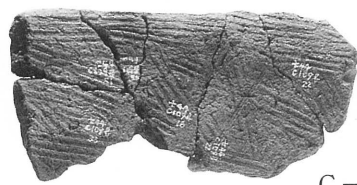
C-111



C-116



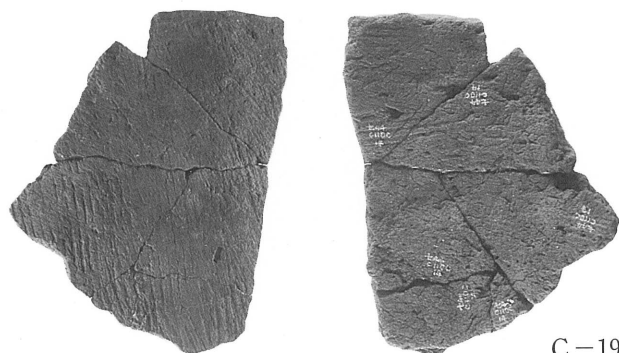
C-177



C-121



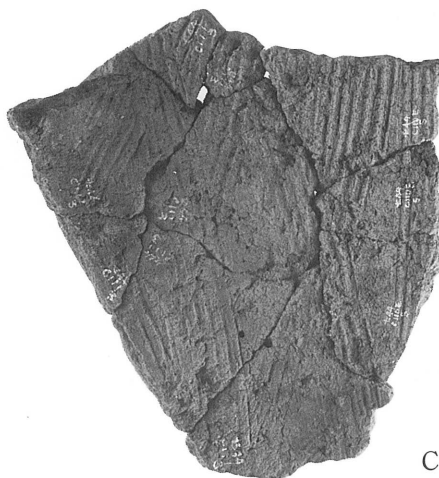
C-178



C-197



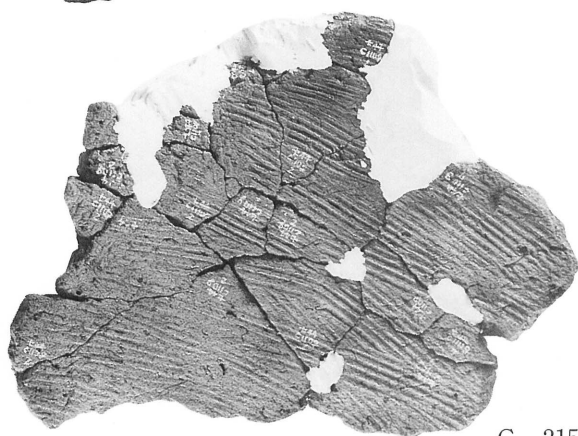
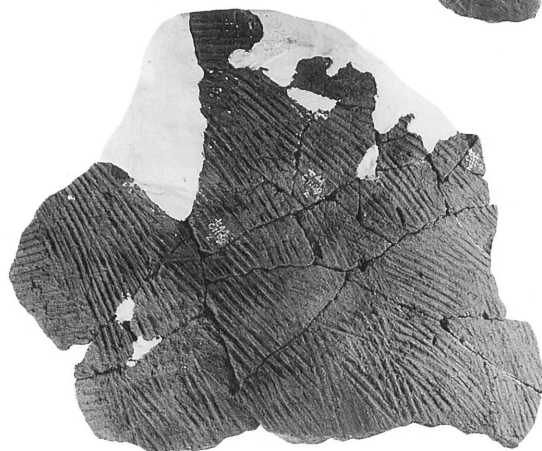
C-210



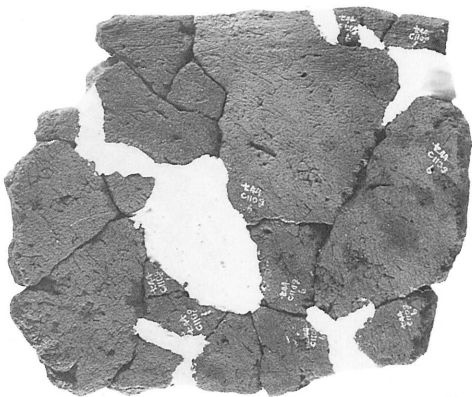
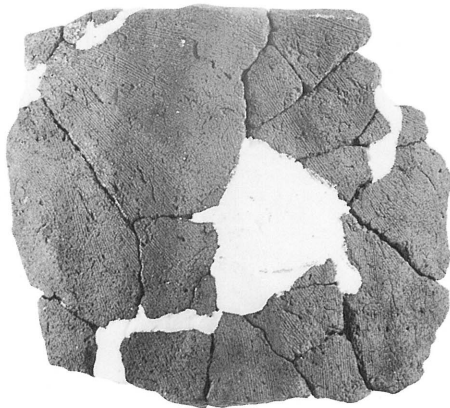
C-209



C-218



C-215



C-217



C-225



C-255



C-264



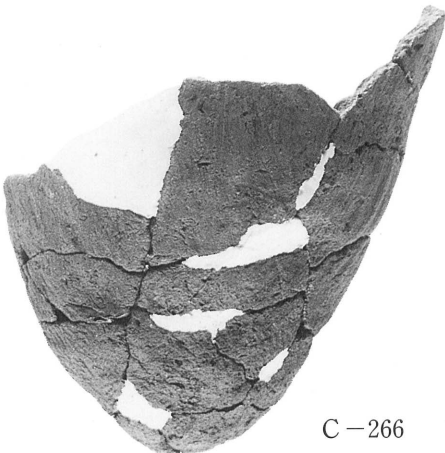
C-256



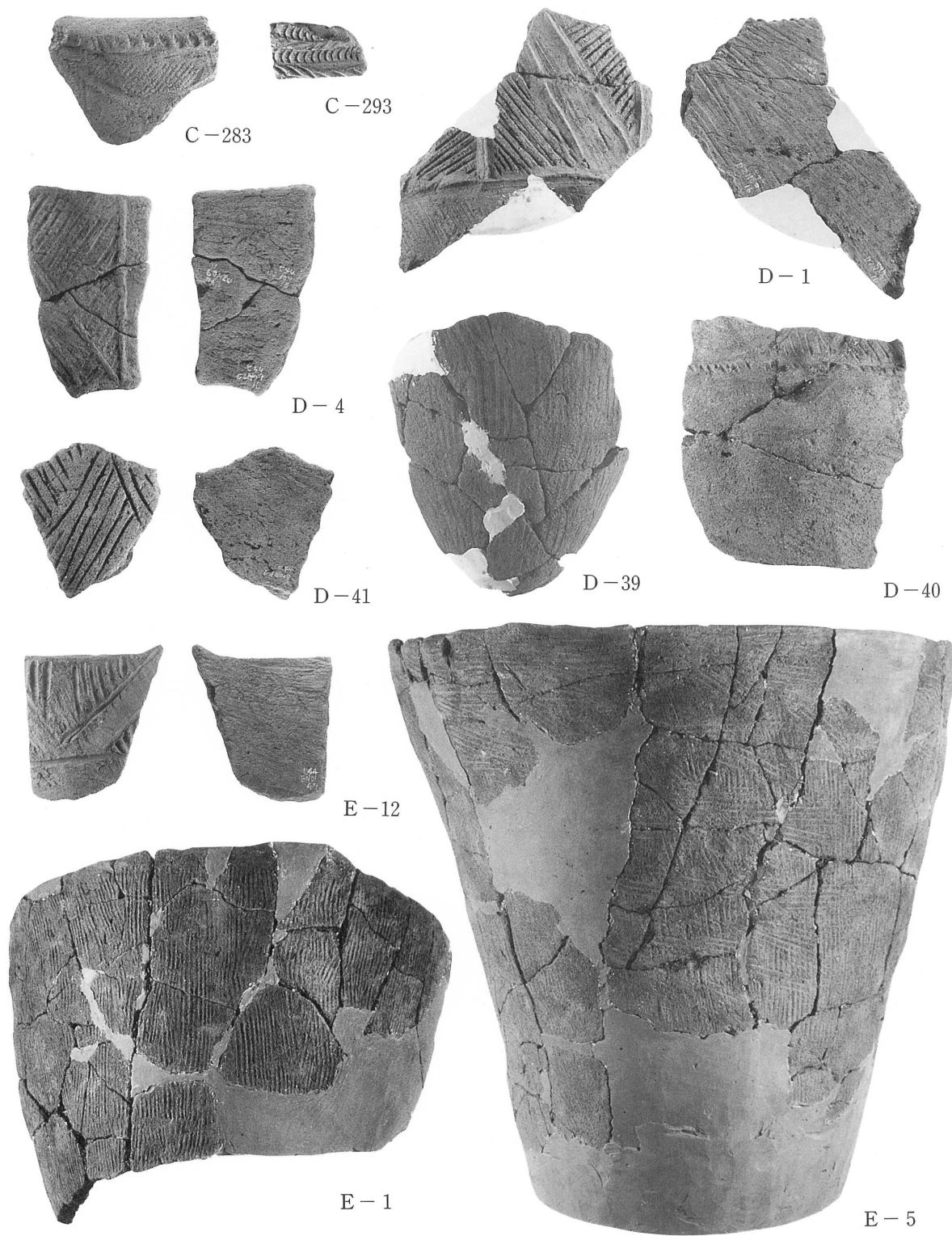
C-294



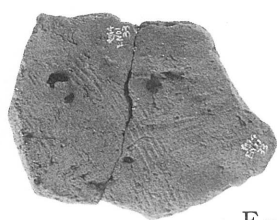
C-295



C-266



C地区No.62·201, D地区No.9·10·17, E地区No.1出土土器



E-19



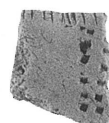
E-44



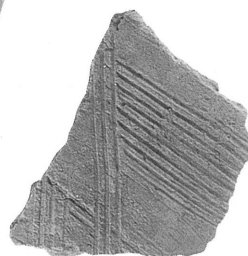
E-27



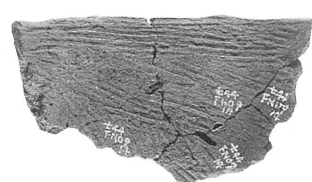
E-62



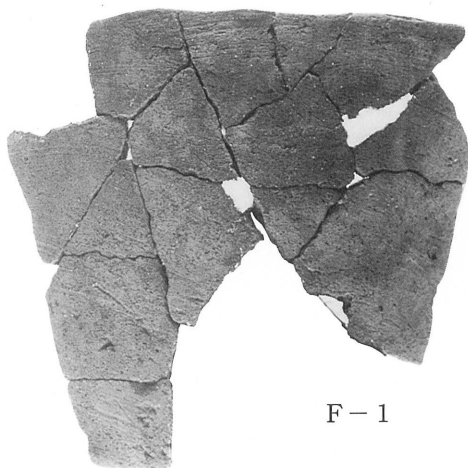
F-16



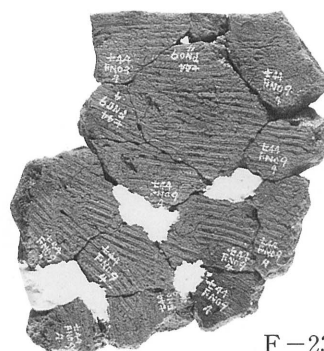
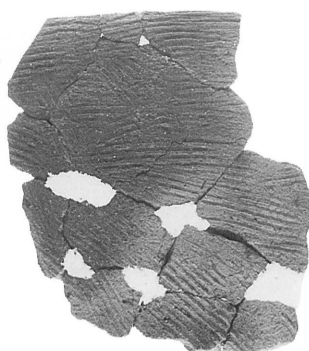
E-61



F-21



F-1



F-23



1



2



3



4



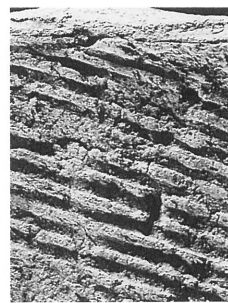
5



6



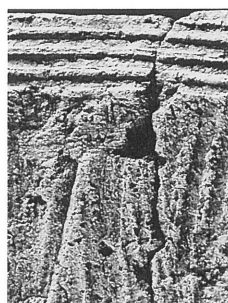
7



8



9



10



11



12



13



14



15



16

1 ~ 14 = 口縁部, 15・16 = 底部



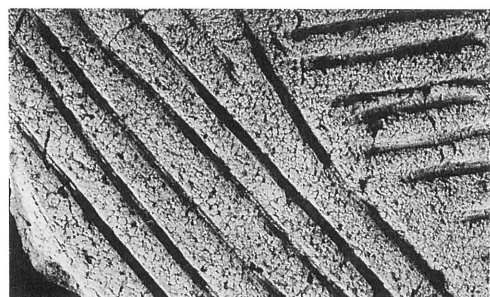
17



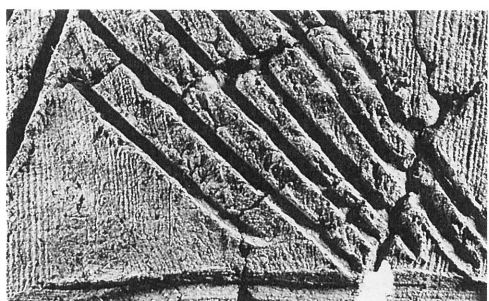
18



19



20



21



22



23



24

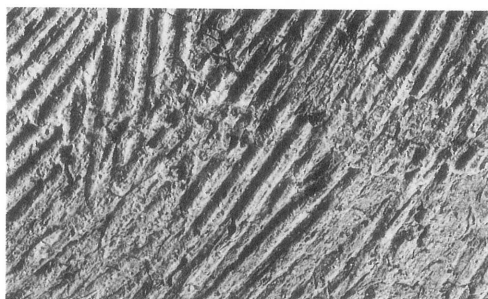


25



26

17~24=胴部文様（沈線），25・26=胴部文様（条痕）



27



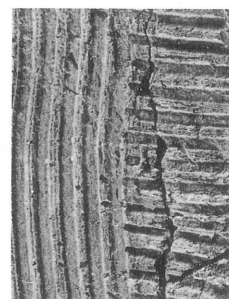
28



29



30



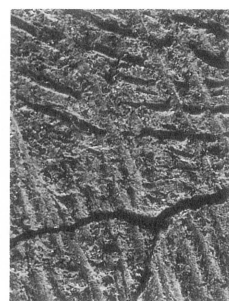
31



32



33



34



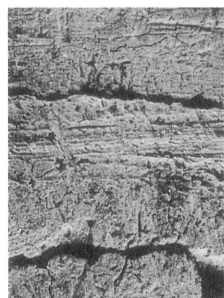
35



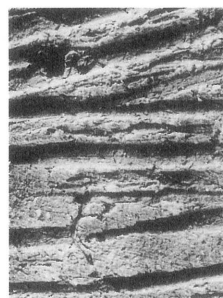
36



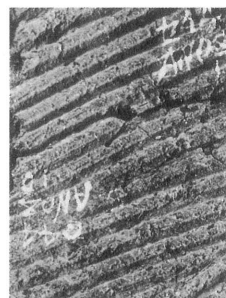
37



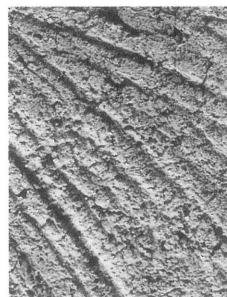
38



39



40



41



42



43



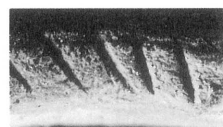
44



45



46



48



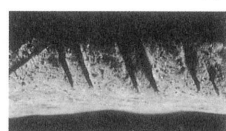
50



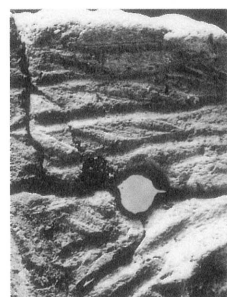
47



49



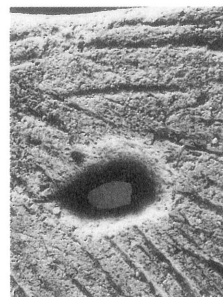
51



52



53

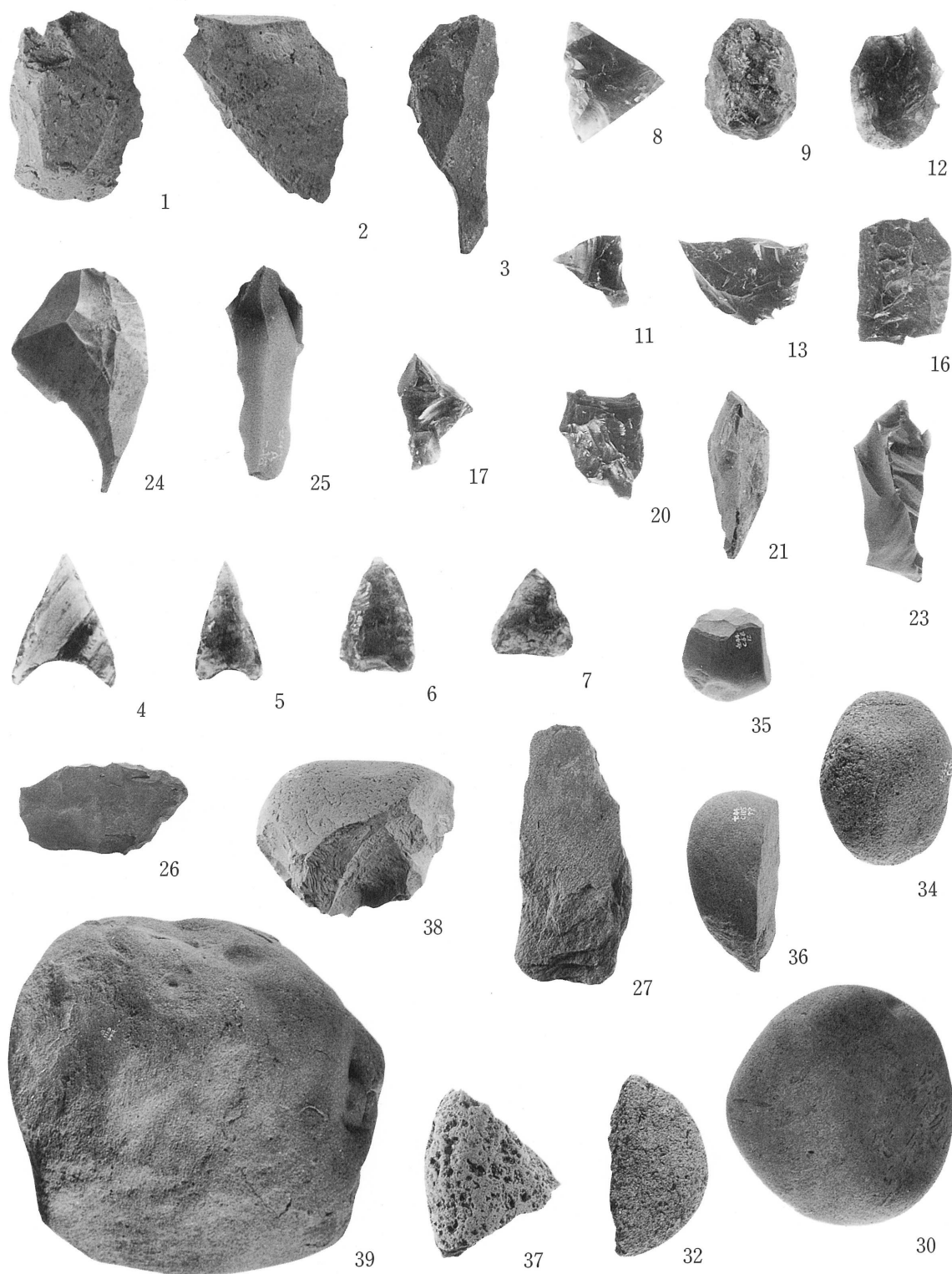


54



55

37・38＝条痕，39～45＝内面条痕（45のみ底部），46～51＝口唇部刻目，
52～55＝補修孔等穿孔部



今富大道遺跡出土石器

1 · 2 · 3 · 8 · 9 · 12 · 11 · 13 · 16 · 24 · 25 · 17 · 20 · 21 · 23 = 2/3,
4 ~ 7 = 1/1, 35 · 26 · 38 · 27 · 36 · 34 · 37 · 32 · 30 = 1/3, 39 = 1/4

—— 千葉県市原市 ——

今富大道遺跡

昭和63年3月25日 印刷

昭和63年3月30日 発行

編 集 財団法人 市原市文化財センター

発 行 市原市土木部道路建設課

財団法人 市原市文化財センター

〒290-02 千葉県市原市馬立817番地

Tel. 0436 (95) 2755

印 刷 三 陽 工 業 株 式 会 社

〒290 市原市五井5510-1番地

Tel. 0436 (22) 4348